THE CENTRAL REVIEW

中央公論

第廿二年 第三號

（第二百十六號）

此廣告により御申込の方は中央公論に依る旨御附記を乞ふ

近刊豫告

明治闇黑史は、表面の事實に耳を假さずして常に裏面の消息に注目せる明治年間の活歴史なり、權貴者と浪人、勢力者と無勢力者、强者と弱者とが感情と利害との衝突に依り暗闘せる時代推移の眞相を描寫せる社會史なり

有磯逸郎著

明治闇黑史

紙數約四百頁

上卷 には、明治新政府の創設に筆を着け、維新派と復古派の二大潮流を擧げて、公家と浪人、藩主と藩士との衝突を描き、横井平四郎の横殺、廣澤眞臣の慘殺より、愛宕事件を中心として當時全國に彌蔓せる復古派の面目を發揮す。其の前後に、圓海坊の奥羽十七藩同盟の劃策あり、雲井龍雄の叛あり、大村益次郎の襲擊を前提として、長州騎兵隊の暴動あり、掉尾の運動として丸山作樂の朝鮮計劃あり

中卷 には、征韓論破裂より筆を起こし、全國に磅礴せる士族の反抗運動に入りて、西南戰役の大破裂に筆を收めたり。其の間に江藤新平の叛あり、熊本の神風連の叛、前原一誠の叛あり、前原と連絡せる永岡久茂の思案橋事件、其の後を承け、西南戰役に至りて、士族の黨與に全敗す。然かも之を前にしては、芝增上寺の燒拂あり、岩倉具視の要擊あり、後には林有造等の政府顚覆運動あり、竹橋暴動あり

下卷 には、自由民權論を中心として、初めて我國に起りたる國民大運動を紹介す。立志社及嚶鳴社に依りて鼓吹せられたる自由民權論の勃興は、政黨の現出を促がし、然かも政黨の挫折に依りて、政界再び闇黑に陷り、秘密結社の類四方に起こる。福島事件を先驅として、群馬事件、加波山事件、秩父暴動、飯田事件、名古屋事件、靜岡事件等相繼いて起り、大井憲太郎等の大阪事件に至りて、僅に一段落を告ぐ。

潛める事象の發見は愈よ出で、愈よ新に著者をして筆を擱くに暇あらざらしめぬ、拙速は功遲に劣る、一面期に後れたる謗あるところ、其處ぞ完璧の誇の伏する所なると信ず。

發行所　東京本郷區西片町　反省社

四月一日

中央公論

發行

春期大附錄號

豫告

我「中央公論」は來る四月一日を以て春期大附錄號を發行せんとし左の諸大家より寄稿の快諾を得たり。

附錄小說

幸田露伴氏

泉鏡花氏

小栗風葉氏

柳川春葉氏

佐藤紅綠氏

尙論文に於ては現代第一流の名家を網羅せんと欲し、續々寄稿依賴中也

中央公論第二十二年第三號目次



此廣告により御申込の方は**中央公論**に依る旨御附記を乞ふ

東洋大學學生募集

來四月第二十一年度新學年開始に付學生を募集す

●中學校師範學校若は専門學校入學指定學校の卒業者は各科第一學年へ第一種生として無試驗にて入學を許す●右の資格を缺く者は第二種生又は聽講生として編入す●第壹種生は徵兵猶豫の特典あり●入學期は四月一日より三十日迄とす但し徵兵猶豫希望者は四月十五日迄に入學し且猶豫願の手續を了せざれば其効力なし●來四月には新に大學部第四學年を開設す●大學部第四年を修了し研究科を卒りたる者は學士と稱するを得●規則入用者には申込次第送呈すべし

東京小石川原町
(舊稱哲學館大學)
私立 **東洋大學**

高評增刷書類發賣廣告

東久世伯爵題●依田學海先生序

美文良材

學生之寶藏 …編 近體文章之熟語字彙 袖珍美製本

●增補訂正十五版新刷●
洋裝全二冊價金五十錢送料六錢

學生寶藏 青外
近體文章要論
井原豐作君著述
洋裝全壹冊(再版)
正價金二十錢
送料二錢

小説
劍俠
英國ホープ氏原著東京時事新報記者森皚峰譯
洋裝菊判全三冊美製本
價壹冊金四拾五錢送料六錢宛●全部合冊正價金壹圓五拾錢送料不要

美術繪はがき
元祿小袖(五葉一組)
正價金廿五錢
送料二錢
山中古洞先生新意匠畫
金銀彩色刷(新刊)

賣捌 東京神田表神保町 **東京堂**

●同四路町盛文館出張店●久留米菊竹金文堂

文學博士 村上專精先生新著

自信録

全一冊 定價金五拾錢 郵税金八錢

これ博士の新著にして又實に博士が信仰の告白なり言々己の實驗を語り句々心の奥底を披瀝す先づ筆を「人生の目的」に起して「目的の成否」を明にし「實在と我れ」「佛陀と我れ」の關係より「自力と他力」の異同に及びて之を結ぶ説て至らざるなく述て盡さゞるなし進歩せる佛教學者の見解、敬虔なる佛教信者の態度は此書によつて窺知するを得べし

文學博士 南條文雄師新著

人道

全一冊 定價金拾五錢 郵税金四錢 十冊以上一割引

人の道とは如何なるものぞ本書は博士が儒教の骨髓たる仁義五常の道より大乘佛教經典の所説とを對照し叮嚀に人道の大旨を示されたるものにして博引旁證加ふるに適切の譬喩を以てし談話體に何人にも解し易く説かれたるものなれば布教師の參考、修養の資、傳道の好施本たるべし

加藤咄堂先生著●第四版特價賣廣告

通俗講話

佛教要義

總クロース洋裝美本●紙數五百頁餘●定價金壹圓卅五錢●郵税金十錢●特價金壹圓拾錢●特價賣期限來ル三月末日迄●製本既成注文即日送本●特價期限後ハ定價ニ復ス

組織的に佛教の根本原理を示し宇宙の玄旨人心の秘奥を探り教理道德信仰の三方面より此大宗教の面目を明にしたるものにして文章平易何人にも解し易き好著なり今回第四版を刊するに當り前記の期限内特別廉價を以て江湖に頒たんとす請ふ速かに購讀あらんことを

發行所

東京京橋築地二ノ卅 山中孝之助 振替貯金參九六〇番

仝小石川區原町六 鷄聲堂書店 振替貯金壹參五參番

仝本郷眞砂町卅五 大樹園 振替貯金貳七八五番

京都木屋町二條 貝葉書院●仝五條麩屋町 法林館●東京芝露月町 鴻盟社●仝飯倉 森江書店●仝神田御茶ノ水 光融館●



第二十二年
第三號
二百十六號

憲政本黨を評す

（一）

憲政本黨の苦境に在る十年、最も世の同情を惹くべくして而して却つて動もすれば嘲笑の因たるは何ぞや、曰く一定の方針無ければ也。

清浦奎吾氏は曾て山縣侯の在世久しからずして、其の竟に適從する處を失ふを慮り、早くも研究會（貴族院の大團體）を提げて大隈伯に投じ、憲政本黨と事を倶にせんと計りたるとありき。當時大隈伯は貴族院の一角と款を通ぜんと欲し、萬金を散じて賞花待客に日も惟れ足らざりしと雖も、履を折りて之を迎ふるには至らず却つて冷然として應ぜざりき。其の然る所以のものは、清浦氏の態度の餘りに奇變に過ぎて、其の心事の容易に端倪すべからざるものありしが故なるべし。果して清浦氏は伊藤侯より皮肉

なる罵詈を加へられ、山縣派の少壯家より激烈なる評語を得て終りたりき。

然るも憲政本黨は決して藩閥派に通ずる意思なきものにはあらず、自由黨が長州派に結べるに競ふて曾て薩摩派に結び、松方伯と事を共にして苦き經驗を嘗めたるとは餘りに古し。近くば桂伯の內閣に結托せんと密かに交涉したることもあり。桂伯が政友會と結托を重ぬるの便宜なるを度りて之を謝絕するや、憲政本黨は議會に極力桂伯の內閣を攻擊したりき。更に近くは西園寺內閣の成らんとするや、憲政本黨の首領等は、內閣の一二席の或は分與せらるべきを豫想したるが如く、之を援助すべき態度を表示したりしに拘らず、事の豫期に反するに及んでは、議會に於てまた力を極めて攻擊者の地位に立ちたりき。政界の策士は評すらく、若し憲政本黨にして最初の豫約を守りて依然西園寺內閣を援助し、殊に鐵道國有案を贊成せば、政友會時に或は大同俱樂部を疎外して、却つて憲政本黨に近接するも亦知るべからず。果して然らば是れ西園寺侯をして山縣系と手を切らしむるなり、少くも侯をして勢ひに驅られて山縣系と遠ざからしむるなり、政局の變化は實に之より胚胎し來るべし。而して政友會と大同俱樂部と疎隔し、西園寺派と山縣系と冷淡なるを待て、憲政本黨突爾として彼等と同等の地位に轉じ立たば、西園寺侯と政友會とをして、全く孤立の地位に陷るに至らしむべく、憲政本黨乃ち能く現內閣の死命を制し得て、所謂政局の發展なるものも意のまゝなるを得たりしならんと。

〔二〕

鐵道國有案に就ても、憲政本黨は全然失敗を繰返したりき。

憲政本黨にして、眞に戰後經營の要務の產業發達にあるとを主義とする證據を擧示せんとすれば、鐵道國有案には寧ろ進んで贊成を表すべかりし也。何者當時實業界の思慮あるもの丶多數は、本案の產業發達上頗ぶる切要なるとを唱導したれば也。本案の調製者は桂伯の內閣といふよりも、寧ろ此等實業家の意向なりしと疑ふ可らざる事實なれば也。

殊に大石正巳氏の如きは。鐵道を國有とするとの兵要上產業上に必要なるとを唱へ、數年前既に之を公表したるとありしに拘らず、其の西園寺內閣の提案なるがため、單に西園寺內閣に反對するがために、極力之を攻擊したりしは、啻だ信用を世に爽へるに止まらず、最も不利益なる結果を受けざるを得ざりき。

京童は曰ふ。大隈伯は鐵道國有案の前途を見損じたるため、投機市場に手痛き失敗を招き殆んど家計上に致命的大負傷を蒙むりたりしと。然れども大隈伯の損せる所何ぞ斯の如きに止まらんや、伯が竟に慨然として憲政本黨の總理より去らざるを得ざりし一原因は確かに鐵道國有案に存するにあらずや。

（三）

憲政本黨中に改革派と自稱するものあり、曾て曰く。我々また國事に意見無きに非ず、而かも常に大隈伯が早くより輕卒に贊否を斷言して言質を取らるゝがために、我々多く我々の意の如く進退する能はず、心ならざる方向に走るとあり、是れ總理專斷の弊にして、殊に言語輕忽なる總理を戴く弊害なり、我々は竟に多數論決の制度を採らざる可らずと。是れ大隈伯に對する一種の不信任票決なり。

然りと雖も是れ彼等全部の意思に非ず。然り、彼等の一部には心より斯く感ずるもの絕無なるに非

るも、其の多數は寧ろ大隈伯を去つて他に就かんとするのみ。他とは何ぞや、政權に接し得べき新首領是れ也、彼等は斯くして兒玉源太郎子の旗下に馳せ參ぜんとは謀りし也。

後藤新平男は一種の抱負を有し、彼の櫻田倶樂部なるものを機關として、政界少壯の徒を操縱し、且つ憲政本黨中の某々等と通じて兒玉子を起さんと企てたりき。兒玉子にして起てば、一昨秋九月の燒擊事件によりて信望を天下に喪へる山縣系も、子の赫々たる武名の下に再起するを得べく、少くも清浦、大浦、曾禰、寺内の數氏は出づべく、隨つて大同倶樂部は其の物なり、政友會の一角も亦必らず離れて來り投ぜん。乃ち西園寺内閣の如き鎧袖一觸して倒し得べく、貴族院は意のまゝのみ。衆議院にも亦多數を制するや必せりと做し、其の計畫献立幾んど成れるが如くなりき。吾人の知る限りに於ては當人たる兒玉子が果して此の計畫を聞知して之を承諾したるや否やは明確ならざるも、斯の如き謀圖の畫策せられしや事實なり。而して憲政本黨の自稱改革派なるものも、全く之に出て政權近接の本望を成就し得べしと信じ、私かに卅九年の冬期議會の來るを待望したりき。

然るに兒玉子の卒然逝去したるによりて、彼等の計策は全然畫餅となれり。其の後黨中の或るものは、此の計策を繼承する意旨を以て、私かに前海相山本權兵衛男に勸むるに新内閣の首相たるべきを以てしたりと傳ふ。推度精確、一進一退を苟くもせざる男が果して之に應ぜしや否やは吾人未だ聞知するに至らずと雖も、亦以て憲政本黨が政權に近接せんとするの急なるを窺ふべき也。

此の改革派なるものは、爾來不思議の進化（寧ろ退化か）して、單に犬養毅氏を排斥するものとなり

ぬ。初めは鳩山和夫氏と密議し、次て屢々木挽町邊の料理屋待合に會合し、幹部の政務委員專制々度に代ゆるに、公選協議の制度を以てすべしと唱導するに至りぬ。

彼等が犬養氏を攻撃する理由は何ぞ、其の人格に服せざるか、然るも氏の清廉潔白なる、實に今の黨人の模範たり。其の憲政本黨を率ゆる施設の宜しきを得ざるあるか、然るも氏や大石正巳氏と終始同一態度を取れるに視るに、大石氏を謳歌する彼等にして獨り犬養氏を非とする理由はあらず。犬養氏排斥の原由は他なし、氏の辛辣なる惡罵を怨むがためのみ、然り、原由は斯の如きのみ、氏が無遠慮に人も無げなる皮肉冷罵を加ふるに對して一たび思ひ知らせんと欲するのみ。

政界の事感情に支配せらるゝ少からずと雖も、一世を率ひんとする政黨者流にして自から斯の如きは寧ろ甚だしく嗤ふべきに非ずや。

且つ記せよ。彼等は幹部專制の打破を標榜して、暗に大隈伯の引退を要請しながら、伯が蹶然として總理を去らんとするや、彼等は瞠然として自失するを禁ぜざりき、彼等改革派の主張するもの抑も那邊にありや、單に政權に近接するの外、一の能事無しと爲す乎。

〔四〕

所謂改革派なるものゝ意思(?)は、尙ほ着々勝を制し行くが如し、何を以て然かいふ乎。

第一大隈伯の總理退隱によりて、改革派の多數また一時色を失へりと雖も、而かも伯が表面總理の地位に在らずなりしは事實也。此の事實は將來或は山縣系の人、若くは他の意外なる人を迎へて首領に推

裁するの動機となるべく、改革派は之に由て以て所謂政局の發展なるものを遂行し得べしと做さん。

第二大隈伯は憲政本黨大會の席上に於て、財政の前途を悲觀し、痛く政府の四十年度豫算を攻擊し、且つ軍備充實の急にす可らざるとを極説したりしと雖も、大會の多數は、軍備反對案の骨子を拔き去りて、僅かに其の縫體せる形骸のみを存したりき。

第三秋田派新潟派が四十年度豫算を賛成し軍備充實に同意するを以て憲政本黨の面目を傷くるものと爲し、脱黨を賭して再議を求むるや、其の結果は意外にも犬養氏の決然たる言明によりて、黨の大方針を確定して積極主義を取るとなり、鳩山氏は衆議院に於ける豫算案の討議に於て公然政府案に賛成し、其の軍備補充案に同意せるのみならず、政府の鐵道港灣等に關する施設を過小なりとし、寧ろ内外債を起して多くの費用を投じ、以て速かに大計畫を成すべしと演説したりき。

此等の態度、方針、主張は實に山縣系と結托するにも、他の軍人政事家に結托するにも、實に好良なる理由と爲るべきもの也。改革派は之に由て自由に行動し、公々然として他の軍人政事家其の他と結托して、以て政權近接の宿願を成就し得べしと做さん、是れ抑も改革派の所謂勝利にあらずして何ぞ。

〔五〕

吾人叙して玆に至て坐ろに憮然たらざるを得ざるものあり、最早多言の要なし、唯だ單に問はん、憲政本黨今に至つて存在の理由安くにかある、寧ろ解黨して政友會に投じ、若くば大同倶樂部に走るの智なるに若かざるにあらずや。常に一定の方針なく、永く苦節を守るに耐へずして漫りに政權に近接せん

と欲し、竟に全く政友會大同倶樂部と同一方針を執るに至て、抑も何の必要ありて一黨を成すや。

豫算案の成立

六億餘萬圓の歳出を計上せる明治四十年度豫算は、竟に一錢一厘の増減を加へられずして衆議院を通過したり、是れ實に近時稀有（敢て絶無とは曰はず）の例なりとす。

豫算委員長の報告によれば、各省要求額中全く削減を加ふべき餘地なかりしに非ず、多少懸直と認むべきもの絶無なりしには非ずと雖も、曾て削減を加へざりき。此等は政府者誠實に歳計を運行する以上必らず剩餘金として次年度に殘るべきものなりといへり。衆議院先づ自から誠意を披き、政府をして之に違はざらしめんとする其の用意や頗ぶる良し、思ふに信認する政府に對しては素より然らざるを得ざるべきか。

夫れ衆議院に多數を有するの結果は、常に斯の如くなるべし。他の政權を有せんとするもの、及び有するもの、明かに此のレスソンを看取するを要す。

貴族院も亦衆議院の如くなりとは吾人素より推度すると能はず。西園寺内閣は多く貴族院の味方を有せず、僅かに山縣系の好意によりて其の敵對を受けざるに過ぎざれば也。否、未だ全然貴族院中の或る

者（寧ろ山縣系中の或る者）は未だ全然西園寺内閣に敵對せざるも、部分攻撃（殊に内務省に向て）を行はんとする感情頗ぶる旺盛なれば也。貴族院は畢竟今の内閣に取て小姑なれば也。

若し夫れ豫算案其のものに就ては、吾人多くの異存を有せず。蓋し何人をして局に立たしむるも、之より遙かに優良なる財政を運行し得んと幾んど望む可らざるを以て也。

軍備の補充も海陸軍當局は看て以て不十分なりと做さん、最も多くの費額を投ぜられし軍備既に然り、況んや交通機關を管轄する遞信當局をや、文敎を管轄する文部當局をや、産業を管轄する農商務當局をや。總ての當局皆必らず不十分ならん、然るも是れ已むを得ざるのみ。日露大戰の後を承けて、諸般の政務の膨脹するは避く可らざる勢ひ也。然るも今また俄かに租税を增課すべきにも非ず、漫りに外債を起すまた不可なり。殊に民心皆休養を希ひ、而して經濟上の事自然に發達するを期して、また漫りに人力を以て波瀾を捲起すことを避けざる可らざる時に方つて、輕々しく財政上に新手段を加ふると決して宜しきを得たりとす可らず。幸ひに諸種の租税の收納せらるゝもの漸く增加の兆候あるも、果して堅實なる傾向なりや否や未だ俄かに判知すべからず。故に戰後兩三年は歳計に激變を加へず、徐かに民心を休養せしめて兼て經濟上の趨勢を視るを智なりとす。否、國家を擔當して眞に過なきを期せば、這段の决心なかる可らず。故に現内閣が成立後二年にして尙ほ財政上に何等かの新施設を行はざるを以て、單に一時を彌縫し糊塗するものとし、其の無經綸なるを罵るが如きは、頗ぶる苛酷の論のみ、然らずんば無責任なる書生の壯語のみ。今日の要は假令彌縫し糊塗するも、暫らく中外の政務を荒廢せしめず、徐かに

民心を休養し、經濟界自然の趨勢を見定むるにあり。斯の如きと二年三年の後、民心活動を欲し、經濟界の形勢定まるを待つて、徐かに財政上の大計畫を立つること、寧ろ智者の事にして、而して國家に親切なる政事家の爲にあらずや。

看よ。新會社の發起せらるゝもの日に相踵ぎて、今や其の吹聽資本の總額實に二十億を超え、二十五億に達せるにあらずや。此の內の多數の水泡會社たるや勿論にして、悲慘なる反動の來るや必至の勢ひ也。然るも此の反動をして成るべく小ならしめ、悲慘の程度をして成るべく輕からしむるがため、財政上に新たなる計畫を斷行して以て經濟界の調子を刺激し攪亂するが如きとは乃ち謹んで之を避けざる可らず。糊塗彌縫と雖も今日に在ては乃ち忍ばざるを得ざるのみ。

吾人をして無遠慮に想像する所を逞くせしめば、政府が財政上に新計畫を立つるの期は多分明治四十二年度なるべし。各黨派の形勢は之を今日に豫測するも多く違ふとなしと雖も、明春總選擧の後は、形勢一層明白也、而して民心また活動を欲し、經濟界の形勢も大に定まるべきを以て、玆に糊塗彌縫を捨てゝ斷然新計畫を立案すべし。始め處女の如くなりし西園寺內閣も玆に至つて竟に脫兎たるべきか。

夫れ戰時稅は到底悉く永續せしむ可らず、之を改廢すべきと勿論にして、而して總ての租稅賦課法を根本的に改良して、公不公、重不重なからしむるとも亦必要也。政費の膨脹を補定し收支相償はしめて永久に我が財政の基礎を鞏固ならしむると亦甚だ必要とす、所謂財政上の新計畫は是れ也。

然らば則ち財政上の新計畫とは何ぞや、新たなる租稅の賦課か、改定稅率の增加か、抑も又砂糖專賣

か、將た酒造專賣か、或は協定稅率の引上か、或は其の總てか、吾人は豫言者に非ず、未來記を語る資格無きのみ。

黨人獵利の弊風

獵官の熱僅かに熄みて獵利の風更に大に盛んならんとす。吾人は前者を憎む、而して最も後者を憎む。獵官は誠に陋なりと雖も、其の欲する所の名譽にあるがために、尙ほ聊か恕すべきなきにあらず、若し清國官吏の如く、官を得るは利を得るがためにして、官職を利用（寧ろ害用）して賄賂を貪ぼり、請托を求めて以て巨萬の富を積むを志とせば、官を爲すは是れ商を爲す也。否、商たるは正し、官にして商を爲すは賊也、卑むべき賊也。我が黨人の官を得んとするや、唯だ正五位を以て鄕關に誇らんとするのみ。勅任の履歷を以て家門の私史を粉飾せんとするのみ。最も陋なるものと雖も俸祿によりて以て衣食窮乏の厄を免かれんと欲するのみ。官を以て利を網せんとするには非ず。

然るに黨人獵官の風此の三四年來著るしく顯はれざるを以て、吾人は政黨のため、政治界のため、好習俗の漸く生ぜんとするを悅びたりしに、計らざりき、彼等獵官に替ゆるに獵利を以てせんとし、今や其の勢ひ猛然として當る可らざるものあらんとは。

獵利は即ち獵株なり。今や株式會社の發起せらるゝもの日に十を以て算し、而して其の發起人は必らずしも出資の産あるにあらず、多くは發起株と稱して資本を拂ひ込まず、或は其の權利株の價を生ずるを俟つて之を賣り放ち、以て一錢を費さずして多くの利を得んと欲す、俗に所謂濡手に粟を掴まんとするものよりも更に甚だしき暴利を得んとする也。故に其の會社の眞に成立すると否と、其の事業の眞に起ると否との如きは素より問ふ所にあらずとす。隨つて彼等發起人なるものが、世上を瞞着して、其の事業を甚だ有望且つ確實なるべく吹聽せしむるがためには、多くの新聞記者に其の利を分つに止まらず、多少政權と結託するの必要あり、代議士の之に加はると、又は代議士の贊成と歡心とを得るに力むるや言を俟たずとす。玆に於てか黨人等乘じて以て發起株權利株の分配を求め、濡手に粟の暴利を得んとするなり。

吾人の見聞する所によれば、今の政黨事務所なるものは、全く權利株の募集分配所の如し。黨人の口にする所は國家の豫算案に非ず、人民の請願に非ず、法律案建議案にあらずして、全く權利株發起株のとのみ。黨人の頭顱集まるもの十數、數十、百、百餘、雜然として相語り混然として相談ずる所のもの、總て株の事にあらざるなし。

傳へいふ今の衆議院議員にして、全く株に關係せざるもの、曰く大石正巳、曰く犬養毅、曰く江藤新作、曰く武富時敏、曰く島田三郎、此の數氏者に過ぎずと。

又いふ、農商務省山林局は、曾て黨人爭ひ至りて山林原野の拂下を求むるがため、局吏皆應酬に忙殺

せられたりしが、今や幾んど一人の到るを見ず、彼等山林原野の拂下よりも、株を得るの簡にして而して利の多きを好めるが故なりと。

今期議會に議員皆幾んど倦怠の色あり。議會をして平々淡々、一の奇趣なく一の波瀾なからしむるもの、畢竟世間を聳動すべき問題無きに由るべしと雖も、議員の總てが株式の利を獵するに急にして、また他事を顧みるの遑なく、他事を顧みるの心なきと、また有力なる一原由なるべし。

斯の如きは政界の墮落なり、政黨の腐敗なり、慷して以て慨すべし。之に激して起ち、政界廓清を呼號する人々の間にすら、尙ほ株に由て衣食するもの、全然痕迹を絶たざるを視れば、獵株獵利の風や、滔々として幾んど及ばざる所なからんか。

然りと雖も驕奢の後には破壞來る、此の腐敗墮落は神人の共に怒る所、竟に大なる革命を避けんとするも得べからず、吾人は實に猛風疾風烈風によりて此の臭氛穢氣を一掃せんことを望む。

教界時評

金子筑水

從來の宗教界、即ち佛教界並びに基督教界が、慨して萎靡不振の狀態に在る事は、今は誰も疑ふ能はざる事實であらう、此等兩教が新しい精神に復活して新代の要求に應ずるにあらずば、早晩全然生命なき形骸に化し去るであらうとは、新代の人士に普通な觀測である。從來の宗教界は兎もあれ、我等に更に適切な問題は、今後我が國民（就中新代の國民）の裡に宗教的精神は漸次强まり行くであらうか、たゞしは宗教的精神の勃興といふが如きは單に一部人士の夢想に過ぎぬてあらうか、それが當面の大なる問題である。

たゞし玆に謂ふ宗教的精神は、必しも既成宗教の精神を意味せず、新代の國民の安じて而も熱心に信頼し得べき最終最後の確信（目的）に燃ゆるの精神、之れがためには一切を手段とするに吝ならざるの大目的に熱するの精神を意味するのである。遠き將來の命運は我等に明らかならざるまでも、斯かる意味に於ける宗教的精神は、絶對的に我が國民に望ましい事ではあるまいか、斯かる精神に燃えてこそ、初めて我が國民は大自覺の境に進んだと言はるべきてはあるまいか。

されど目下更に々適切な問題は、新代の國民の裡に現に果たして斯かる宗教的精神が假令徐々になりとも昂進しつゝあるであらうか、昨春頃の一部青年間の宗教熱は、必しも一時的なものにあらずして、多少宗教的精神發達の徵候と見るべきものであらうかといふにある。此の問題に關しては、世間當時兎角の批評もありしかど、今日となりては大體一班國民は宗教に冷淡にして、現に宗教的精神が徐々發展しつゝありといふは疑はしいといふ判斷に皈着せるらしい。素より斯かる判斷は憶測に過ぎず、人々見る所によりて判斷を異にするは已むを得ない。大體より言へば、一班國民が

尙宗敎に目ざめざるは事實にして、新代の國民の裡にも現に漸次宗敎的傾向が一班に强まりつゝありやは頗る疑はしい。されど少なくとも一部有爲な國民の裡には、暗々裡に斯かる傾向が涵養せられて、最早拔くべからず奪ふべからざる一種の確信が、徐々其の力を强めつゝあるは看過すべからざる事實であらう。故に全體より言へば、眞の宗敎的傾向は皆無なのではない、むしろ當面生存競爭の裏面には、熱烈な一種の精神的傾向が潜在して、それが周圍の境遇のために壓迫せられて居るといふが事實であらう。故に我等は一班將來の宗敎的精神の發達に就いては微塵も疑はない、事實一班國民の宗敎に對する態度は十年前とは頗る趣を異にして居る、たゞ現在此の精神の發展が頗る緩漫にして、動もすれば一班には萎靡沈滯の惰色ある事をば否定し得ないのである。

前月の『早稻田文學』に島村抱月君の意見として、現代を宗敎的になすには、先づ之れに文藝を味はしむべしといふ論が見えた。我等も至極之れに同感である。宗敎の半面は藝術趣味にして、藝術趣味を缺ける宗敎は圓滿な宗敎ではない。宗敎に使へんがために文藝は世に産まれたるにあらざれど、文藝が吾人を宗敎に導くは疑ふべからざる事實である。近時泰西の識者が藝術を以て暫く將來の宗敎のために資せんと叫びつゝあるも同じ道理であらう。故に文藝の發展は、宗敎的精神涵養のためにも願はしい、就中目下の趨勢上最も願はしい、文藝の發展はやがて宗敎的發展に影響し、宗敎の發展は文藝の發展に待つところ多大である。

されど文藝やがて宗敎にあらず、文藝は吾人を宗敎の門戸まで導けど、其れ以上は吾人みづからの努力もて其の堂に入らざるべからず。來しかたを顧れば花咲き鳥歌へる美しき野原なり、往くてには渺々漠々不可測の深淵あり、文藝は吾人を此の危險なる斷崖の上に殘し去る。故に我等は文藝の手引の外に、更に現實な辛酸痛苦を甞める必要が有る、現實な意志の努力を重ぬる必要がある。我等の見る所によれば、現時眞の宗敎的傾向の發展の遲々たるには種々複雜な原因がある、

眞の宗教的努力を妨害する複雜な障魔がある、此の障魔に打勝つにあらずば、眞の宗教的精神の發展は覺束ない。根底的に言はゞ、現代人士の要求を滿足せしむべき宗教的天才の缺乏は、一班宗教的意識の高まらざる直接な原因であらう。されど我等は漫然斯かる天才の出現を待つべきにあらず、むしろ斯かる天才を産出だすの素地を造るべきである。然らば宗教的精神の發展を妨げる障魔は何々であらうか。我等は其の重なるものを數へて、こゝに三大障魔あるを記せざるを得ない。

第一障魔は極めて古きものにして、而も今日形を變へて更に大なる勢力を以て吾人にせまり來たれる障魔である。我等は殊更此の第一障魔の名を揚ぐるを躊躇する、蓋しその餘りに明白にして、其の名を揭ぐるだに嘲笑を招く傾がある。されど我等は此の障魔にむかひては、實は普通に思惟せらるゝよりも、更に大なる識見と覺悟とを要するのである。斯かる障魔とは言ふまでもなく黃金であらう。思ふに將來の宗教は、一概に物欲を杜絕せんとするものにあらず、むしろ其の相當の價値を認め行くものであらう。されど純粹なる黃金崇拜と佛神の崇拜とは兩立しない、必や一方が他方に從屬せらるゝにあらずば、宗教的精神の發展の覺束ない。黃金が如何に今の青年の元氣精神を腐蝕しつゝあるかは、蓋し豫想の外にあらずやと疑はれる。彼等もと黃金崇拜者にあらず、されど黃金のために苦むには彼等は餘りに怜悧である、斯くして彼等は必ならずも次第に黃金のために腐蝕し去られるのである。嘗ては彼等が偶像たりし胸中一片耿々の精神も、次第に當面の利欲のために磨滅せられて、後にはむしろ前きの狂熱をみづから嘲るまでに變るのである。我等は必しも黃金を捨てよとは言はず、されど黃金の前に跪くは神佛に背を向くる所以なるを疑はない。我等東洋人の西洋人にむかひて傲とせる所は、一切の物欲が一片偉大なる精神のもとに從屬せられたる點に存したのである。我等は此の美風が明治の照代に於て次第に消磨せられんとするを見ていと惜しく感ぜざるを得ない。今の青年は斯かる障魔に對して、堅固なる決心と覺悟とを要

すべきではあるまいか。之れがために胸中秘密の精神を腐蝕せらるゝに至らざる堅固なる決心を要すべきではあるまいか。そこに我等は一種慘烈な奮鬪を要すべきではあるまいか。

第二障魔は宗教的精神養成の適當な機關の缺乏といふ事に歸着する。宗教的精神と雖も、他の心的現象と一班、一と通りの補助養育を必須とする、適當な養育法を怠らば、折角の精神も未發の姿のまゝに衰退するを免れない。然るに今の佛教會又は基督教會は、新代の宗教的精神の培養機關たるには餘りに形質を異にして居る。新代の國民は其宗教的飢餓を癒さんとして、試に佛教會又は基督教會に這入つて行く。然るに彼等がそこにて見聞する所は、既に久しく生命を失へる古びたる、又は將に腐敗せんとしつゝある哀れな形骸に過ぎない、新代の國民には全然無意義な虚禮に過ぎない。彼等は此古びたる屍體に接して、却りて其一種名狀すべからざる臭氣に且驚き且失望し、所謂非宗教家のむしろ宗教家に優れるを見て、遂に前きに胸中に秘めたりし一片貴き精神まで呪咀するに至るのである。本誌前號に松本文三郎君が一班教會の萎靡沈滯を說いて、其の輓回策は宗教大學を設立して有爲の宗教家を造るにあると論ぜられしは、深き意味ある事と思はれる。たゞ我等の杞憂に絕えざるは、佛教家の設書せる佛教大學、又は基督教徒の設書せる神學校が、果たして有爲な宗教家を造るに適當せりや否やである。特に一定の宗教家を造らんとして建てられたる大學が、果して新代の國民の要求する如き宗教家を造り得るやは頗る疑はしい。我等はむしろ宗教學校らしからざる眞の宗教學校を望まざるを得ない。

されば今の青年中佛教會又は基督教會に行かざる者は、自立以て宗教的精神の發育に努めざるべからず、而してこは今の時勢に於て頗る難事なるは明白であらう。我等は今の青年が互に相結合して自助の工夫を取らん事を切望せざるを得ない。宗教家ならざる者の宗教會の如きは、最も望ましい工夫の一てある。

第三障魔、こは一言には辨じがたい、而して此の點

に關しては深く讀者の注意を請はざるを得ない。本來信仰は一面より言へば堅固なる意志の力である、固より確乎たる信仰の成立するには、單に意志の力のみならずして、斯かる意志の力の生じ來たる順序が無ければならぬ、されども一旦信ぜる所は、飽まで強く之れを維持し、飽まで之れを現實に爲し得る堅固なる意力が無ければならぬ。不幸にして此の意力を缺かんか、幸にして一たび得たる信仰も、忽ち雜駁な疑惑、躊躇、狐疑、逡巡のために、其の固有の光を放たずして滅するであらう。信仰の力の不確實なるは、一面より言へば、意力の不確實なるに基く場合が多い、シエクスピヤがハムレットの性格は、まさに此種のタイプと見做さるべきであらう。知識複雜となり、感情精微に發達して、而も意力の之れに伴はざる場合が此の種の性格を現はすのである。ハムレットが此弱點はまた實に現代の青年に有りがちな弱點ではあるまいか、識見情緒共に發達して、之を實現する意力を缺けるが、新代の國民に有りがちな缺點ではあるまいか。若し果たして然りとせば、此の弱點やがて宗教的精神發達の大障魔にはあらざるか。信仰は意志である、意志なくして信仰は無いのである。

たゞし我等は必しも盲目的な信仰の意志を奬勵するてはない。我等はあらゆる場合に於て適當に意力を鍛錬する事を努め、而して宗教上の信仰の上に、おのづから其の意力が應用せられて、因つて堅固なる宗教的精神の發達を期すべきである。我等はこゝにも深大なる戰闘の苦痛を豫期せざるを得ないのである。(完)

積極的節儉

(地方の知人に與ふる書面)

志賀重昂

謹啓、昨今の事業熱勃興に付、會社の濫造なりなヽ取り〳〵の杞憂論も現はれ候得共、全く國民が新鋭の氣象勃々たる反映に有之候へば、假令其間に

干の不堅固なる分子有之候とても、大體の上より觀下すれば國家の進運の爲め大に慶して祝すべき現象なりと存候。乍然經濟上に於ける此新鋭の氣象と共に日本國民の間に養成致度は節儉の觀念に有之、否な人々個々將た社會一般節儉の思想を養成し是非とも之を實行致させ度義に御座候。偖節儉と申せば單に衣食住を省く事のみを申傳へ、太宰春臺、賴山陽さては三省錄の著者志賀理齊の意見も歸する所衣食住の節儉に有之候得共、小生の節儉とは衣食住を省けなど申す義には毛頭無之衣食住を節儉すべしなど丶申すは單に消極的の節儉に有之、小生の取らざる所に御座候。例へば此米は炊て殖へる故儉約になるなど丶申し候へ共、米を炊て殖へのるは單に其米が水を吸收するの多量なる故に有之、殖へるとて喜ぶは唯だ水の殖へたるのみにて米の中にある滋養分は元の儘にて何等の增減を致さゞる義に有之、消極的節儉を喜ぶは此米の殖へるを喜ぶと同樣に有之候へば、果して珍重すべき義には無之と存じ候。小生の諸君子に希望致候義は此等と全く相反し積極的節儉の方法に有之、「住」の所謂節儉より壁の破れて黴菌の養成所となりたり、家屋の不完全にして病氣を醸したり、燈火の暗くして近眼となりたり、「衣」の所謂節儉より衣服の粗薄にして健康を害したりなどするは聊かだにも欲せず、寧ろ美衣美食美住して腦力を增し、氣力を益し、肉體を肥し、筋骨を堅くし、以て能く働き、以て金を儲ける事を希望する義に御座候。偖眞正の節儉即ち積極的の節儉方法とは下の如きものに有之候、一箇伊勢蝦の調理法を見ても肉を種々のものに調理致候のみならず其殼は燐酸に富み滋養分ありとて粉碎し魚肉にカケるダシ汁又はソースの中に入れ申候、かくすれば燐酸に富み滋養分ある物を利用し、打捨てる物を利用し又ダシ汁なり白ソースは蝦の殼の入りたる爲め美しき紅色を添へ候に付、一衞生、二經濟、三美術の三を兼備する義と相成り候、此の如き節儉の方法を日本社會一般に普及させ度は小生年頃の希望に有之、一箇の蝦を三兼備までに利用すと申す者を製造工業に一轉すれば、即ち米國又はオーストラリア、ニュー

ジーランドに於ける肉の凍氷事業の始終と相成る義に有之候。即ち牛羊の毛皮は牛なれば靴とか鞣とか、羊なれば羅紗なり手袋なり夫れ〳〵の原料となり、頭は大なる鍋に入れ蒸氣の餘力を利導して煮れば腦味噌の内にある精良の脂肪は鍋の上に浮ぶが故に、取り上げ上等の脂肪として販賣し、更に此の蒸氣を分派し、其力を以て脂肪を取りたる後の髑髏を碎粉にし、之に石灰を混へて骨粉となし以て販賣致す義に有之候。尚又牛羊の腹中より出でたる臟腑、血、雜物は一も之を棄つる處なく、或は乾血として營養分多き肥料とし、或は之を以て萬千の豚を飼養すれば、豚の大群は此上もなき好餌料とてグー〳〵と叫びシャブリ喰ひて肥へ申し候。此くして後の肉體を凍氷する義に有之候處、これも普通の氷など用ふれば多く費用を要し候故、理學を應用し空氣を冷却し、其内に萬千の肉體を置きて凍氷する工夫に有之候間、僅の費用を以て容易に凍氷し得べく萬事大節儉の内に出來申候。又或る臺所にては竈に石炭を燃き、其熱を以てソップ、燒肉、煮肉等を一回に同時に致候のみならず、更にパイプを以て其熱を分派し風呂を沸かし申候、即ち是と同一の者を以て製造工業に應用し同一なる蒸氣の熱を以て種々の部分事業に使用するなど、此の如き節儉の思想は未だ多く日本社會に養成せられず實行も致されざる義と存候。

小生の申す節儉とは大小に依らず此の如き方法を取る義に有之、要するに識力を以て無用を省き、以て有用に轉じ無駄の事なくして利益を擧ぐる義に不過候、日本に於ける薪の一事にても御覽あれ、有用の材木となるべき木を以て薪とし、五千萬人が毎日々々ドシ〳〵と使用し、煙と化せしめ灰と化せしめ空に化せしむるは御承知の通に御座候、墺太利は隠れなき薪を使用する國柄なれ共、日本の普通の薪の大サにして國民毎日の使用高一人一本に當らず、然るに日本にては一人四本宛使用し可惜國家永遠の利源を煙と灰とに化せしめ候。然るに日本全國にて薪の代りに石炭を使用することゝ相成り候へば、一は石炭の薪よりは廉價なると、二は空々に化すべき木材を他の有利なる途に向け候よ

り、直接間接の利益を合算すれば一年に何百萬圓否な千萬圓と申す樣に可相成、是れが十年二十年百年と積れば實に莫大も無き國家の利益なりと奉存候。以上の如き積極的節儉の方法に依り利益を得たる以上は、能ふ丈け之を慈善事業、社會の進步を促すべき事業（學問、美術の奬勵等）に寄附致す樣に致し、此くしてこそ眞の節儉は大成する事と奉存候に付、精々此義御實行被下度、否な是非共御實行あらんことを希望するの餘り前後クド〳〵敷申上候義偏に御許し被下度候。

尙又眞正の節儉とは以上の如き有形の事物のみに止らず、無形上にも多々有之候、即ち人々個々が時間、紀律、命令、責任を確守する樣に相成り、時間を格守せざる事、紀律を怠慢にする事、命令を遵奉せざる事、責任を履行せざる事などより起生する不利益不經濟を省ぶことゝ相成り候へば、衣食住を省ぶくなど云ふ吝なる節儉にて得たるものよりも其利益の莫大なること比較され得べきものに非ずと存候、今年正月、小生より全國の知人約一千名へ贈呈致候左の端書御一讀の上、右主意御實行の程何卒奉願上候、匆々拜具

偖唐突千萬ながら少々貴意まで申入れ度義御座候、御承知の通り陸海將卒には夫々敍勳の御沙汰有之、目下鄕里にて各々目出度新年を迎へ居ることゝ存候に付此等の凱旋歸鄕軍人は軍隊にて習ひ得たる時間、紀律、命令、責任の確守を各々其鄕黨に及ぼし、以て今の鄕黨の不紀律、無責任なる氣風を一掃し、以て一般社會の氣風を根底より一變することと切望に堪えず候、是れ實に此等の人々が鄕里に携え行く何よりの好き土產と存候、日露戰爭中、一家三人の兄弟にて三人共に出征せし者もあり、一村にて少きも十人、多きは百人も出征し、且は大勝利の結果、鄕黨は何れも凱旋の歸鄕軍人を歡迎し其敍勳を敬慕する秋なれば、此の復たと無き好機會を逸せず、此等の人々は軍隊の好風紀を以て自然と鄕黨を敎育し、かくて今の社會の深憂大患を掃除する樣致し度、時間、紀律、命令、責任を確守するに至れば、實業の如きは容易に發達し得べく億萬の金額も不知不識增殖致し、隨て國家の富力も期年の間に加倍することゝ存候儘、甚だ差出ヶ間敷は存候得共、御知己の在鄕軍人に此義何卒御勸め被下樣切に奉願上候、匆々拜具

夫たる者の心得

——自戒錄一則——

中島德藏

習慣といふものには中々の勢力がある。のみならず、あるべきである。細かい理窟からは、色々其の不都合の點を指摘することも出來るが、扨實行の一段となると、容易に誂向に行かぬのが世の習である。隨つて未婚時代には、非常のハイカラ主義の主張者が、愈々家庭の主人となつては、女大學以上の奴隷道德を、其の妻に要求するやうな奇觀もあり、又た自由戀愛主義の實行者たる女學生が、其の墮落生活の一年も立たぬ内に、却つて平凡な不合理に見えた通俗生活を慕しく思ふことのあるも珍らしくはあるまい。

畢竟馬鹿らしい、面白味のない、不條理らしい、窮窟な習慣其物は、本と永く此國の歷史の大勢が是定し來つたもので、言はば衆多賢人の智慮經驗を集めて大成したものであるから、如何に秀才であらうとも、一人一時の思ひ付きで、輕々に變更することも出來ず又た變更してはならぬ譯である。其れ故大體から立論すれば、「汝の習慣を守れ其れは善である」と云はねばならぬ。

が、星は移り、物は換る、時勢の進歩は一分時も中止せぬ。習慣獨り舊態に拘泥して居るべきでない。ソコデ心ある人は、時の宜しきを制せねばならぬ、特に明治時代の社會的變化の大は、有史以來恐らく唯一の場合であるから、隨つて風俗習慣の改良も必らず著しいに相異ない。其著しいものの中で、夫婦關係の如きは、其最も著しいもの丶一たるは言ふを待たぬ次第である。

其の何故に、又た如何にして、此やうな風俗が生じたかは、此所に詳述を要しないが、日本の家庭が、男のみを中心として組織されてあることは人の明らかに認むる所で、理想としては、此くあるべきでないことは、是れ又た今日多くの人の否定せぬ所である。女子の側から、之れが改良上の要求があり、男子の側から

も、大體上の認諾があるらしいことは旣に疑はれないやうであるが、此の要求と認諾とが、如何なる條件て圓滿に折合ふてあらうか、其は今猶頗る問題てある。

早い話が、夫は今よりも妻を親切に遇せねばならぬ、此れは分り切つたことてある、が併し、何と言つても、女子は魔物てある、適切に云へば、人は皆魔物てある、卒然と之れに向へば飛んだ目に逢ふ。どどの詰り、『飼犬に手を噛まれる』やうなこともある、『恩を仇て酬ゐられる』やうなこともある。淺薄な、浮華な、小說などから、其所謂人生觀とか、女子觀とか云ふものを形成して、妙に柔しい、多恨多情（センチメンタル）式な、鼻下長式な態度て以て、其の新婦人を遇する學生上りの主人があつたと想像したら、其の家庭に何んなことが出て來るてあらうか、大概知れたものである。此れよりも昔流儀の說法が可いかも知れぬ。昔流儀の或る老人が、青年に講釋して居るのを聞いたことがある。曰く、女を取扱ふは馬を取扱ふやうにせねばならぬ。馬といふものは、よく乘り手の氣色を見るもので、一旦甘いと感ずるが最後、横着になつて横着になつて、遂に制御し切れぬやうになる。それ故初對面の時に忘れてならぬことは、力強く一つ其眉間を撲ぐつて、其の荒膽を取挫いておくことてあると。

如何にも亂暴な仕打て、女子に對する侮辱此上もないと思はれるやうてあるが、誰が敢て其の新妻を愛らしと思はぬものがあらう。むしろ愛らしくつて、愛らしくつて、團子にしてでも食つて仕舞ひたいと思ふ程の客氣の愛情のはやるに任せず、其中に凛として犯すべからざる所あるべしと敎へたものと見れば、勿論一理はある。夫の妻に對する仕打の改良は急務であるが、去りとて西洋小說などからの直譯、一知半解の模倣主義は害あつて益がない。

色氣はタップリてあるが、意氣地のない所の薄志弱行の青年は、却つて女子を女大學的に取扱ひ得る能力を鍛練すべき道中てある。此の徒は女子の眉間に、一痛棒を食はし得ぬ所に其の弱點短所がある。單に女子とさへ見れば、穴勝に渇仰拜伏して、種々の醜態を演

ずるやうになる。其の形成する家庭に慘禍の出來するも怪しむに足らぬ。改良論は、男らしからぬ男の容喙すべき場所でない。男の側から云へば、要は、唯だ男らしい男が一層男らしくなるには如何にすべきといふにある。男らしい男が家庭を組織して、從來の形式内に齷齪するよりも、新らしい夫婦の交際法を工夫して、男にも女にも共に幸福な、有益な、高尚な生活を遂げるには如何にすべきといふにある。

女大學は學問のない、品性のない女子を目當に立てられたものであることは今更言ふを待たぬ。然るに女子教育の盛大となつた今日學校仕立ての海老茶式部の多くが、其の學藝は兎も角も、其の品性が高まつたとは容易に許されまいけれども、假りに教育は其の理想通りに行はれたとして如何に習慣とは云へ、依然昔の型其儘で其妻を遇するのは、寧ろ男子の我儘で、狹量で、負け惜しみで至つて男らしからぬことである。

妻に對する心得も種々樣々で、容易に述べ盡すことは出來ぬが、男らしい男で、而も妻に對して丈は、如何はしいと思はれる節々が往々目に付かぬではない。其の一二を云つて見れば、眞實其の妻を愛して居りながら、外面に少しも愛の形を現はさないのみか、却つて冷酷らしくして居るものもある。此れは所謂强がりである。中には妻に對する馳走の積りて、强がつて見せる者もあるらしい、此れは畢竟世間一般の「男らしい」といふ定義が、彼の老人の講釋位にある所から、之れに對する遠慮から來るもので、換言すれば、世間から男らしからぬと言はれまいとの虛榮心が、天眞の、麗はしい情の發動を妨げたもので、其の妨げられた情は、やがて内向して自らが無理に自らを嚙み殺して、思ひ掛けなく、冷酷な粗暴な形を取つて外に發したものであらう。夫の氣色を見い見い、付け上るやうな横着の女房ならば知らぬこと、苟も先方が女の道を心得て、愛されても之れに狎れるといふことが無い位の修業が備つて居たならば、世の分らぬ人からは、よしハイカラの名を受くるにもせよ、心置なく天眞に振舞ふ方が、一層男の器量を上げるといふものであら

う。此點でエーベブリー侯は此う言つて居る。

自分が羞かしいと思つて居る者を愛する丈では未だ足りぬ。愛するといふことを、愛する者に見せればならぬ。吾人の多くは無知のため、無考のため、或は考違のため、最も愛しもし、又た其頼みともならんと熱望して居る者の氣を損ふ。

チエスターフヰールド侯は、

余は曾つて屢思ひ、又今も尙思つて居る、凡そ何を知らぬと云つて、世人が一般に如何に愛し如何に憎むべきかといふ其仕打を知らぬ程のことはない。

と。『粗剛は强みを示さない。時によると却つて弱みを隱す上衣となる。』其所でシエクスピーアはマーク、アントニーの口を假りてブルタスに就て此う言つた、

His life was gentle, and the elements
So mixed in him that Nature might stand up,
And say to all the world "This was a man"

尙ほラボックの此等の點に關する注意には、此うゆうのがある、共に吾人の參考となるものであらう。

眞に、顏色さへ切なる苦痛を與へると同じやうに、柔しい一瞥も亦た往々喜を以て人の心を浮き浮きさせるものである。長い留守の後では、吾人は家庭へ還つて受けられると思つて居る所の温い歡迎を何れ程熱望することであるか。朝な朝な相向つた時に、互の無邪な、温しい笑顏を見れば、暗澹極まる空も晴れ渡るではないか。

それ故餘り控目勝では可けぬ。愛情を外に現はすことを恥に思つてはならぬ。冷淡に見えては、内に愛情があつても用が足らぬものである。温く、柔しく、思慮があつて、ソレで又た情があるやうにありたい。人といふものは、雜用を足して貰ふよりも、同情で力を得ることが多い、愛は金錢以上のもので、親切な言葉遣の與へる快樂は、贈物の與へるよりも勝つて居る。

ベンジヤミン、ウエストが、何物が御身を繪畫の大家となしたかと問はれた時、對へて曰ふには、『其は余が母の接吻である』云々

妻のキッスは母のキッスに劣るであらうか。實に習慣は尊重せねばならぬけれど、之れを斟酌せずには社會に立たれぬ。併し餘り馬鹿正直に之れに拘泥して、妻たるものの幸福を減じ、從つて求めれば求められる所の團欒の樂を失ふは愚なことである。

習慣から來る所の、夫の强がり粗剛といふことの外に、尙ほ異性を解せぬといふ點から來る種々の苛酷不親切もあらう。此は男女交際の全然欠乏して居る我國には、最も免れぬことである。女子の敎科書には隨分

嚴しく夫に對する心術禮儀作法を教へてあるが、男子の其れには之れに類似した注意さへも恰んど欠けて居る。

將來は少なからず此點に注意を拂はずばなるまい。敢て女性の肩を有つ譯てはなく、家庭の幸福の爲め、即ち一半は男子其人のため必要なことてある。一年許り前に妻を迎へた學士たる人に、其新家庭の面白味如何とかからかつた時、其學士が女性觀を語つて曰ふには、『イヤ女といふ者は爲方のない者て、何うも理性を以て待遇の出來ぬ、目前にのみ生活する動物』といふのてあつた、是れは固より日本流の謙遜の、惡戯的の、良妻をも呼んで愚妻と爲すの筆法てあつて、眞實其人の胸に寫つて居る妻たる人の寫眞てはない。が併し、日本の男子が、妻帶して後に始めて、『女子は感情的だ』といふ位の、極めて單簡な新眞理を學ぶ例は少なくない、特に此れは女々しくない、男らしい男に多いやうてある。成る程、女子は目前主義のもので、他の或人は此うゆう觀察をした者もある、もし此所に百圓の餘裕があれば、之れを以て物見遊山、或は贅澤三昧に遣ひ果して仕舞つて、一文なしになる、扨て後に困窮に陥つたら何うも仕方がない、迚も生活の方はない、一所に死んで與れないかと云へば、女は前の一時の榮耀の恩義に感じて、喜んで夫婦情死をする。けれども、もし百圓の餘裕がある時、十圓を以て奢侈に費やし、殘る九十圓は後日不虞の用度の爲めに貯蓄しておくといふ流儀にすれば、之れが爲め死を免かれることが出來ても、其の不平を無くすることは出來ぬと。此れも針小棒大てはあらうが、聊か尤と感ずる節もある。『其れだから爲方がない』とは、吾人の通例速斷する決論てあるが、彼のやうな事實と、此のやうな決論の間には、未だ大なるギャップのあるは大方の未だ多く注意せない所てある。此所には女子に如何なる特性があるかを詳述する暇はないが、凡そ特性といふものは異つた方面から、共通一體の目的を一層よく成就さする爲め出來たものだと思い付たら、所謂長所は即短所を顛倒して、短所は即長所とも云へる道理であるのに、之れを

氣づかぬも亦た、日本男兒の欠點であらう。大體意力に於ても、感情に於ても、又た知力に於ても相異あるは勿論、形式上許てなく、內容上に入つても種々樣々の特異點があつて、其の特異點のために、家庭の進化の可能が存するのに、却つて之れを殺しておくやうな愚策を、吾々は尙ほ取つて居りはすまいか。男の特異點のみを、善惡の唯一の標準として、女の特異點を無視するやうな傾がありはすまいか。否、此うするにも、昔て云へば理由があつたのであるが、今となつては餘りに拙な、餘裕のない、卑怯な仕打と言つて可い。譬ひば『女性は耳て愛し、男子は目て愛す』といふならば、男子は一概に目て愛さぬから取るに足らぬと叱りつけずに、宜しく耳て愛されるやう勉むるが、互の幸福進步を謀る所以て、又た『男子は通則を立て、女子は例外を發見する』といふならば、男子は、一概に通則が立てられぬから爲方がないと不平を言はずに、世の中は兎角一直線には行けぬことを發明して損はあるまい。這般の研究は最も日本の夫たる者、夫たらんとする者に欠乏して居る所て、從つて愛情は十分ありながら、其の發表の方法が當を得ず、外からは冷淡殘酷、亂暴甚しきは狂氣など評されるやうにもなるのてあらう。が、此れ等の注意も、本の大體論に止まるので、皆一々何處の家庭にも當はまることてなく、又た中には、此れ以上の同情を妻たる者に寄せて居らるる夫のあるのも知れてある。特に、夫婦と云へば單簡のやうてあるが、實際の委細に至つては、頗る込み入つて居るもので、色々の心得も單に夫が妻に對してといふ丈の抽象的な理窟一片て押通すことは勿論出來ない。女性の中には、唯だ女性と云ふ丈て、殆んど敎育修養のない者もあつて、其れがたま〳〵社會上の位置、又たはドル箱の中に生み落されたといふ偶然の事情から、幸か不幸か、立派な男らしい男に歸ぐといふやうな妙な取り合せもある。從つて男が愛しやうと思つても愛し得ず、敬しやうと思つても敬し得ぬ女性も、亦た世間に例のあることは既に女性の愛讀書、源氏物語中にもあつたと記憶する。此れは又た最後に女性方の知つて居

つて欲しい所である、唯だ余はジエレミー、テーロアが言つたやうに、大方の夫が今よりも一層、『汝は彼女に對して、父と母て、又た兄弟とならねばならぬ。此は結婚生活が、孤兒の境遇にも劣つたものであるべきてない以上は、大に道理あることてある何となれば、汝に嫁したため、父と母と兄弟とに別れた彼女は、或は憐れな親なし子のやうに不幸に陥るか但しは又た汝を以て父と母と兄弟の代り、或は其れ以上と見ねばならぬから』の教訓を重んずることを希望するのである。

次號に於ける公論欄の如何に光彩燦爛たるかは本號巻頭に於ける豫告を一讀せられたし



再び日露の關係を論ず

『イーヴニングポスト』

日露の關係に危機迫るとの不祥の報は今日の官報によりて打消されたり、通商漁業の協約に關する交渉に於て、用語の解釋上一種の困難あり、其處に紛議の恐れもありしが、痛ましき談判破裂の危險を現出せずして已みぬ、而かも事の此處に至れるは英國の調停に待つところ多きもの、露は目下頗る英の歡心を失はざらんと欲するに、日本も亦英の同盟國たるが上に、特に今次の戰後に於て、その同盟の利益は實現せられたるものより更に多きものありしを知るを以て、露に對する此度の要求にも寸を密にして錙銖の末をも爭ふをなさゞりしによる、何れ近日公にせゝ協約書はその交渉顛末を明にし、兼れて何等斷つべからざる底い

な見ず、反對に親善の關係保たれ、諸種の爭論の點も穩かなる解決を告げしを示すべし、こは少くも今日の官報が保證したるところなり、而してこは幾多の小題大做者が抱かしめたる凡ての憂慮を醫するに足る、露國の軍人側には日本と新戰端の開けざりしを憾むものなり、又一方には戰端開けば之を機として內に憲法の改定を爲し得べしとし平和の破壞を喜ぶものあり、タイムス通信員曰く、聖彼得斯堡の官僚並に新聞記者等は與愛國者の好事的關渉により何等の紛糾もなき事件に、小題大做者中の人となれり、外難を機として內政を釐革せんとする一部の人士か、然らざれば唯政府の困厄を見ん爲に何等の手段をも顧みざる人士の外、露國全土の人民は小題大做者の流言の些の根據を有せざりしことを以て大に安堵したるは確かなりと、此保證は又露國以外の國民、即ち日露兩國間に蟠る一種の感情と更に露國が日本と戰つて敗北したる不面目の下に、永く堪ふべからざるを知りたる國民をも安堵せしめぬ、戰爭は今一度來るべし、兩國民も互に能く之を知れり、されどそは互に彼等の武器を修繕し、彼等の失へる財力を再び充實するまで待たざるべからず。

露國は頻に彼の陸海軍力の回復に勉めつゝあり、以て來るべき戰爭の準備をなすといはる、されど之と同時に日本が睡に入り居るべしとは想はれず、此剛健なる人種は全勢力を致して一國の財政を整理し、之を強固にせんと勉めつゝあり、大商船は造られつゝありかくて日本海軍の擴張は彼の通商貿易の保護に當ると志せり、數週前世界第一の大軍艦が日本人の手によりて造られ、日本の軍港に於て進水せられたり、日本の諸工業所にては英國その他に於て學び得たる技術を實地に應用し、斯くて財力を節約するのみならず進んて增殖を計らんとす、日本における商業の發達は偉大にして千八百七十年には僅に一万七千九百五十二噸の船舶を有したるものが、今は百三十萬九千五百七十九噸を有し、尙ほ國內に百八十五ヶ所の私設造船所並に十九ヶ所の船渠を建造しつゝあり、近く四年間に於て日本が通商航海船に使役したる普通海員は三万八千人より二十万二千人に增大す、此額は到底露國の比肩し得ざるところなり、されど國家が强大となるは偏に工業の發達によるもの戰術を實習してその財源を枯渴する處に存せざるなり。

社會改良と帝國主義

『ナショナルレビュー』

昨臘十四日にマンチエスターに於て 同じく十七日にツラルペアーハムプトンに於て、ミルナー卿が兩度その政治的集會に臨み試みられたる演說に曰く、老功なる選擧運動者予に告げていふ、近時帝國主義は政治上の呼聲としては勢力なきこと古錢に似たりと、誤れるかな言や、彼は帝國主義は單に一の呼聲にあらずして、實に一の教條なることを忘れたるなり、彼が如何にいふとも、元來一の教條として信ぜるものには到底その主義を拋擲せしむるに至らざるべし、否、己れが眞理と信ずるものにして讓步の色を帶びんか、層一層その本然の光を發揮せしめんと勉む

べく、勉めてならざるも、せめては、その談飽裡に躍るゝ自己の胸中動かすべからざる信仰をば現ぜんとすべし、而かもその多くは誤解に坐するが故に、僅かとて單に一時のものなるべし、今や英人の思想并に感情は社會改良運動即ち國家の財力并に勢力を、各階級人民の境遇を改善するに用ひ、彼等の物質上、智力上、道德上の標準を高め、如何なる下層社會にも大英國民としての光明を享受せしめんとする、此社會改良を欲するが爲に、帝國主義の蜃氣樓より離れしめたりと確認せらると、氏はそは尊き理想なりとて啻に同情するのみか更に國家の斯かる運動は大に發達せしむべきものと信ぜり、されどミルナー氏は問ふて曰く、社會改良運動と帝國主義とは何處に撞着ありや、此二つは絶對に内に互に憑依して、從屬の關係をなすもの、則ちては見るべからざる理想なり、帝國の基礎は唯、全帝國民の力に待つて支持するを得、吾人は中心に於て、即ち健康、智力、職業に於て堅實の點なかるべからず、而かもこは物質的幸福における正しき標準なくては平等には得られ能はざるなり、貧困、墮落、身體の退化、此等は常に免るべからざるなり、然るにある愛國者、特には帝國主義者は此點に關して現下の境遇に安んずるを得るか、若し眞に國家に對して憂を抱くものならは、吾帝國の心臟は一層堅確なる、一層熱病的ならざる鼓動をなすべしと知らざるべからず、更に換言せば、若し吾人の物質的繁榮が破壞せらるれなば、何ものか能く吾社會の幸福とは



ROOSEVELT — "My dear neighbor, I hope that next year the Nobel prize may be deyours."

—*Amsterdammer.*

ならんぞ、吾人の國家は强國たる位置を保たざるべからず、然らずんばやがて弱國とならん、社會改良を求むるそは當然なり、されど徒に之を求めて別に國民共同の力を無視せんとするものあらば、そは砂上に樓閣を築くものゝみ、此と彼とは偏廢すべからず、重んずべきは兩者の權衡にあり、我が各島國はその形勢上よりして決して孤立にては各々一等國の班に居るを得ざれども、我が大英國は永久にさる勢力を有するを得、而して大英國が勢力を有することによりて、之を組織する一々の國家も安寧と繁榮とを保證せらるゝなり、更に廣くいはゞ此精神は多くの種族、幾百万の人類の幸福をも期算するもの、普通の政治行動におけるそれとは率を同うして語るべからず、されど之を得んには容易にあらず、自然に放任して得らるべきにはあらず、之に就いて幾多言をなすものあり、我帝國内の諸國一致共同は甚だ望まれし處なるに、而かも之を結合せる政治は目的に向つて能く進む能はざるのみか、却て危險をさへ感ずと、吾人は這般の說に對しては、友情の涵養、交際の進步、交通機關の改善、即ち郵便電信制度の擴張、その他相互の親睦と善意的諒解を進むる、非政治的諸種の手段を取るの一點を說かんと欲す、而かも此事たるや、單に一帝國内に止まらず、あらゆる外人に對しても等しく望ましきところなりと、これぞミルナー氏が解決せんとする問題の中心なる、吾人が帝國内の列國に對する態度は直に移して我と親交ある他國民にも擬すべきか、但しは然らずして吾人は吾人に特種の親密なる關係を保つべきか、帝國主義は直に一言の下に答ふべし、吾國族下の人民は互に異人種にはあらずして同胞人民なり、而して此關係を永劫に持續するもの、君主、一國旗、一公民生活、此處に永久裂くべからざる價値は存す、外人との如何なる交誼、如何なる同盟、其處に又如何なる堅き關係ありとも到底吾人同胞間のそれには比すべくもあらず、左までに深き根帶ある結合、左までに永き活力ある結合、左までに貴き効果ある結合はあらざるなりと、ミルナー卿は最後に曰く、吾人の公民生活は餘りに吾人に密治せる天稟にして却て意識に上る能はず、之を失はん時に初めてそれと心付くべき性質のものなりと。

貴下は獨乙國に於て何者を最重んぜらるゝや

「エヒヨー」

此問題は、クリスマス祭典の祝意を表せん爲めの催にて、ベルリネル、ロカールアンツァイゲルが列國の諸名家に意見を求めたる題目なるが、其回答の主なるは概ね左の如き者也。

ドン、ヨーセ、エチエガライ氏（有名なる西班牙の劇作家にして、又政治上重要なる地步を占めたる人。先年文藝上の功勞に作り叙爵の榮譽を得、其劇曲『ガレオツトー』はパウル、リンダウ氏の手に譯せられ、嘗ては獨乙劇場に於ける最成功せる曲の一に數へられたる者也）の言ふ

所は次の如し。

折角の御尋に對しては乍遺憾早速の御返答致す事中々容易ならぬ儀と被存候。

小生の見解にして幸に誤るなくば、貴問の旨は下の如き所に存するならむ。即爾は偉大なる獨乙國民に就て何れの點を最も好むか、何々の個所を最も尊重し驚嘆するか、と。

更にいへば此問題に對して確答を與ふる事は小生は頗る難事に候。御返答は殆んど不可能と申さむも敢て過言に候はじ。

今假りに輕氣球に搭りて中空より瞰下するとせば眼底に映來るものは白雲の項深く雪中に隱れたる高山、群山の間に蜿蜒せる谿谷かのツォリラが其詩グラナダに歌へる如き豐饒肥沃の田野、潺湲たる泉流、淙々たる川流、滔々たる江河、大厦高樓軒を並べたる都市、殊に驚くべき近世の設計に、かの古文明の眞髓と參酌せる建築法に依て立てられたる都市、かくの如きものに候半。又假にパノラマを見たる後、突然爾が見たる者の中にて何を最も好もしと感じ何を最も尊敬すべき者、驚嘆すべき者と思ひしかと訊ねられたらば如何致すべきや。小生が當時の答は正に下の如きものに過ぎざるべく候。即ち「悉くがそれ也」、或は「全く知らず」。この外には答ふる術を知らざるべく候。



SHAKESPEARE AND TOLSTOY.
THE IMMORTAL WILLIAM— "My dear Goethe, if I had only known about him in time, I would have made him a clown in one of my plays."
—*Ulk* (Berlin).

小生が現今の狀體は此場合に等しき者に候。獨乙國の偉大なる、其歴史の赫々たる、其人材の濟々たる、何れを夫れと指して御答申上くべき。各方面に於て特色を

具し、異采を放ち居るものと被存候。

更に御の引例に就て申せば此山はかの谷よりは好もしく、此江河は彼の雲霧よりは偉に見ゆとはいかにも言ひ難き所に候はずや。山としてかの山は眞に美なれども、彼の江流は奈何すべき、尙其偉大なるなば掩ふに遑あらざるべく候。

尙、小生は性强き個人主義の主張者なれども、而も協同の働に依て成れる偉大なるものの存せるを沒却するものには候はず。若之を箇々に分つ時は鐚一文の値にも足らざるべく候。大なる諧調に在ては箇々の音は實に其價値乏しく、審美上の評價は偏へに和諧の調律に依て生ぜられ候。かくの如く、小生は何者を最秀でたりと斷定すべきか、小生の胸中には美、大、高尙なるものには何者にも齊しく同情の脈搏が鼓動致居候。

足下、比喩を以て言ふを許し給へ、小生が心の琴糸は洵に短く洵に品下れるものなれど、大絃小絃の妙音に觸れて共鳴を發し居候ぞや。

剰へ如上の難點の外、小生が獨乙に就て知れるはひとり几上の見聞に過ぎずして、或は書籍、或は寫眞、或は風說に依て窺へる所に出でず、故に小生は現り獨乙を見るに先ちて死せむ事を終生の遺憾と致居候。小生は漸くストラスブルヒ迄進軍せしも、只束の間の淹留に過ぎず、見事なるドンの流は黃昏の色に垣間見たるばかりに候。ケルンにありしも數時間に過ぎず、ラインの橋梁とカテドラーレに驚きしも夢よりもはかなき間の事にて、それすら已に五十年以前の昔に候。

小生は獨乙の哲學、文學、殊には科學を知れる者に候。又國民性の多樣なるは一驚の外なく、剛毅にして活潑、野心勃々たるは北人の氣象に候はずや、詩的空想に饒かなるは南部及中央獨乙人の特色と覺えられ候。實に小生は獨乙國を見ずして死することを千載の憾とする者に候。

先づ死はもとより好もしからぬ所なるが上に、遠く嘆美せる者に近づき見なばいかばかり喜はしからむと思ひての故に候。貴答を充さずして早くも玆に筆を擱く可き時と相成申候。併しながら今尙下に餘白多し、以て思ふ所を盡すべく候。

足下若し生が劇詩人として生が拙作ある所を思ひ給はゞ生が先づ大詩人ゲーテ、シルラーを讃嘆するは當然之事と可被思候、生が文藝上鮮からず感謝致居候、生が處女作がレオツトーは西班牙に於て演ぜられし外伯林に於ては非常の大入を以て興行せられ候事は、小生の決して忘れ得ざる所に候へば。

併し乍ら矛盾を以て成れる人性は洵に奇異なる者にて、生は殊に種々の方面に嗜好を有し居り候、小生は詩即ち劇詩に於て三び臂を折るものに候上に、生を玆世に享け靈を彼世に送る迄、溺愛して措かざる者は實に數學及物理學に有之候。數學！何たる殺風景の好尙ぞと思召も給はん、小生の狂喜する所は詩に有之候、實に詩を狂喜致候、されど數學は更に愛着のものに御座候。ライプニツツ、ガウスの二氏は、實に小生の未だ得成さゞる所を爲遂げたるものに候、何たる獨創的頭腦、何たる思考的才能、何たる批評的深遠ぞや。

小生は已に思ふ所を述べ終り申候。然れども生が述べたるは貴答に非ずして聊か嗜める所に過ぎざるな、若し諸者にして之を見ば此徹頭徹尾粗忽なる文辭、山谷を備ひ來つて乾燥なる數學文字を羅列せるを怒るならむと恐懼罷在候。然れども兩者間は全く沒交涉にはあらざらむ、一峰更に他の一峰に飛翔して白雪皚々たる自然界の明頂より現代の高所に及べるならむと被存候。足下、一時は現代主義の旗幟をも翻せし事あれば小生に於て此奇怪なる對照あるを赦し給ふや、然らば更に下に贅言を呈すべく候。

小生は目まだ之を見ずと雖彼の炎々として焰逆立つ噴火山は最驚嘆する所に御座候、されど小生は更に學理の深遠なるが故を以て數學大家ヴァイエルシュトラースを景慕致候。其學理の内にて惣ての函數は一の定命を有するものに非ざる事の證明は其一例に候。故に小生は自然及自然力を嘆賞致すと同時に更に人力及其所産を一層賞讃致すものに候。



THE TRIUMPH OF DEMOCRACY!
—*Punch* (London).

狂人の囈語中にも深所は存すべからむ。小生は西班牙の詩人達が作りも得ざる小詩を作るが如く、實に答へも能はざる難問に對して敢て答ふる所あらんとするものに候、いな答へんと擬するものに候、　敬具

馬德里にて
ヨーセ、エチエガライ

▲英國より到來せるものは次の如し。

ウヰリアム、ステッド氏（レビュー、オブ、レビュー誌の主幹）の所見は下の如きもの也。

予は獨逸理想主義に對して言ふ所あらむとす。英人の眼底に映ずる獨乙理想主義は形骸のみ。之に對して常に獨乙現實主義が行はる、之と骨肉を分ちて生れ出てたる者を獨乙唯物論と爲す、慾は已に雲中の帝國を以て足れりとせず、海陸の主權を獲得せずんば止まざらんとするもの也、故に英人はいふ獨乙理想主義は斃れたりと、然れども此見は誤なり、只獨乙は其骨肉を提げて變體を爲せるに過ぎず、獨乙は專心物質化せん

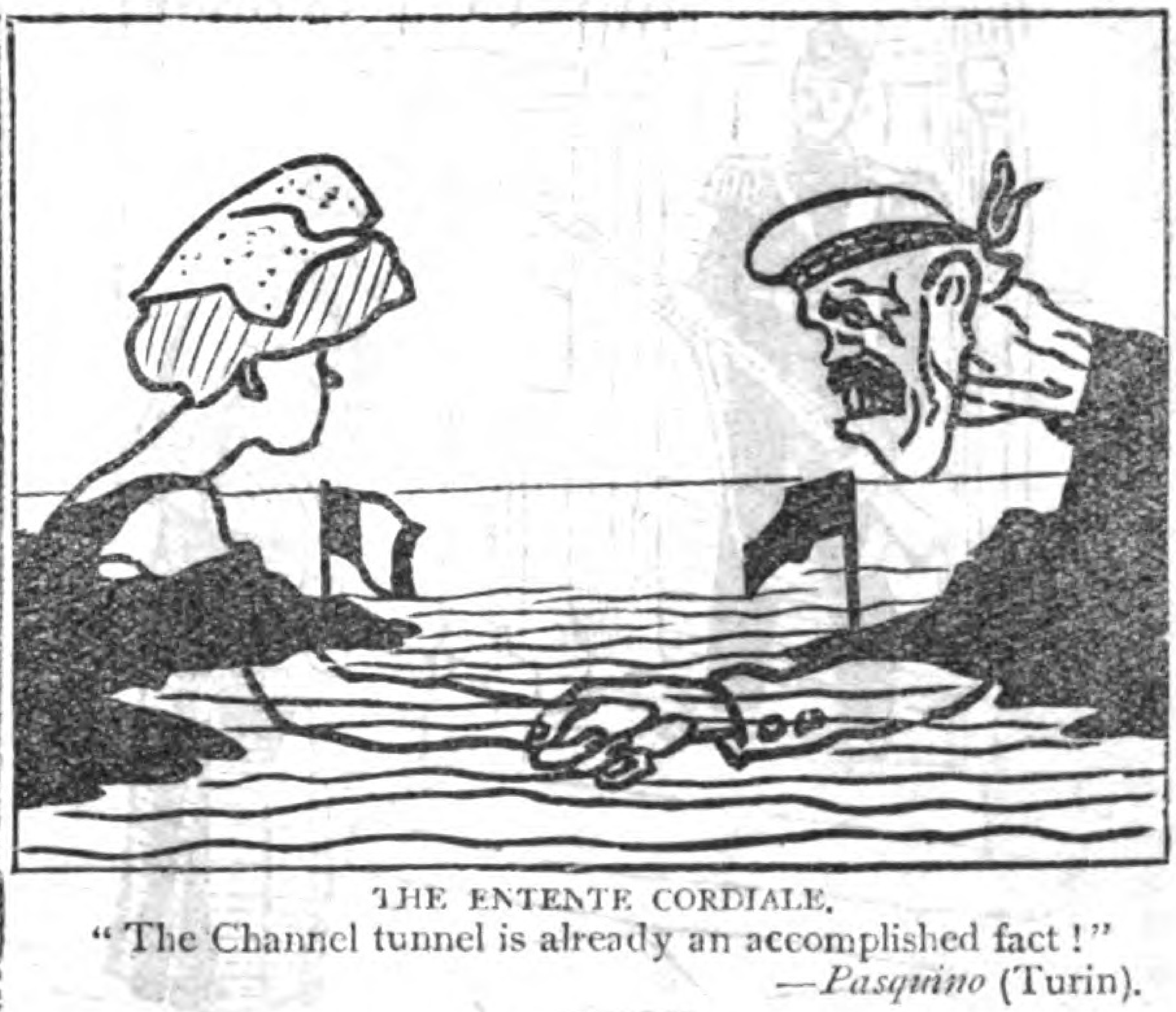
として努む、然れども依然として其頭腦は舊の如し、現狀は只一時の現象のみ、直ちに過去るべき性質のものに過ぎざる也。

倫敦にて　ウヰリアム、ステッド

英國陸軍大臣ハルデーン氏は「有爲なる才幹を有せる人々と論理的正確なる理想的思考力及び之が運用自在なる國民と」が最も敬意を表するものたりと答へ。

ジョン、ラボック博士と名を齊うして日耳曼人の尊重せるアーブベリー卿は「科學及音樂の貢献を世界に與へたる點」を以て答へ。愛蘭の詩人にして機才に於て絕倫なりとの世評あるバーナード、ショウ氏は「勿論音樂也」と答へ。有名なる小說家にして劇作者を兼ねたる、

トマス、ホール、ケーン氏は下の如く言へり。獨乙國民に對する僕の見は恁うだ、獨乙國民は其後進者を誘掖する點に於て他の歐羅巴國民の龜鑑である。其最好著例として僕が衷心畏敬せるものは現代獨乙文學である。獨乙國の政治の方針も亦頗る僕の意を得たもので、獨り外國人として見て訝しい事は此國内の二派即武人主義と民主々義との爭で、驚くべき事は基督敎徒と異敎的理想主義間の激烈な競爭だと。更に有名なる書家アルマ、タデマ氏は「予は獨乙國民の情誼の厚き事と其文明の程度の高き事に感服す」といひ。英國ユモリストとして知られたる、



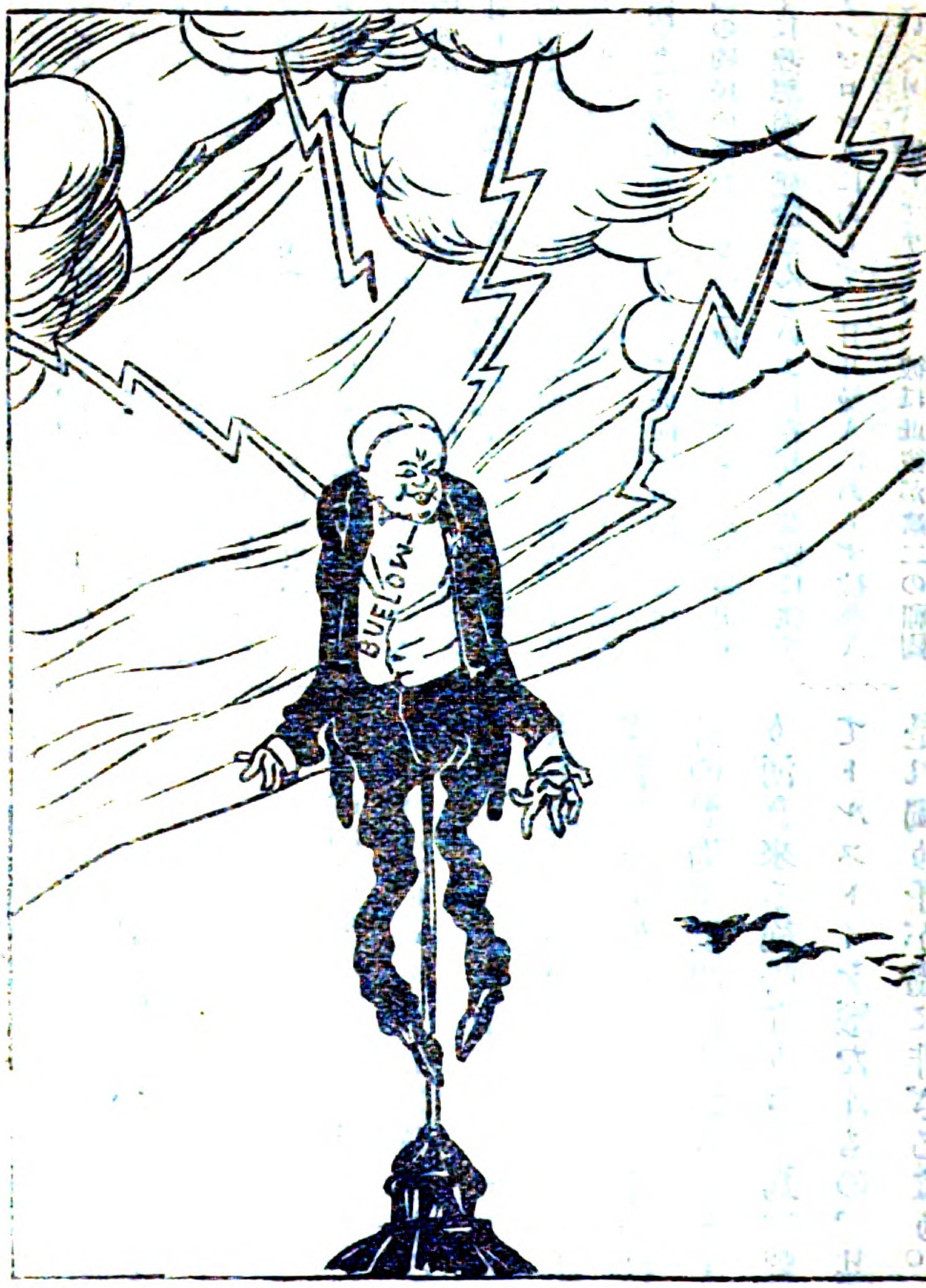
THE ENTENTE CORDIALE.
"The Channel tunnel is already an accomplished fact!"
—*Pasquino* (Turin).

ゼロム、ケー、ゼロム氏は獨乙の滑稽に關して、亞米利加人の機智を獨乙人が評して無意味也、欺罔也といへるを引いて評していふ、此獨乙人は毫もユーモアの才を有せず。されど予は衷心此男に同情す。若し諷諭にして無意味なるもの也とせば更に一般の研究を要す。獨乙人は論理の國民也。而も無意義も終點には遂に必要なる有意義のものとなる事は爭ふべくもあらず。沙翁並にデッキンスのユーモアは獨乙人に在ては眞理に對する欺罔にやあらむ。獨乙人のユーモアの根底とは眞理をいふべきか。予は獨乙のユーモアに於て全然缺點あるを知る、即ち毫もユーモアなき事是也、と。

▲佛郎西よりの答辯最多し、其主なるものを拔抄すれば、巴里の人氣小說家、マルレー、プレボー氏は其曩時の作モンシュール、エ、マダムを引用して答ふらく。予は舊作中に於て敎授チムメルマンに言はせた所を以て

黄問に答へる積です。「我は獨乙思想の勝利と信ずるのだ、夢想家の獨乙國、思索家の獨乙國、博學の獨乙國、ア、爾、眞なる聖なる獨乙國よ、我は爾が國の武士を愛する。」

獨乙國の思想、爾こそは眞に獨乙國の力であるよ、爾の名はゲーテ、ハイネ、シルラー、カント、ヘゲル、ショウペンハウエル、ニーチエ、又はバハ、ベエトーフエンワグネルである、何者と雖獨乙の思想並に獨乙の感情が永久に獨乙國に於て生育して失れざる事に抗するものがあらうか。嗚呼獨乙國の力、思想の力、何者よりも強き力、我は爾を貴ぶ、爾の爲めに一杯を傾け去らん。「獨乙國の精神――獨乙國の力……」と、予が舊作小説中に於てチユメルマン教授は遺憾なく胸中を吐露して居ます。



VERY CONVENIENT EOR THE KAISER.
The lightning-rod on the royal residence takes all the thunderbolts.
—*Wahre Jacob* (Stuttgart).

彫塑界の巨匠、オーグスト、ロダン氏は、嘗て斯道研究の爲にありし獨乙滯在中の懷舊談を以て答へ。

レビユー、コンタンポレーン誌の主筆エドワルド、ロド氏は、獨乙は自國にリヒアルド、ワグネルを有するを以て誇とするに足る、而して更に大天才の現はれて之が光彩を奪ふに非ざれば此光榮は永久なり、との意を陳べ。機智に富める巴里の劇作家にして、其喜劇は成功せりと世に唱へられたる、マルセ、プレボー

アルフレッド、カプラ氏は滔々たる社會生存の競爭の波瀾と雖、獨乙國民の心中より性癖の然らしむる所ならむ、一般哲學及特殊科學の研究を播蕩せしむる事能はず、同時に又永久的教育の力は最早思想の自由及個人の權利を放棄せしむる事能はず。此獨乙人の特色は今日吾人の最尊重に値するものならむ、といひ。

前海軍大臣にして巴里シエークル紙の主筆ド、ラネスサンは曰はく、獨乙國民の最も尊敬すべき特質を擧げよとの依囑、腹藏なくいへば、各種の特質中最も特出せりと思ぼしきものは、列强間の商工業の競爭場裡に於て、最近獨乙人が示す執拗性是なるべし。若し獨乙國が自ら許せる國民的自負心が此新なる進路に於て、國民性に安全なりとの印象を與ふる爲めに、高き滿足を見出し得べくんば、全世界は此結果に對し相當に慶賀せん、予自身に取つては、予は必ずや獨乙が此志向に遂し得べきを疑はず、而も予は可成的速かに此當來が實現せんとを希望して止まざる也、と。前に外務大臣なりし翰林院の一員、ガブリール、ハノトー氏は、

我は智力的獨乙國に同情を寄す、かの吾人の祖先即、佛朗西人が千八百六十年に提供したりし、かの獨乙國に同情を寄す。ミセレーは「獨乙よ々々々、吾が貴き獨乙國よ」と絶叫せり。ルナンは此國民を以て文化、禮教の最進步せる他の諸の國民の長たるものと做せり、ルナンの夢想する所は獨乙國の援助の下に理想國を建設せんといふに在り、其國に住する者は希臘人にあらずバビロン人にあらず、日耳曼人にあらず拉典人にあらざる人たるべしといへり。而してテーヌ、彼は此彼が第二の祖國の嘆美すべき纎操を稱揚するに吝ならざるべし。即ち曰はく堅實、曰く耐忍、曰く任俠、曰く節度の獨乙國民、曰はく各種の性狀を兼備具足せる獨乙精神の悠ずべき温順と。



トルストイ論

湖處子

「吾が日本にはトルストイに當る一人の思想家なきか、何ぞトルストイを崇拜する日本人の斯の如く多數なるや。日本人中起つてトルストイを駁ち得るもの一人も之なきか、何ぞトルストイを信奉するものゝ然く多數なるを致せるや。」嗚呼是れ十數年前トルストイ崇拜の聲漸く世間に囂からんとするに當り、予が心底より湧き來る絶叫なりき。焉ぞ圖らん十數年の後、起つてトルストイを駁たんもの、其の予自身ならんとは。是れ獨り予が過に非ざるなり。主として先輩諸氏の過なり。先輩避けて之を爲さず、其の大任を獨り不肖予が如き者に遺せり。予豈に獨り慨然たるなからんや。

予不敏といへども、自ら確信する所あり、敢て試に此の大任に當らんとす、大方其れ予が志を諒せよ。

(序論) 思想界の利己主義

トルストイは古今無類の獨斷家なり。獨斷とは思想上の利己主義を謂ふなり。トルストイは即ち思想界の大利己主義家なり。古來の獨斷を攻擊すること彼が如く大膽なるものなく、而して彼自身の獨斷を主張する者、又彼が如く大膽なるものなし。彼其の一たび聖書を繙くや、一に其の意緒の趣くに任せ、解釋せざるを可とすれば非解釋を叫び、解釋するを可とすれば猶豫なく解釋を加へ、竄入を可とすれば肆に竄入し、添删を可とすれば理(ことわり)なく添删す。人の苟も爲さんと欲する所彼一として爲さゞるなし。ルーテルは大膽なる獨斷家なりき。彼亦忌憚なく新約正經(カーン)の價値を論じ、過度に羅馬書を揭げて、同一程度に雅各(ヤコブ)書、希伯來(ヘブライ)書を貶したり。然も彼を以てトルストイに比すれば猶ほ頗ぶる無邪氣なりき。彼の爲す所は唯聖書の大體論に過ぎず、トルストイに至つては直に其の內容の改竄に手を着けたりき。ルーテルは聖書の編輯を改めんとしき、トルストイに至つては直ちに聖書の文辭を書き換へぬ。ルーテルは猶ほ外科醫の手足を矯めんと欲するに似たるも、トルストイに至つては內科醫の刀圭を肺腑に刺し來みて直ちに生命を截てるが如し。請ふ嘗て其の爲る所を見よ。

余の之(聖書の教訓)を悟りしは神學的探究や深玄なる智識の結果にあらず、單に一切の註釋をば我が胸中より排斥せしが故なるのみ。(我宗教一四頁)

更に蹴つて士官將校に向つて何が故に戰爭に臨むかと質せ、彼は必ず己が軍人なること、及び軍人が祖國防護の爲に缺くべからざる者なることを答ふべし。若夫れ殺戮が基督教の精神(殺す勿れ)に悖るといふが如きは、彼の固より意に介せざる所、彼は斯の如き教訓の法則を信せず、たとひ之を信ずとするも、そは其の法則自身を信ずるに非ずして、唯其法則に對する一種の解釋を信ずるのみ。(日露戰爭觀二六—七。)

是れ彼の非解釋の例なり。

汝等の敵を愛しみ、汝等を呪ふ者を祝し、汝等を憎む者を善視し虐遇(なやめ)迫害(せむ)るものゝ爲に祈禱せよ(馬太傳五〇四三。)

汝の敵を愛せよ、——是れ果して人の能すべき所なる乎。誰か此語の偉大なる思想なるを疑ふものあらんや、而も是れ到底達し難き所謂道徳的理想に過ぎざるを奈何せん。吾人恐らくは我が敵を害せんとするの念を制するを得ん。然れども之を愛するは到底能くせざる所なり。（我宗教一一六頁）

余は「敵」なる字の意義を研究せり。而して此字は殆ど凡の場合に於て個人的なる仇敵を指すことなく、「敵國民」を意味することを知れり。斯くして余は「讎」と「敵」とを以て、「同國民」と「敵國民」とを指せるものなりと解するに及んで、爰に初めて余が疑問は氷解したり（我宗教一一九。）

是れ其の解釋の例なり。彼の言ふ所には道理あり。然れども彼の敵の解釋は過てり。聖書は彼の解釋を待たず、自ら之を解釋して「呪ふ者」、「憎む者」、「虐遇め迫害る者」と謂へり。敵を愛する能はざる彼にして、如何にして虐遇め迫害る者を愛し、之が爲に祈禱するを得るや。敵を避除して敵國民に倣したる彼の解釋は、猶ほ「呪ふ者」、「憎む者」、「虐遇め迫害る者」を避除するを得ずんば全然徒勞無効に屬す。

「汝の敵を愛せよ、然らば汝には一人の敵なかるべし」とは基督が其の十二使徒に對して教へる言葉なりとす。（日露戦争觀七四頁）

是は此れ竄入の例なりとす、蓋は基督の語は「汝の敵を愛せよ」と云ふに止まり、之より以下は彼自身の竄入なればなり。然り而して其の竄入も基督の金誡同樣の價値ある者ならば不可なからん。唯其の然らざるが故に竄入が竄入たるなり。若し敵を愛せば一人の敵なしとせば、十字架に釘けられたる基督、石にて打ち殺されたるステパノを以て、敵を憎みたるものとせざるべからず。トルストイ能く然りと斷言するや。パウロは言はずや。「我愈汝等を愛すれば愈汝等に愛せられじ」と、トルストイの竄入はパウロに如かず。聖書は素より斯の如き文字の竄入を容さず。此の如き例「我宗教」に甚だ多きを見る。

さてイエス聖靈に導かれ惡鬼に試られんが爲に野に往り。四十日四十夜食ふことをなせず後饑たり。試むる者彼に來りて曰けるは、汝若し神の子ならば命して此石をパンと爲よ。イエス答けるは人はパンのみにて生る者に非ず、唯神の口より出づる凡の言に因ると錄されたり。（馬太傳四〇一－四）

耶蘇野に退ぎて惡魔の誘惑に遭ふ、惡魔曰く汝若し石を變じてパン

となすこと能はざれば、汝は神の子に非ず。耶蘇曰く人は唯パンのみにて生る者にあらず、神の道によりて活くる也。我石よりパンを作る事能はざるも、我裏にある理性によりて、能くパンに對する慾望を制するを得ん。（我宗教二二一頁）

是は即ち其の添删の例なり。彼は此に於て聖靈を拔き惡魔を「誤謬」に改め、四十日四十夜食ふことをせずてふ一節を删り、神の道と、人の理性とを齊うしたり。

姦淫の故ならで其妻を出す者は之を姦淫なさしむるなり。（馬太傳五〇三二）

人其妻を出す者は放蕩の罪の外に婦をして姦淫せしむるなり。（我宗教一〇五）

是は又彼の聖書改譯なりとす、然して斯く彼が改譯するに至りし動機は、基督の道は嚴格なる離婚禁斷の教にして、貞操を破る婦人といへるも、決して之を去るを許さずと云ふ主我的獨斷に根ざしたるなり。而して彼が斯く改譯し得たりと云ふ理由は、παρεκτός（ペレクトス）なる希臘語（新約全書の原書）が英語の except; outside; beside; なるが故に、「ならで」よりも寧ろ「外に」の方正當なりと云ふに在り。予之に答へて曰く、此場合に於ける παρεκτός（ペレクトス）の「ならで」なると「外に」なるとは問ふ所に非ず。孰れとも做さるべきものなるが故なり。唯此の語と連絡して意味を成す所の λόγος こそ、研究を價するものなるなれ。トルストイは此の λόγος に就ては一語言ふ所あらず。唯無造作に Mater 即ち事物となし、再轉して之を「罪」と做し、「罪の外に」と改めて得たりと思へど λόγος は決して事物に非ず、又殊に罪に非ず。此の場合に於ける此語は、reason（理由）又は strict relation（關係）の外ある能はず。故に英文聖書が παρεκτός λόγου を翻して Saving For the Cause 即ち「故ならで」と做せるは、トルストイの其に益して最も理由ある業とす。

是に於てトルストイに於て何等か嶄新なる意義を有ちたる樣見えたる聖書は、再び舊き根據に返れり。彼の病根は其の思考的利己主義に在り。彼をして更に僅に公平ならしめば、彼は過失少かりしならん。然も公平は彼が如き主義的頭腦に望むべからず。彼は此の主義

的頭腦に本づき、聖書の一面觀を振り舞はし、其の有名なる無抵抗宗、非裁判論、非戰爭、無政府主義などの空中樓閣を築き立て、世界の上に無數の崇拜者を作りたり。請ふ予をして此等の議論は若干の根基を聖書の土臺の上に有せるやを檢せしめよ。

（一）無抵抗の抵抗

彼の無抵抗の本文に曰く、

目にて目を償ひ齒にて齒を償へと言ること有は汝等が聞し所なり。然と我汝等に告ん、惡に敵すること勿れ、人汝の右の頰を批は又他の頰をも轉して之に向よ。汝を訟て裏衣を取んとする者には、外衣をも亦取らせよ。人汝に一里の公役を強なば、之と偕に二里往け。汝に求むる者には與へ、借んとする者を卻る勿れ。（馬太傳五〇三八―四二）。

是は此れ基督の金誡なり。「惡に敵する勿れ」なる無抵抗宗はトルストイの發明に非ず、基督の創唱に屬す。唯彼はルーテルが「義人信仰によりて活くべし」と云ふ聖句を十七世紀に叫びたるが如く、此の聖句を十九世紀の後半世に叫び出せり。其の首唱の功は固より彼より奪ふべからず。而して其の聲の偉大なること、反響の高大なること、又決して掩ふべからず。然れども基督の無抵抗とトルストイの無抵抗主義とは一面に於て一致する如く、他の一面に於て反對せることは精査を待たずして知るを得べし。基督の無抵抗は、彼が「我宗教」に於て其精神を說て言へる如く、「之を忍べ、之に從へ」と言へるなり。故に基督の無抵抗は徹頭徹尾惡に服從することとなり。然るに彼は「我宗教」に於てのみならず、其の「時代末」に於て是く言へり。

「身を殺して魂を殺すこと能はざる者を懼るゝ勿れ、唯汝等が魂と身とを地獄に滅し得る者を懼れよ」との教訓を、深く心に刻して忘れざれば、あらゆる服從より自由なるべし。彼等は他人の暴行には耐ゆべく、しかも心は毅然として高き人道に外れたる他の命に從はざるならん。

基督教は壓制に耐へよといへど、服從せよとは言はず。

彼は玆に至つて忍耐と服從を區別せり。然れども忍耐と服從とは元來一事にして二事にあらず。內面の忍耐が外面の服從と現はるゝのみ。忍耐なき服從の有る能はざるが如く、服從なき忍耐有る能はず。忍耐と云へば服從も亦其の內に在るなり、此の二者は畢竟一事實の

兩個にして、分つべきものに非ず。壓制に耐ふる、是れ即ち服従するなり。請ふ服従なき忍耐を我に示せ、然らば我服従なき忍耐を知るを得ん。彼は遂に斯の如く言へり。

凡の眞正の基督教徒は明瞭に兵士たることを拒絶せんとす。未た此の拒絶を行ひたる者は千人中の一人に過ぎざるが、此の行爲が社會に及ぼす勢力は非常にて、昧者も之に由りて神の教と政府の命との間に甚だしき矛盾あるを見、其心の自由を求むるの念盛なるに至りぬ。

彼の忍耐は一轉して抵抗となれり。基督曰く人若し汝に一里の公役を強ひなば、彼と偕に二里行け。トルストイは曰く、是は軍事に非ざる別種の公役を指せるならんと。非なり。原語 ἀγγαρεύσει は軍事上の使命を運ばすべき強行命令を課するを意味せり。παλεκτός に於て希臘語學者たりし彼は、此に於ても十分然るべき筈なり。而も獨り之に就て喋々として言ふ所なきものは抑も何ぞや。彼は玆に至つて基督の無抵抗に反對して無抵抗の抵抗と云ふ主義的本色を暴露し來れり。

（二） 非裁判論

彼の非裁判主義の根據は亦同じく馬太傳なり。

人を審判くこと勿れ、恐くは汝等も亦審判かれん（馬太傳七〇一）。

然るに同じ馬太傳に於て、基督は裁判權を承認せるなり。

世革り人の子榮光の位に座する時、汝等も十二の位に座してイスラエルの十二の支族を審判くべし。（馬太傳十九〇二八）。

彼は又其の獨斷を確定せん爲に羅馬書を引きたり。

是故に凡て人を審判く所の人よ、汝等推諉るべきなし、汝他人を審判くは正しく己の罪を定むるなり。そは審判く所の汝も同じく之を行へばなり。（羅馬書二〇一）。

然るに同じ羅馬書に於てパウロは國家と其裁判權とを識認せること左の如し。

上に在て權を掌る者に凡て人々服ふべし、蓋神より出さる權なく、凡て有る所の權は神の立てたまふ所なればなり。是故に權に悖ふ者は神の定に逆くなり、逆く者は自ら其の審判を受くべし、彼は汝に益せん爲の神の僕なり、若し惡を行ば懼れよ、彼は徒に刃を操す、神の僕たれば惡を行ふ者に怒を以て報ゆる者なり。

勿論パウロは凡の國家を認識したるに非ず、唯認めて

以て基督教的國家と稱すべき者あるを許したるものなるや論なきなり。是故にトルストイにして非裁判論を確立せんとせば、之が順序として先づ聖書の土臺の上に非國家主義の大原理を建設し、然て其の上に非裁判論を立つるに非ざれば、未だ完全と謂ふべからず。然るに聖書既に狹き版圖に於てといへども、國家を認識せる以上は、彼の裁判論は到底聖書の謂ふ所の沙上の家屋たるのみ。否獨り然るのみに非ず、其の家屋自身すら實物に非ずして虚像たるを免るゝ能はざるなり。

然らば則ち「審判く勿れ」とは何の謂ぞやと曰はん。是は猶太の國體の智識より之が解釋を得ざるべからず。當時の猶太人はサンヘトリムの議會と稱し、最高裁判權を執行する所の大審院を有す。其議員たる者は猶太人の首と稱せられて、委するに裁判權を以てされたり。基督の死刑も豫め此議會に於て審定せられぬ。然り而して此の議會の議員の外、一般の人民も此議會に對して定罪の發言を爲す權利を有せり。今基督の審判く勿れと言へるは、此の一般の人民に向つてなり。裁判權を委ねられたる議員に對してに非ざるなり。試に左の記事を見よ。

爰に奸淫を爲るとき執られし婦ありけるが、學者とパリサイの人(主にサンヘトリム議會の議員)之をイエスの所に曳來り、群集の中に置き言けるは、師よ此婦は奸淫を爲たる時其のまゝに執られし者なり。此の如き者を石にて擊殺すべしと、モウセの律法の中に命じたり。汝は如何に言ふや。イエス之に曰けるは、汝の内罪なき者先彼を石にて擊べしと曰ふ。(約翰傳八〇一—七)。

是れ正に有司の裁判權に就て問はれしイエスの答なり。彼は「罪なき者擊つべし」と曰へり。審判くべからずと曰ひしに非ず。罪なき者は以て人を審判くべし、否罪なき者にして始て人を審判くべしと曰へるなり。審判其物を非とせざるなり。勿論是の約翰傳の一章は、批評を加へたる新約より控除せられたる者なれば、之を握って直ちに證左とすべからざるは勿論なり。然れども之を以て初代基督教徒の基督教的意識の記述として觀るべき事實を拒絕することを得ざるべし。然して聖書に若し之と反對せる記述若くは說話なく、反て之と一致したる傾向ありとせば、此記事は參考人たる位

置より一轉して、證人たる位置に進むべきは當然なりとす。

(三) 非戰爭

彼の非戰論の根據は是なり。

殺す勿れ、殺す者は審判に干らん。(馬太傳五〇二十一)

彼は猶ほ此の本文を防禦するに其の非解釋論を以てせり。然れども彼の非解釋なるものは、彼の他の本文に對して容易に解釋を施せることに由りて當然無効に歸したるものと謂ふべし。是に於て「殺す勿れ」の此の聖句も當然解釋を施さるべきものとす。

夫れ此の聖句はモウセの律法の一個條にして、同じ律法は又他の個條に於て「人を擊て死しめたる者は必ず殺さるべし」(出埃及記二一〇十二)と言へり。此等の律法の意義は甚だ明瞭なり。「殺す勿れ」とは禁誡にして、「殺すべし」とは刑罰又は義罰を言へり。是に於て疑問は是なり。此の刑罰、義罰の權は、新約中に猶ほ生命を保てるや否。而して其の猶ほ生命を保てることは、前章既に之を明示したり。夫れ前章說く其の國家を許認し、又國家の刑罰權を許認せることを言へり。國家既に刑罰權を以て犯罪者を殺すことを得ば、國家豈に義戰を以て不義の國民を殺すことを得ざらんや。此れ殺を以て目的とせず、義罰を行ふを以て目的とすればなり。何物の痴漢ぞ殺す勿れの一語を以て、凡の刑罰權、義戰權を非認せんと欲するや。

且つ夫れ最も明瞭なる一事は、「人汝等に一里の公役を强いなば之と偕に二里往け」と云へる此の公役が、軍事に關係なき別種の公役に非らで、軍事上の使命を果す爲に課せられたる强行命令なる事既に前に言へるが如し。何物の痴漢ぞ此の本文の上に無抵抗の主張を置いて、而して從軍の拒絕を奬勵せんとするや。

(四) 無政府

彼が非裁判、又は非戰爭に於て豫想せられたる非國家主義は、始めて其晚年の提唱に係る無政府主義に由りて具體的に顯はれたり。彼は其の「時代末」に於て

國家の有害を論じて曰く、

無道なる軍備と戰爭、及び人民より土地を剝奪せしことは、基督教國全體に起らんとする革命の原因なること、予の反覆し言ふ所なり。……現今の政治組織より利益を受くる上流の人士は、政治機關なくしては人民の生存し能はざるを說く。然れど國家の重味に壓せらるゝ下流の人々に尋ねて見よ。一億の露國農民に國家の要を聞けよ。彼等は唯其を以て堪へ難き重荷となすのみにて、斯の如き者の存在せざるを希ふならん。

聖書を論じては過失の多きに勝へざる彼も、國家を論ずるに於ては正鵠を過たず、殊に其自國の國情を慨き、之を拯濟せんが爲に無政府主義を提唱するに至りし事情に至つては、吾人の同情に耐えざる所なり。其れ然り彼は此の横暴にして壓制を極むる基督教國、其名あつて其實なき基督教國の迫害を遁がるゝ方便として、無政府主義を執るものなるが、其の無政府主義なるものは、果して天下億兆の民を國家の厄より救ふことを得るものなるか。先づ問ふ無政府主義とは何物をか意味する。無政府主義とは讀んで字の如く、國家から政府即ち權力を取り去ることなり。然れども今日政府を戴いて活動し居る一切の國家から、如何にして此の政府なる頭腦を斷り棄つるを得るか。其の方法果して如何。彼曰く、

人間が天賦の自由の意識を生し、其心に違背せる行爲は斷じて爲さじと決したらば、かの人爲的結合(國家)は破るゝなり。

此の如きか彼の方法の迂濶なること。是の如きは約二千年間基督教徒が切切孜孜、力を竭し心を殫し生命を盡くして努力し來れる所に非ずや。然して其の贏ち得たる所は、彼の見て咀へる所の暴惡なる基督教國と稱するもの其物ならずや。若し「人間が良心に違背せることは斷じて爲さじ」と一たび決して、而して其の決心が恃むべきものならしめば、今日に於て謂はゆる基督教國の人民は、皆嘗て一たび其教會に於てバプテスマを受くるときに、此の如く決心したる者なり。然も其の此の如く良心に違背しつゝ而も顧慮する所なき者は抑も何ぞや。此の如きかトルストイの無政府主義の無策なること。

且彼獨り無政府策に於て迂濶なるのみならず、彼は

毫も天下の形勢に通ぜざるなり。彼の人道復興の大革命以來、近世史の世界を動かすものは、復や基督教の精神に非ざる他の精神なることを、彼は毫も察せざるなり。宗教改革以後の世界が、謂はゆる「國家興つて國家を擊ち、國民興つて國民を擊つ」、世界最後の一時代なるを、彼は毫も感ぜざるなり。其の同時代に在つて、有力なる進化論が如何に團體主義を以て、彼の謂はゆる「敵國民を愛せよ」の主張を冷笑し居るか、彼の隣國に於けるニイチエが、如何に殺盜主義の喇叭を吹き立てて、彼の謂はゆる「良心主義」、「合理主義」を威嚇し居るかを彼は嘗て思はざるなり。彼は恰も都會の外に在つて世の變遷を識らざる田舍翁の如し。彼の無政府主義の言語は當に十四世紀以前、人道復興以前の時代に於て爲さば或は一顧を値すべし。迂なるかな此のヤスナヤポリナヤの聖人や。

結論

無抵抗より起つて無政府に終るところのトルストイの思想は、唯一片の空想にして、何等實物の其中に發見せらるゝ者あることなし。彼は實に空想家、即ち是れ詩人にして、其以上の何物たるを得ざるなり。彼がヤスナヤポリナヤの貴族生活、甚だ明かに彼が詩人たる事實を語れり。豈に其れ然らざるか、嗚呼豈に其れ然らざるか。

近來德富蘆花氏を訪うて談偶々トルストイのことに及ぶ。僕問うて曰く。若しトルストイの著作悉く燒き盡して僅かに一二を殘すことを許さば先生は何を殘さんと欲するや。蘆花氏答へて曰く。予は "War and peace" と "Childhood, boyhood, and youth" を殘さん。更に問うて曰く "Anna Karenna" は如何。蘆花氏曰く今一つを加ふるか許さば即ち "Anna Karenna" を取らんと。（樗陰生）

歐米旅行見聞錄

戸川秋骨

巴里の夜景

パリより御消息申上候當市は聞きしに違はぬ樂天地にて頗る居心地宜しく候旅館はスグ大藏省と向ひ合はせにて同廳にて執務致し居候處を朝夕見て居候街上を行く馬車の馬の足踏みソク／＼と音して調子よく、五騎六騎連なり行く騎兵の甲冑姿は芝居にても見るやうに美しくまた華やかに候――尤も此の樣子では戰を仕たら嘸かし弱からうと思はれ候――ノートル、ダムも一見致し候セーヌ河畔も逍遙致し候が高帽にて大公望をきめ込み居るもの夥しきには可笑しくなり候、トロカデロより都を見下したる景はまことに此れこそ樂園なれとの感を起させ候、シャム、ゼリゼーの夕景また筆紙に盡しがたきほど見事に候、ルクサムブルグを見、ループルの畫堂を見物致し候が此れは結構過ぎて少々食傷の氣味に有之候ひき如何に結構とは申ながら山海の珍味をコテ／＼と盛り上げられては見た計りでウンザリ致し候歐洲古今幾百年の名畫幾百千を僅に二三時間を以て觀覽しては賞鑑も何もあつたものには無之、第一の印象は第二の印象で打ち消され、更に第三第四と重なりて、見物し終りたる時は凡てがメチャ／＼になり候。尤も小生の旅行は非文學非美術的の無心旅行に候へば、斯樣な見方こそ却つて其旨にかなひ候事には候へども、折角寶の山に入りながら手を空しくして歸り候樣の感有之候ひき。序に申候が非文學非美術の旅行のなかに當處にてファウストのオペラを見物致し、少々有情的文學的の考を呼び起され候には、恰も樂しき夢を破られたる樣の心地致し甚だ閉口仕り候。今更らファウストの功能を申すには無之候へども、此れが歌謠となりて演ぜれ候を見ては、何んだか――洒落た言葉を以て申せば――若き血の湧かされ候とか申すやうな理由て、深き／＼感銘を與へられ候、實にファウ

ストはイヤなもの恐ろしいもの、不健全なもの、二度とは見られぬもの、此れこそ永久無限の大悲劇人生普遍の大惨事とツク〴〵思ひ及ぼされ候。見て居る内に現下の非文學非美術旅行を忘れて身は幾年かの前、それを愛讀した昔にかへり候は吾れながら笑止の事と自分の俗化のまだ足らぬを後にて嘲り申候、が此の演戯は只今思ひ出してもゾッとする樣に御座候。

なほ劇場内部の事を申上げんか、華美盛粧の美人、白襟黒衣の紳士相ならび居り候なかに、小生獨りは怪しき身支度にて丁度謡本を扣へて御能を拜見するやうな格で舞台とオペラの本とを等分に見分け居候處は傍の見る目定めし可笑しかりし事と自分にも心附き候がナニ糞、奴等にフアウストの眞意が分つてたまるものか、おれは極東の書生だが、貴樣等よりは此の曲の面白味が分るのだぞと、誰れも何とも言はぬに獨りて腹の内にカラ威張をして見物致し候次第に御座候。非文學旅行に候間文學的の事はやめにして俗氣のある處を御紹介申上候、座はグランド、オペラに有之候が、演藝中は騎兵が、素より騎馬にて此れを守衛致し居候一小隊ありと人の申候が、そんなに多くは見え不申候ひき。見物の御婦人連は何れも肌ぬぎ、腕まくりの御盛裝て、化粧の水をプン〴〵香はせ、さらに扇を使用なされて、そのえならぬ薫を遠くまで散らし居られ候、僅かに五六分の幕間には何れも長サ數尺にも亘るべき裳をヌル〳〵と引きづりながら廻廊に運歩を運ばされ候廻廊にはまばゆき計りの燈光燦として――白熱光かアセチリンか――其御姿を照らし候只美しきをと申せば舞台面よりも此御客樣を拜見した方遙かに勝り候、かゝる御婦人連の歩ませらるゝ中を、頭はガリ〳〵坊主の、足には踵の曲つて、其斜面が五十度にもならうと云ふ靴を穿つて徘徊致し候は則ち小生にて、動もすれば滑てころばんとし――幸に古靴の摩擦力強くて此の難は免れ候が――或はかの數尺に亘る婦人の裳の端を踏み付けんとするの危險に際會致し候。

此の婦人のうちには所謂澤山のコオテザンが居り候事勿論にて、それ等は芝居のハネ候後カッフェに入り紳

士と飮み且つ食ふを例と致し候由小生等もカッフェに入り飮料を貪り候――コ、て一寸カッフェの事を申上候がカッフェは其の內部の坐席の外に、往來に天幕をつき出し、その下に幾台となく卓と椅子とを置き、坐席を備へ候、それ故內に入らずとも、外に坐りて手輕に酒なり茶なりを試み得べく候。只今十一月の末にてあまり暖くもなきに拘はらず、無數の人が此處に坐を占め、ユル／＼と新聞を讀みながら茶を飮むもあれば、杯を手にしながら往來をながめ居るも有之候、これ等の中には一時間も二時間もこんな風にして坐り込んで居るも有之候由、至極のんきな、ひま人の居る處と存じ候。カッフェはこんな處に候が只今丁度夜の十二時に候へども、芝居の歸り客の集り候ためか、こゝに集り居候もの頗る多く、それをあて込みに色々のもの賣りが前に立ち、小生には分かり兼ね候事を呼び居り候。其中に風體あやしき男が、丁度吾が紙屑ひらひの樣に、竹の棒を一本持ちて何かさがし居候、案內の人に尋ね候處此れは竹の棒の先きに釘をつけそれにて客のすてたる吸ひさしの煙草をひらひ歩くものなる由承はり候、華美を競ふ一面には又こんな見じめな光景も有之候。

夜の更けたるに拘はらず、御多分に洩れず三十分計りカッフェに坐り込み、サテ旅館へと歩を向け候に妙な男が二三人ノソリ／＼と何か言ひながら跡について參り候、ヨク聞き候へばかれ等は英語にて小生等に案內をしやうと云ふのに候、夜半一時に近きに案內しやうと申すは云はずと知れた處に御座候、小生一人ならば至極結構、渡しに船と申す處に候へども同伴の手前少々妙ならず候故、默つてヅン／＼歩き居り候へどもかれ等決して退却せず、四フランで宜しいが、三フランで如何ですとウルサク附きまとひ候故、オレ等は行く處が極つて居るのだと、やうやくハネ附け、所謂極つて行く處なるスグ近くの旅館に引きとり候。此の種類の案內すでに異なるに、外國の客と見て英語を以て客引をするとは習俗實に驚くべく候、カッフェの前を通る女には澤山商買人が居る由に候が現に過日も町の角にて

それが男をつかまへて談判を致し居候を見受申候。モーパッサンのものなどにある光景を一寸通りすがりの旅客なる小生が實見致し候とは頗る意外に存じ候。日本も其方には中々ひけを取らぬ國と承はり候まゝ、少しパリを眞似て外國人の血と金とを絞り取つては如何なものと、アッパレなる考案を立て申候。

併しパリ人は華美のやうに候へども實は中々質素にて偏に外國人に金をつかはし自から利する事を考へ居り候由、かれ等の花客は主として米國人に有之候とか、それがため美術品も貴重品も日を追ふて新世界に走り候は大方人の知る處となり候。

小生の只今の希望は英人のカルチュアを有し、米國の富を持ちてパリに住みたき事に候。

十一月二十八日　　ルーブルの大旅館にて

米國雜觀

大西洋上の樂天地（藝苑）、及び、第二の故郷（趣味）の通信を參照ありたし。

過般は贅澤なる汽船カイゼリン、アウグステ、ヴィクトリアの事を申上候がこん度は同樣贅澤なる汽車の事を御紹介申上候。贅澤なる汽車はニューヨークと桑港若くはヴァンクーバー間を走る寢台車もそれなり。又フランスにはワゴン、リュークスとか言ふのも有之何れも試み候へども其中尤も贅澤なるものはニューヨーク、シカゴ間を走る 20th Century Limited なるものに御座候申すまでもなく此れ等の汽車は凡て寢台車のみにて乘車賃の外必らず寢台車料を支拂ふべきは勿論の事に有之なほ喫煙車社交車食堂車の附屬致し居り候事も勿論に御座候が右二十世紀リミッテットに於ては他に見るべからざる各種の設備有之候。會社の提灯持となるわけに候へども一と通り其の設備を申上候へば左の通りに御座候、第一汽車中に電話の設備ありて乘客がニューヨークなりシカゴなりを走る最後の瞬間に至るまで其の家庭なり商店なりと談話を致し得る事に御座候則ちこれは今發車するといふ間隙に用事を忘れステーションまで行く時がないと云ふ時用ふ

るものにて　は反對に留守宅より乘客の方へも談話致し得る事勿論に御座候第二は社交車の廣大にして且つ汽車の最終に有之候故四方を看覽致し得る事則ち此れを「見物車」と申居候第三には婦人の給仕の乘込み居り候事に御座候此れは婦人の乘客には多大の便宜と存じ候尤も此の婦人の給仕は獨逸にては澤山に用ひ居候第四には汽車中にて必要書類の書き寫しを爲さしめ得る stenographer なるものの居る事に御座候小生は平素汽船の發達進歩を認め居り候へども汽車は十年一日の如く依然として舊態を改めず此れその舊態を改める餘地のなき故と存じ居り候ひしも何事にも改良してやまざる米國は遂にこんな汽車をつくり出したかと又々少々感心致し候

併し設備はなほ此れにとゞまらず更らに珍らしからぬ事ながら二三の事を記して參考に供し候第一散髮此れが五十セント髮洗ひ五十セント顏面按摩五十セント髯剃り二十五セント髮縮らし二十五セント髯チヤラシ二十五セント入浴七十五セント爪取り七十五セントに有之候則ち日本流の散髮を致すには一弗二十五セントを要し候此の內按摩と爪取りとは少々異樣に聞え候へども當方にては散髮店に附屬したる極めて普通の事に御座候次には衣服の「火のし」にて三組揃ひの「火のし」が一弗二十五セント、オーバーコートが一弗、只上衣のみが七十五セント、ズボンが二十五セント、胴衣が又二十五セントと云ふ割合にて之れが夜汽車にて寢るとすぐに其の脫ぎすてし衣服を「火のし」してくれ明朝目のさめた時には立派に折目正しくなつて居るといふ寸法に有之候衣服の「火のし」も當方にては常にやる普通の事に御座候。

こんな設備は普通の贅澤車以上の贅澤に候が速力も先づ世界一と申候尤も短距離の間を走るものなれば佛蘭西に此れよりも早きが有之候由承はり候へども此れはニユーヨーク、シカゴ間を走るものにて其距離八百何十哩其費す時間は十七時間に有之候さて最後に此の贅澤なる汽車の乘車賃に御座候が此れも隨分思ひ切つたる御直段にて普通の上等の料金として先づ廿弗を取

られ急行の割增として十弗、寢台車の代として五弗都合三十五弗を拂はなければならぬわけに御座候其上夕食と朝食とに一弗づゝ給仕人に心附けをやる、寢台車の世話する男に同樣心附をするかれこれ四十弗を要し候此れを日本の金に換算すれば八十圓とは隨分思ひ切つたる直段にてドル崇拜のアメリカならではなき事と存じ候さらに此れをカイゼリンアウグステ、ウイクトリアのニユーヨークよりロンドンまで約百弗にて一週間航海するに比して、此の汽車の如何にも高價なるが感ぜられ候。

　さて汽車が船にのせられて湖水を渡り候は驚くべしと申せば驚くへく候、此れは處々にある事に御座候又馬車に乗りながら其まゝ渡し船にのせられイツカ河を渡り終り候は贅澤と申せば贅澤に候此れはニユーヨークより向ふ岸のゼルシーに行く時の事に候併し小生の如く人の背中にオンブして世界一の船にのり世界一の汽車にのり候はさらに驚くべくさらに贅澤なる事と申すべきか旅館の writing room てこれを認め居り候と大勢が珍らしがり色々の話を仕かけ思ふ樣にかけず御覽の通り變なものになり候御判讀を願ふ。

十二月末日

文藝雜考

醒雪

歌謠のリズム

日本の歌のリズムには如何なる種類のものがあつたかといふと、先づ五と七とであることは、何人も思ひよるところで、奈良時代までは、それが結合した五七と七とが最も多く用ゐられて、稀に五及び七七があるが、平安朝に入つては新に七五が生じて且つ五や七七も盛に用ゐられた、この外單獨な七の調も催馬樂や狂言中の小歌に往々見えてゐる、德川朝に入つてからの俗謠も、大體七五と七七であるから、要するに日本の歌謠のリズムは五、七、五七、七五、七七の五種であるといつてよいのである。

これは、殆んど何人も認めてゐるところであるが、其の五又は七の中に、更に細かなリズムがあつたのではなからうか、これ亦多くの人の思ひ及ぶべき所で、現に萬葉の歌にも、三二四三といふ風のタクトがあつただらうと推測してゐる人もある、新體詩家の中には現にこれを研究してゐる人もあると聞いた。だが、僕の信ずる所によると、萬葉時代には、未だ五又は七といふことより更に精密なリズムは無かつたものだ。初め二三巻に就いて調べて見ると、五七の音は二と三とのあらゆる錯列を爲してをるのみか、對句のやうな形をなしたものですら、音數の上では對してゐないのが多い、例へば、

（はる[二]、くさの[三]、しげく[三]、おひたる[四]、
（かすみ[三]、たつ[二]、はるひの[四]、きれる[三]、

（ゆふされは、あやに[三]、かしこみ[四]、
（あくれば、うらさび[四]、くらし[三]、

などの様に、意味は類似してゐるが、音楷は全く反對してゐる。これが五又は七よりも更に精密なリズムを感じなかつた、確な證據ではあるまいか。ことにこれが拙い作ばかりに見えるといふわけではなくて、人麿や赤人の作にも多いのであつて、「時なくぞ、雪は降りける、ひまなくぞ、雨は降りける」などのやうに音數の相對してゐるのは、却つて、意味の類似から來つた偶然の結果である、決してリズムの爲に作つたものではないと思ふ。

唯、最後の七七を三と四とに分つて見ると、三四四三となるのが頗る尠い、（字餘や字足らずがあるから、精密には言ひないが第一巻には、この調と見えるものが三首しかない）「きしの、はにふに、にほはさ、ましを」「やまの、しづくに、ならまし、ものを」などがその稀有の例で、何となく調子が浮いて聞こえる爲でもあらうか。但し、四三四三は頗る多いから、最後の七を四三にしないといふわけではないので、奈良の末に七七調が生じてから後に、七よりも更に微細なリズムを感ずるやうになつたものかも知れない。これは未だ難問である。

平安朝に入つて催馬樂が流行した、これにはやゝ精密な拍子が現存してゐる、だが、元來、外來の音樂に合せたものであつて、日本の詩に一定のリズムを作るには至らなかつたやうだ。て、初めて、日本の歌謠に、七又は五よりも更に徵細なリズムが出來たのは、七五の今樣が初てあると信ずる。

七五の今樣の祖と稱せられてゐる「いろは」歌は、次の通てある、

いろは、にほへど、ちりぬるを、わがよ、たれぞ、つねならん、うゐの、おくやま、けふこえて、あさき、ゆめみし、ゑひもせず。

第二句が三三五である外は皆三四五てある。この三四五が今樣の整調と見えて、王朝の末の梁塵秘抄口傳集、體源抄などに見える七五の今樣、十首三十八句を檢べて見ると、三四五が二十句、四四五が十二句三三五が一句て四三五は僅に五句に過ぎぬ、其他二五五や五二五は一つも見えない。すれば、當時の今樣は、恐くは四四五といふ調子て謠つたもので、三四五や四三五の句はそのいづれかの三を一音だけ延ばして拍子に合せたものであらう。

降つて德川時代の俗謠になると、又著しくこのリズムが見える。慶長頃のものといふ隆達には旣に七七七五のものはあるが、例へば

思へば君よ汐干るまにも必ず浪のよるとなく

君故ならば雪の野に寢よしよしやこの身は消ゆるとも

夢に見えつゝ、うつゝになれつ笑止とさらぬ面影や

といふ調子て、一讀して、今の獨々乙とは違つたものと感ぜられるてあらう。ところが、其中に、稀に、極めて稀に、

寐ても覺めても忘れぬ君を焦れ死なぬは異なものぢや

といふ風の獨々乙調のものが混じてゐる。

然るに寬文頃の江戸弄齋元祿の投節などになると、盡く三四、四三、三四、五に一定してゐる。これは必ず節が細かくなつて、更に綿密な詩のリズムを要する

やうになつたことを證明してゐるのである。

それのみならず、絲竹大全の大幣に見えたる、投節の謠ひ方を見ると實に次のやうに記されてある。

まれにあひみし、うきねのナとこの合、ゆめなさましそナかねのこゑナン合 さましそナゆめな合、ゆめなさましそナ、かねのこゑ

となつてゐて、其の第二第三句はナといふ拍子の音て切つたり、又は上下に轉じたりして謠ふのであるから、勢、四三三四とせねばならぬのである。「涙ながらに、見る玉ナ章を」などの類も稀にはあるが、勿論それは出來損ひてある。

こればかりでは第一句の三四であるべき理由が見えないが、次の歌の如きものは(後世のものではあるが)それが明かに分けて謠はれてゐる。

天滿橋からノウルイルイ、てんまサイサイばしから、東を見れば、鐵砲かたげて、小隊進め。

この俗謠と中古の今樣と、この二つのものが、明にリズムを認め得べきもので、此の外には、殆んど五と七よりも細密なリズムを明確に認め得るものはないやうである。あれほど綿密であつた師範家の歌道にも、この點は一向に論ぜられなかつた樣で、唯足利の末の連歌師の一人が(確か宗長であつたと思ふがよく記憶しない)發句の下の七五を三四五とすれば調子がよいといつてゐるのが、稀な例である。

謠曲や淨瑠璃や端唄などに就いて、三四の變化を覓めて見たらば、面白い結果があるかも知れぬと思ふが、まだ着手することを得ないから、先づ明白なもののみを擧げて、同好に似すのである。

戸水博士談片

告天子

二月十二日戸水博士を訪ふ。談偶々時事に及ぶ。博士例に依て氣焔甚だ揚る。今其談片五六を錄して讀者諸彦の清覽に供す。若し中に誤あらば記者不敏疎漏の罪、累を博士に及ぼさゞらんを祈る。

▲支那は未だ〳〵ものになりさうに思はれませんよ。先づ第一に漢人種と滿人種との問題が極まらなくつては到底も駄目てす。支那國內に於ける此二人種の爭は局外者の思ふよりも案外激烈なものてす。吾々から見ては支那人はどれもこれも同じやうな顏附に見えるが彼等は一見して漢人種と滿人種の區別が分るさうてす。此二人種の地位が定るか或は調和の道が講ぜられた曉てなければ支那の勃興といふことは六つかしいてせう。

▲此二人種の優劣てすか。矢張り滿人種の方がエライてせうな。然し北京近傍に居る奴は皆柔懦になつて了つて到底も見込がないてす。此等の奴等ばかりなら漢人種にやられて了ふかも知れぬが、然し滿人の起つた地方の人間は今ても隨分エライ奴があるてせうから、此二種の優劣勝負といふことは面倒なことゝてせう。

▲然し支那でも文明の利器を輸入し、日新の科學を研究しつゝあるから、無論次第に覺醒して來て、東洋の一勢力となることは疑ないけれども、今いつたやうな人種の問題があるから此所十年か廿年の短歲月ては先づ〳〵見込がないものと思ひます。

▲滿洲の方は旨くやりたいものてす。後藤君が滿鐵の方へ行き、又吉林の方にもなか〳〵遣手の人が行たやうてすから、大抵旨く行きませうよ。然し支那人といふ奴はなか〳〵一條繩て行かぬ奴だから、たゞ〳〵穩和しくばかりやつて居ては失敗しますよ。矢張り時としては露西亞風の遣り方もやつた方がいゝてす。露西亞の遣り方は隨分ヒドイことをしますよ、金をやつたり、或は嚇したり、或は叱つたり、或は笞つたり、或は禁錮したり、もうあらゆる手段を用ひて支那人をして自分等の計畫したことをやらせます。然しこれが支那人に効力がある場合があるのてす。日本も時としてこういふ手段を加味してやつた方がよいと思ふてすね。

▲露國と日本と一時妥協し、親和しても末永く平和の關係に立て居ることは困難てせう。何故といへば兩國の利害といふものはどうしても衝突しますからね。

だから矢張り私の持論の通り、バイカル湖迄露人を退却させて、彼處を兩國の境とする覺悟を立てなくては行けませんよ。

▲最う十年位は先づ戰爭はないものと思ひますが、然しどんな豫言者でも將來の事を間違なく知り拔くといふことは困難のことです。日本は矢張り一旦緩急ある場合でもまごつくことがないやうに軍備を擴張して置く必要があります。

▲然し日本で先づ第一に必要なことはいふまでもなく實業の發展、國富の增殖といふことでせう。例へばポーツマスの條約でも、日本の外交官のやり方のまづいといふ處もあつたに違ひないが、聞いて見ると其外いろ〳〵の事情がある樣ですよ。其事情の主なる一つは日本の大砲の丸に使つて居つたズックは亞米利加から輸入して居たもので、此ズックが亞米利加から來なくなると戰爭が出來ないといふ仕末ださうです。それで此講和の勸告を敢て斥くるといふことが出來ないといふこともあつたさうです。戰爭に用ふる必要なものが一國內で出來ないなんて、情けないことでありませんか。

▲日本の敎育家の多くは所謂敎育家で、廣く世界の大勢から割り出して敎育の方針を立てるなどゝいふことは比較的疎かにされて居るやうに思ふが、甚だ遺憾な事です。文部省などはパッとした花々しい事はやれぬ所だが實際に於ては國家の發展上最も重大な、最も責任の重い處だと思ふですよ。

▲松や杉の林を仕立てるには百年位かゝりませう。然し人材といふ材木をそだてるには二三十年あれば澤山ですよ。譯がないじやありませんか。これから中學校あたりの方針もどし〳〵實業向きの人材を作ることを心懸くるやうにしたいものです。人材さへあればなアーにどんな事でも出來ますよ。

▲獨逸皇帝の野心は東洋に於ては西洋の力を一致して東洋をたゝきつけ。西洋に於ては露國と協力して英佛等を抑へつけることにあるでせう。

▲廿世紀は社會問題解決の時期でせう。西洋では勿論

社會問題の解決を促すの機運が益々激しくなつて來ますし、日本でも追々は同一の機運に支配されるでせう。現に足尾の騷ぎなども顯著なる其一例ですからね。私は勿論足尾の騷ぎに賛成するといふ譯ではないですが、資本家ばかりいゝ汁を啜つて、勞働者が汗水を流して馬鹿を見て居るといふ今日の有樣は決して永くは續くまいと思ふです。兎に角廿世紀は社會問題の大に勃興して之が解決を要求する時期でせう。

▲私は此頃ラッサの旅行記とか、フキリッピンの事情を書いた本を讀んで居ます。フキリッピンの本ですか?、えゝいくらも讀みましたよ。今讀んで居るのは此頃出來た新らしい本です。私は本を讀むに早いですよ。大抵人の半分位の時間で讀んで了ひますがね。其中に何か書くべきことがあれば書いて上げませう。

蓄妾課税論

福田笑迎

天、物を生ずる、必ず用あらざるなし、是非相混じ、利害相伴ふと雖ども、其非なるを除き、其害なるを去り、而して剩すところのものを用ゐば、資益生じ、功效現はれ、塵芥の微も、糞土の穢も、之を棄つべからざるを見るべし、是れ實に造化攝理の妙にして、社會人事に觀照するに至ては、更に感嘆に堪へざるものあり、賭博の戒むべきは古今東西曾て異なるなく、現に萬邦齊しく法律を以て之を嚴禁すと雖ども、一端の理を叩けば、尙ほ之が公許の必要を發見し難からざるものゝ如し、只だ詐欺泥棒は論外なり、而して詐欺泥棒と擇むなく、蓄妾の事や、百方之を硏究して、終に百害ありて一利なく、社會の大毒にして、人事の大敵たるは、造化攝理の妙を以てして、甚だ不可思議ならずとせず、况んや世間曾て之を怪しまず、否、啻に怪しまざるのみか、金屋綠珠を蓄ふるの豪奢は、自ら誇

るところにして、又た他の羨むところたるは、寧ろ天下の大咄怪事たらずんばあらず、人情色を好むの甚しきものありて、深く之を顧み問ふなきか、抑も又た之を知て而して一種の必要物として寛假するか、何れにしても諸般の問題が、八釜しく、うるさき程に數へ立てらるゝ現時に於て、蓄妾の事の、獨り問題外に超然として羽翼を伸ばし、日に月に年に益々其勢ひを逞うしつゝあるは、爭ふべからざる事實にして、之を閑却するの結果は、意外の害毒を醸成せんこと、眞に痛嘆すべし、左までに恐るべからざるに大に恐れ、而して大に恐るべきに却て恐れず、漫然看過するは、一般の通習にして、是れ其親易きと、親易からざるとに依て、之に對する感想の厚薄をなすに外ならずと雖も、而かも顯れたるに先づ驚き且つ騒ぐは昧者の事にして、識者に在ては、隱れたるを探り、埋もれたるを抽き、よく物の利害を究め、而して噬臍の悔なからんことを期す、我輩を以て蓄妾の事を觀るに、世間之を善事となさゞるも、而かも未だ之を惡爲となさず、乃ち惡爲となさゞると共に、咎むるものなくして、又た恥づるものなきが故に、自ら之を恐るべきの甚しきものとなす亦た稀れなり、我輩本論を試むる、實に已むを得ざるに出づ、豈辯を好まんや。

一夫一婦は人倫の大本にして、偕老の契、琴瑟の和は、啻に一家の慶事のみならずして、社會幸福の基也、國利又は國益の名の爲めには、心身を傾注するを辭せずして、家庭の事の如きは、寧ろ冷淡に付し去られ、甚しきは閑人の閑言語として葬らるゝことなきにあらずと雖ども、是れ我邦人の弊習にして、宜しく矯正すべき事たり、況んや蓄妾は直ちに一夫多妻の蠻習と毫も異なるなく、而して家庭の平和を傷ぶり、社會の風紀を紊すの甚大なるものたるをや、夫れ妾を蓄ひ、之を愛し、之と親しむ、素と肉慾の要求より出て、之に依て娛樂を得、愉快を感ずることとなるべく、乃ち此事、人間生必至の慾の一顯象にして、何の思議するなきに似たり、且つ妻を娶て兒を生ます、血統の断絶、身家の將來を憂ふるもの必ずしも肉慾の要求に驅らるゝに

あらずして、眞に必要中の大必要となすものあらん、亦た一應の理あるに似たり、而して之に止まらず、更らに經濟上(?)より打算して、賣淫婦に戯るゝの財を糜するの徒らに多くして、利慾と肉慾とに制せらるゝものにありては、蓄妾は正に是れ最大便法として、宜しく慫慂すべきに似たり、然れども這般孰れも所謂泥棒の理屈にして、取るに足らぬこと言ふまでもなし、我輩之が爲めに論辯を費やすの愚を好まず、只だ斯くの如きは畢竟世に道德なるもの、風教なるものゝ存在を蔑視するに過ぎずして、眞に理を究め、眞に道を求むるものたらざるを斷言し置くを以て足れりとすべし、然れども馴れて怪しまず、怪しまずして自から傷つけ、世を害するの甚しき、天下之に過ぐるものあらざるを見ては、則ち將に筆を禿し、口を爛らすも亦た辭せざらんとす、思ふに世の所謂妾たるもの、好で妾たるにあらず、自ら口を糊する能はず、親を養ふ能はず、貧に迫られ、窮に迫はれ、厄を救ひ、難を濟はんとして、即ち身を他に托し、而して節を賣り、操を辱かしむるに於ては、藝娼妓と異なるなくして、亦た甚だ憐れむべく、人をして轉た同情の涙を禁ずる能はざらしむるものなきにあらずと雖ども、仔細に其實狀を探ぐれば、全く之に反して彼等の多くは、身を他に托すると同時に、早くも昨の處女忽ちに今日の惡鬼となり、人の家を破り、人の子を害し、無道飽かず、殘忍至らざるなきもの、眞に慨嘆すべし、口は膏粱を喰ひ、身は錦繡を飾り、家は清麗洒灑にして、自ら宅を構ふるにあらざれば、則ち巨邸大廈に主人の一族と雜居し、宛として貴婦人の如し、而かも是れ必ずしも己れの欲するところに出でずして、皆只だ主人の爲すところ、且つ奢侈敢て罪ならず、贅澤三昧決して他の頓着するところならずと云はんも、抑も前日の苦患を忘れて、俄かに安逸に耽るは、人生最も戒むべき事にして、弊の增長するに於ては、虎狼の慾、人を嚙み、人を殺すに至らずんば已まず、況んや素養なき婦女子の所謂氏なくして玉の輿に乘る、危險此上あらずして、之を顧み、之を愼しむことの難き、言はずして知るべきのみ、彼

妾なるものの前身は轗軻數奇なりしなるべし、然れども其現在は薄倖ならずして、或は多福なるに似たり、半夜燈前、孤座すれば感慨無量、涕涙巾を濕らすなきにあらざるべきも、已に活路の憂なきのみか、常人を凌ぐの驕奢遊戯に日を送る、如何ぞ倨傲ならざるを得んや、藝娼妓の苦を出てゝ又た苦に入り、貧に長じて又た貧に陷るに比して、夫れ果して如何、且つや藝娼妓の冶郎蕩兒を擒にして財貨を貪るは、其害大ならずとせざるも、外に在て一人を害するに止まり、之を妾なるものゝ内に在て、彝倫を亂だし、家庭を紊だすの甚しきに較ぶれば寧ろ害の小なるものとすべくして、彼れを劇藥とせば、則ち此れを毒藥となすべし、恐れざるべけんや、出來得べくんば、斷じて之を禁遏し、社會に其影を留めしめざるを要すと雖ども、人の自由は如何ともすべからず、只だ夫れ其數を減じて、禍害の幾分を少うするを期するは、經世家の本分にして、爲政者の責任ならずや、現はれたるを見て後之に對するの道を講じ、而して隱れたるを知らずして之を昧晦に付す、是れ斷じて識者の事にあらじ。

大凡そ世に禍を去り、害を除くの道二あり、道德と法律の制裁即ち是れにして、蓄妾の事の如き、其禍害隱微の間に在るが故に、之に對する責任義務は、自ら宗教家乃至學者に在るが如しと雖ども、道德の制裁は寧ろ反省を促がし、改悛を促がし、魔道より次第に善道に向はしむるに止まり、表面現在の事題に對しては、釋迦の說法も或は一ト屁に若かず、孔子の敎訓も三文の價なきに終らずとせず、而して法律は漫に社會の內裏に入り、人の隱微に涉るを許さずと雖ども、尙ほ範圍限度の然かく狹小ならざるものあり、殊に我邦民法の如きは、隨分人の家庭にまでも干涉する少からざる觀なきにあらずして、又た我立法者の世話好きなる、少年の禁酒禁煙をも、法を以て之を勵行しつゝあるを見れば、蓄妾の事、未だ必ずしも默認するものにあらず、全然之を杜絕し、禁遏せざるまでも、其幾分を減ずるに於て、蓋し必ず恰好の方法なしとせざるべし、而して我輩の思ふところに依れば、妾を蓄ふるもの、大概

中流以上の位地を有し、生計を有し、即ち名譽あり、資産あり所謂紳士なるを以て、斷然之に重税を課するも、決して無理とはなさゞるを信ず、啻に無理ならざるのみならず、風紀を振肅するの最良方法にして、且つ國庫の豐富を圖り、國家有用の費途に充つるに於て、之を細民の膏を絞り、彼等をして苛に泣き、酷を訴へしむるに比して、實に道を得て最も其宜しきに適へるものならずや、而して吏をして聚歛の名を負はしめず、官自ら民の怨府とならず、上計妙策ならずして何ぞや、更に藝娼妓税の存するに見るも、新たに蓄妾税の一目を加ふるは、事の均衡を得る所以にして、理に於ても見逃すべからざる事に屬す、若し日本紳士富豪輩の趣味汚下にして、酒に荒み、色に耽るの外、文學藝術を解せず、山水風景を愛するを知らず、娛樂を求め慰安を得るに於て、甚だ缺くるもの多く、圍碁花牌亦た只だ一場の遊戯に過ぎず、即ち蓄妾終に已むべからずとせんも、然れども這般敢て顧み問ふところならざる言を俟たず、要は、家庭の賊は社會の賊にして其負ふところの罪輕からず、妾たるもの、妾を蓄ふるもの、自ら恥ぢ自ら悔ゆることを知らずんは、加ふるに法を以てするの外あるべからず、法を立つるも法を免れ易きを奈何と云ふか、國法を犯すものは即ち罪人にして、之を處罰する、猶ほ酒類煙草密造者に對する如くなるべきのみ、爲めに産を失はしむる亦た不可なし、以て一般の鑑戒とならば、即ち風紀を正だし、國に道德の民を多からしむる所以にして、天下の慶事何物か之に加かんや、論じて悉くさゞるも、識者の鑑を得ば幸甚也。

現代人物

覆面冠者

第一 大隈重信

一

古今東西の歴史を見ると、その時代〳〵に、一世の視目を集むる花役者といふ者が居る。けれ共、此の花役者といふやつは、その事件、或は一時期が過ぎ去ると、

幽靈のやうにひゆうどろ／＼と消へて、その噂が無く爲つて仕舞ふ。今、日本の社會で、人氣の焼點となつてゐる、花役者は、相場師で鈴木久五郎、兵右衛門、文學者では夏目漱石、政治界では後藤新平といふ手合であるが、兎にかく、その人氣といふものは、凄まじいもんだ。併しながら、此の人氣は、何時まで續くだらうか。

之は或一時期の人氣役者を數へたのであるが、四十年の明治史を篤と點檢すると、種々雜多の人氣役者が、出てくる。伊東巳代治や、犬養毅等が、政治界に幅を利かしたのは、つい先頃の事、徳富蘇峯、朝比奈碌堂等も、曾て新聞社會では一世の注目を集めた。有るは／＼、大達、小錦等は、相撲の人氣を一人で脊負つて立つたともあれば、美妙、浪六等も、文學界の花役者であつたともある。けれども、線香花火のやうに、一時燦然として、間もなく、黑烟の中に消へて仕舞ふ。

此の紛然雜然たる間に於て、間斷なく、世間の人氣を集めてゐるのは、大隈重信だ。

大隈重信は豪傑か、非豪傑か、自分は知らない。併しながら、明治初年以來、四十年間、社會の表面に立つて、何時も其の名が唄はれてゐるのは、歷史的戲曲中の人物としては、極めて趣味の有る人物だらうではないか。特に先頃藪から棒に、憲政本黨の黨首を辭して、刷新を呼ばゝる田舍議員を啞然たらしめたる手際などは、大根役者に出來る藝當では無い。

自分は「現代人物」に筆を起こすに當り、先づ此の大隈重信より書いて見やう。

二

大―隈―重―信、その名が餘りに普く知られて居るので、人物論の題目としては、陳腐である、平凡である、團子が捏ね返へさるゝやうに、所謂人物論者の手で、幾百回、今日まで捏ね返へされて居るか知れない。けれども、富士山は何時見ても淸新であるやうに、大隈重信の人物も、幾科繰り返へされても、嶄然として、碧落に聳へて居る。

然かも富士山は、八面玲瓏として、偉觀極りないが、

非文學的に言へば、擂鉢を伏せたやうに、にゆッとした、餘り複雜しない山であるが、大隈重信の人物は、早稻田の應接間に、種々雜多の人物が集るやうに、多角的で、一端を以て全般を推す譯にゆかない。

三

政治家か、實業家か、學者か、老書生か、過去の經歷から言ふと、如何しても政治家の列に入れねばならぬけれども、伊藤博文のやうに、その閱歷は、政治を以て蔽はれて居らない。鼻棒に立つて政黨を興こした上より言へば、板垣退助に似て居るが、板垣のやうに政黨に執着して必らずしも政黨の爲に全身を投じて居らない、實業家に關係ある上から言ふと、井上馨にそつくり其の儘であるが、井上のやうに一身を捧げて、實業家に密接して居らない。早稻田大學に力瘤を入れてゐる上より言ふと、ちよと福澤諭吉に似て居るが、福澤のやうに教育事業に生命を捧げて居る人でも無い。大言壯語して群小を煙に捲いてゐる模樣は、後藤象次郎と一對であるが、後藤のやうに茶々目茶でなく、細微い所にも眼が附く。

ヤ、どうも日本の今日には、ちよと類と眞似の無い、理想家のやうな、感情家のやうな、西洋人の性格に東洋肌を加味した、平民的の、貴族的の、一種異樣の人格の所有者は、大隈重信だ。

今日關係してゐる事業を見ると、大隈重信の人物が、如何やら、彷彿と判つてくる。

四

第一は早稻田大學だ、之は普く世間に知られてゐるから、言はず、第二は歷史の編纂——開國五十年史の編纂である。氏は學校創立者たるのみで滿足せず、歷史の編纂にも關係してゐるのだ。邸宅の一室に編輯所を設け、暇ある每に、遣つて來て、編輯事務を見てゐる。

因に此の開國五十年史は、英文と、漢文と、邦文との三種に編纂されてあるので、伊藤博文が憲法成定の來歷を受持てば、政黨の發達を擔任せるは板垣退助、益田孝が海外貿易を說いてゐると、近藤廉平は、海運事

業の進歩を説いてゐる、特に德川慶喜公の「明治維新の回顧」など、最も珍材料と稱せられてゐる。之は大隈自身が、福地櫻痴と巖本善治を伴ふて、親しく慶喜公を尋ねて聽取つたものであるとか。大隈は、新聞社の探訪然と、自身て歷史の材料を集めてゐるのだ。

啻に歷史編纂ばかりでなく、坪内雄藏、島村抱月等の組織せる文藝協會にも關係し、會頭に推されて居る。教育家たり、歷史家たる大隈は、今や、純文學の上にも、片足を投ぜんとしてゐるのだ。

尚此の老人は、片山國嘉等の遣つてゐる、醫師の養成を目的とせる同仁會の總裁も兼ねて居る、病理衞生の上より清韓兩國を開發せんとするものだ、早稻田附近に同仁會病院が出來た筈である。有る〳〵、大隈氏の關係してゐる事業が、まだ有る。中にも著るしいのは移植民の事業だらうか。

讀者は知るや、知らずや、昨年の半頃、ひよつくりと、巖本善治を業務擔當社員として、京橋八官町に、明治植民會社といふのが出來た。新設の移民會社は、今や、日本殖民會社、大陸殖民會社と相駢んで、移民業界に覇を稱へて居る。而して此の移民會社の奥の奥には早稻田の老書生大隈氏が控へて御座るのは、ちよと世間が知るまい。

大隈氏は鬱勃たる覇氣を移植民の事業に注いでゐるのだ。

斯うだ、教育、歷史、文藝、衞生、海外移民、と恁ふ一本の足を四方八方に向けてゐるのだ。その外、江原素六等が平和協會を起こすと、その運動屋は、早稻田に走り、日印協會も、矢張此の邸宅に開かれる、昨今の風評に依れは、五二會員等は、五二會總裁の椅子を此の四方八方先生に持つて行くとか、行かぬとか噂せられて居る。すると、内地の實業振興にも關係する譯に爲る。隨分と多方面に手を出してゐるではないか。

…關係事業の多方面であると同じく、性格も複雜を極めてゐる。

五

今少しくその事業に就て、吹聽して置きたいとが有

る。それは、大隈は我國稀有の新聞記者であるとだ。

新聞記者、新聞記者と言へは、一箇の筆を以て、社會國家の云爲を論議するものだ、大隈は靑年の頃より、萬止むを得ざる場合の外は、筆を執らぬと聞いてゐる。けれども親しく筆を執るのは、下の下なるもの、大隈の意見は、第二者の手を經て、常に新聞紙に現はれてゐる、だから、氏は低級記者の如く、自身で筆を執らぬが、事實に於ては、日本第一の新聞記者であるとは、何人も異存は有るまい。試に大隈の應接間を覗いて見よ、鳥の鳴かぬ日が有つても、新聞記者の顏が見へない日が無い。

特に他の及ふべからざるは、日本全國の新聞記者を代表して、海外に日本の輿論を代表する事だ。――此意味より言へは、大隈は世界の大新聞記者といふとができる。

あの傲然と、悠然としてゐる態度の中より、維新の元勳といふ金箔を剝ぎ、伯爵を去り、早稻田大學を奪つて赤條裸々にして、單に此の「日本の輿論を海外に代表する世界の新聞記者」といふ職責丈けでも、優に大隈の存在が認められる。

山縣系統を引いた明治政府は、何時も大隈の大言壯語に澁面を作つてゐる。けれども、海外に日本の大勢を指示し、意見を發表する此の大隈の位置、職責（無意識の）、人格に對しては、十分其の功蹟を認めねばならぬ、或は外務省の吏員等は、猫糞を極めてゐるが、暗夜窃に大隈の援助を請ふともあらう。妙な位置に納まつてゐるものだ。――特に此の職責を發揮して遺憾がなかつたのは、日露戰役當時である。

千古未曾有の大活動であつた日露戰役の當時には、此の名物男は、早稻田の幽棲に眠つてゐた、併しながら、早稻田の地を一歩だも離れずして、末松謙澄以上、金子堅太郎以上にその職責を果たしてゐたのだ。念の爲に、讀者に注意して置く。

六

まだ一ッ有る、まだ一ッ言ひ遺こしが有る、大隈は我國へ遣つてくる歐米人に對して、日本の文明程度を

說明する廣告機關――看板と爲つてゐるとだ。然かも此の職責は、那の職責よりも圓滿に發揮されてゐるから妙だ。

ブライアンも尋ねれは、ハリマンも尋ねる、學者も尋ねれば、慈善家も尋ねる、日本へ遣つて來る歐米人て氣の利いたやつは、大低尋ねる、露國の亡命客ピルスウツキーのやうな漢さへ尋ねた。露國の亡命客と言へは、今長崎て「ウオリヤ」を發刊してゐるドクトルルツセルなどは、大の大隈崇拜者と來て居るから、面白い。此の四月、我國へ遣つてくる救世軍の大將ブース歡迎會の委員長も引受けてゐるといふ。廣告費用は事業費の半ばを占むるのは、現代事業界の常態、「日本を世界に吹聽する」此の大事業を、大隈は無代價て廣告してゐるだらうてはないか、日本國民は、無代價て廣告機關に當つてゐる大隈重信に對して、無限の感謝を拂つて然るべして有らうと思ふ。

七

今度突然に憲政本黨の總理を辭して、權勢に憧るゝ有象無象に尻餅搗かせた、板垣退助は後樂園に名殘を遺して、土佐に退隱し、大隈は子飼の政黨と別れて、係累のない一政客と爲る。面白い對照だ。けれども、板垣の進退は普通の順てあるかは知らぬが、百二十五歲迄生き延びると揚言してゐる（信じてゐる）大隈の行動としては、甚だ藪から棒て有る。然かも大隈自身は政治上の意思は、斷念せぬと言つてゐる。凄い科白てある。

今日の政黨如きは、如何頓んても、我々國民には何等の痛痒が無い。併しながら、日本國の珍品たる大隈の行動に就いては、余の如き方外人にも、聊か疝氣筋だ。廢さッせい、和主は如彼いに職責持つて居らッしやるてねいか、政治の野心など、詰らねい事ッた。斷然と、男らしく廢さッしやれ。



人事に於ける個人的要素

『讀賣新聞』

竹越與三郎

私は主義なるものを重んずる點に於ては、人後に落ちぬ積りである、又制度を重んじ、制度の組織に依て國を治むるの必要なるを信ずるに於て、敢て人後に落ちぬ。又物質が人を支配するの力あるを信ずるに於ても、人と異つたことはない。併ながら餘り制度、法律、國家、社會或は無形の主義議論と云ふやうなものに重きを惜き過ぎる結果人をして自ら輕からしむることがありはせぬかと云ふことを心配するのである、殊に近頃は色々の主義なるものが、妄信せられて居りはせぬかと思ふ、或人は帝國主義と云ひ、或人は國家主義と云ひ、或人は社會主義と云ひ、種々なる主義を掲げて、其の主義にあらずんば、國家を治むることは出來ぬ、恰も萬病感應丸のやうにそれてなければ治まらぬやうに言ひ歩くのである、それは一の手段に相違ないけれども、天下は大物である。活物である。區々たる一の主義に依て治められるものではなからうと思ふ、要するに活きた人生の支配は、無形の主義、或は命なき制度、中心なき法律、斯の如きものに依てせらるゝにあらずして、それを造つた人に依て支配されるものであらうと思ふ、而して一歩を進めて論じますると、所謂主義、制度、法律、或は國家に至るまで、皆な古人の糟粕である。區々として主義を論ずるものは、古人の糟粕を嘗めて快として居るに過ぎぬと思ふ、凡そ如何なる主義と雖も、之を唱導する人が無ければ有る筈はないのである。一の大建築は之を建築した人の一の靈魂の力に相違ない。又國家と雖も其建國者の偉大なる人格がこゝに現はれ居るのである。又社會主義の如きもオーエンであるとか、サンシモンであるとか、えらい人が之を信じ、身に行ひ、世に宣傳したから主義となつたので、其人のなかつせば、社會主義の存在を認めることは出來まいと思ふ。又帝國主義なるものは、近時は主として英吉利あたりから來たものに相違ないが、英吉利などの帝國主義は一生を英南に投じたるクライブなどの遺物で、而してセシルローズが一生娶らず阿弗利加に身を投げるとか云ふやうなことがあつて、吾々の眼に觸れて立派なものと見えるけれども、其人を除いて、單に其の言ふ所を現はした所が、何等の効能もあるまいと思ふのである、斯う云ふ譯であるから、國家と云ひ、主義と云ひ、製作物と云ひ、大建築と云ひ、其本を造つた人のキャラクターの現はれたものであると信じて居ります。

乍併私は所謂英雄豪傑を過重してセミゴッドの如きものと思ふのてない、私は所謂平民主義を信ずるものてある、併ながら私の平民主義は亂民政治てはない。暴民政治てはない。英雄豪傑が出て、其の言ふ所が正しく、其の爲す所が人民の安寧幸福を謀るので、而して天下率ゐて之に聽くのが平民政治てある。多數の人民の御機嫌のみを取るのが平民政治てはない。進歩した少數があつて、多數が此の少數に聽いて居るのが平民政治てあると思ふ。此點に於ては所謂天爵貴族主義てあつて、制度、法律に依る貴族にあらず、己の精神の力に依て一世を率ゐて行く天爵を得た貴族政治てなければならぬと思ふのてある。然るに近頃平民政治と云ふことに間違つた解釋があつて、唯一世の機嫌をとれば、それが平民政治てあると思ふて居るものがあるが是は大きな間違てある。

所がまた或人の言ふのには、歷史はリズムて動いて居る、一定の時間が來れば、時計の錘が右から左に移るやうに一定のリズムて動いて、今日は革命、明日は中位、其次は平和、斯う云ふ風にゆく。されば英雄豪傑は其のリズムの動く時に現はれた木頭竹屑に過ぎぬと事を言ふ人がある。私はさうは思はない。歷史はリズムに依て動かずメスメリズムて、動いて居ると思ふ。即ち英雄豪傑が出て來れば、其の英雄豪傑の事業は一世を動かすのみならず、流風遺韻永く萬世を支配すると云ふのは即ち英雄のメスメリズムてある。それ故にリズムと云ふ言葉に對して言へばメスメリズムてあらうと思ふ。又或る學者は歷史は自から繰返すと云ふことを言つて居るが、私はそうてなくて、歷史は飛ふ者、即ちジャンプするものと思ふて居る、昔斯の如くてあつたから、今日も斯の如くてあるのてない、昔は斯の如くてあつたけれども、今日は斯の如くなると云ふのが歷史だらうと思ふ。其の歷史を昔から今へ飛ばせるのは、誰てあるかと云ふと英雄豪傑が出て來ての話てある。(拔萃)

政客の株主を兼ぬるもの

「日本」

同じく政客といふも、群小連は褒貶を値ひせざるもの、殊に熱中せりとて社交上に別段の變易を見ざらんも、大頭連として知らるゝ者は、初め小なる瑕疵と見えしことも、後ち大なる瑕疵として現はれ、掩はんと欲して掩ふに由なきに及ぶ、惡事千里を走るの諺語は十二分に玆に事實にせらる、永く群小連と伍するを甘んせば、株と關係して醜行を演ずるの妨げなきも、苟も群小を脫出し大に爲すこと有らんと欲する、斷じて彼等の心を以て心とすべからず、株屋を兼ねて巨萬の利を博するや、同輿の徒は之を怪まず、却て才物なり敏腕なりとして稱揚せんも、强慾ならざる世間の多數は此の故を以て其の人を信用せず、其の政局に當りて外國と事端を啓くが如きある、則ち不正の利を射んが爲めに、斯かる態度を裝ふのみ、眞に職務を念とするに非ずと爲し、國家の急に赴くに躊躇すべし、チエムバレーン氏の彼が如き技倆を有し、彼が如き功名を顯はし、而も南阿戰役の際に利を網せるの風說せらるゝや、勢力上爲めに

に少からざる打撃を受けたり、大事は一躍して成らず、而して功は一簣に缺く、成るの難く、敗るゝの易きを思ひ、深く自ら警むる所なかるべからず。

且つ假りに投機を是認するも、政客にして株商を兼ぬるは果して得策なるか、其の一方に專らなるの可なるに非ざるかといふ疑ひあり。之を縁れつゝ、漸々陞進して大臣となれる者あるも、こは數に於て多しと爲さず。最初大に希望を囑せられながら利に誘はれて挫折せるもの舉げて計へられず、苗にして秀でざるは概れ之が爲めなりとして謬らざるべし。又た實業家として利益を占め、傍ら政治に携はりて功を立てんとする者あるが、株商の末派と爲り、政黨の馬の脚たらんとは、之を期するの難きに非ざれど、兩界に傑出せんは、殆んど全く不可能事に屬す。政治に與かりて力を顯はすに其れ相應の資格を要するが、株にて巨利を博するにも其れ相應の資格を要す、政客の態度を以て株界に奔走するは、調子外づれの觀なからず、頃日當り屋の名ある者、即ち鈴木久五郎なり、彼れ少壯の身を以て數百萬圓の財を作くり、尙ほ大に儲くる所あらんとしつゝあり、而も彼は純然たる商人風にして、頭低く腰低く、絶えて肩を聳かし豪氣を示さんとせず、其の能く富むも是を以てなり。今日の代議士に種々の人物あり、全く商人にして商人風なるもあれど、稍々政界に名を知られたるは大低頭高く、腰高く商人と共に利を逐ふに不似合のものなり、少しの金錢を獲べきも、久五郎の如くならんとして日夕奔走するは正さしく鵜の眞似する烏なりと謂ふべし。若し大に利し、富豪たらんと欲せば、須らく頭を低くし腰を低くする久五郎の如くすべし、若し之を快とせず、乃公は國民の代表者なり國家を經綸する者なりとし、百世に顯はれんことを欲する、須らく株商たるを斷念すべし。

群小政客として株商の仲間入りするは難きにあらず、現に到る處に之れあるも、富みて且つ政治家らしき政治家たらんは極めて難たし、彼等代議士にして自ら小人物を以て居らば則ち已む、斯くして大に爲すことあらんとせば、眞に力を揣らざるの甚だしき者と爲す。三百八十の代議士、多くは唯だ員に備はるのみ、恰も草の萠芽し成長し枯凋すると一般、無爲にして入り、無爲にして出て、何等政界に輕重する所なし、隨て如何なる卑陋の行爲を敢てするも、暫らく不問に附すべけれど、十人に一人くらゐ、少しく注意すべき者ありと思はる然るに代議士にて株に關係なきは、十人に一人よりも少く、數十人中僅かに一人のみ、十人に一人と計へられし者の爲めに惜むべき次第なりとす。十人の第一と爲れりとて何の面白きこともなし、小名よりも寧ろ小利を擇ばんといふならば、一の見識たるを失はざるも、是れ自ら居る所の地位を解せざる者、果して斯かる了簡ならば、久五郎と同じく頭を低くし腰を低くし一心に利を射るの遙かに優れるに若くはあらず。其の幾許か頭を高くし腰を高くするは、利益以外別に恃む所あるに因るべきに、其の志望の少しも實現する期なきは、自ら欺くと均しからずや、埒もなき小名を求めず、少しにても多く利を獲るは其れ丈け俐巧の所爲ならずや。頭を高くし腰を高くして巨利を占めんとするは彼れ久五郎の眼に恐中の愚と映ぜん。目今議

に在りて相場附を凝視する連中は、一方に於て政治家の爲めに傀儡せられ、他の一方に於て鈴木一派の爲に愚物視せらる、彼等にして自ら能力なきを確信し、碌々として一生を送らんとならば、其の自ら知るの明を稱すべきも、而かく自ら知るの明あるもの幾人かある、多く自ら豪的なりとし、而して小人物に終るべきか、是れ之を眞に碌々として蠢動するものとせずや。此等に比して一頭地を拔くものは、大に奮つて政治家たるの體面を具ふるに務めずんば、則ち巨萬の富を作りて世界的貿易に從事せんと決心すべし、二兎を逐て一兎を獲ざるは、古より智者の事とせず、(拔萃)

文藝と教育

高島平三郎

【丁酉倫理會倫理講演集】

社會一般の文藝は如何に之れを取り扱ふべきてあらうか。矢張り總て取締つてさうして其時の政府の考、檢定官の考へに從つてドシ〳〵と或は挾いて仕舞い或は絶版させて仕舞ふといふ風にして行くのが宜いか。それとも成る丈け寛かな範圍に於てその發現を許し文藝の發達を謀るが宜いか。私の考ては今現に文藝も道德も進步の途中にあるのてあるから、多くの文藝と唱へられる作物の中には猥褻てあつて、理想も何も無く社會を害するやうな者もあるかも知れない。斯う云ふ物は或場合には取締る必要もあらうけれども、全體からいへば成る丈け自由を與へたい。すべて物は自由の發動の上に進步する。自由の無い所には良いものは出來て來ない。取締まれば良い物が出來るかといふに決して出來ない。かやうな中に出來るものは型に嵌めたやうなものばかり文藝と言つても眞の値打は無い。それゆゑ人の思想に自由を與へ假令多くの作物の中に惡い者があつてもなる可く干涉せぬやうにする、若しそれが極端に人心を害するものてあるなれば詰り社會の他の活動と併立して行かない物てあるから必然に止めればならぬが、成るべくは寛容の精神を以て自由を與へて行くことが必要てある。自由を與へれば多少弊害のあるものも出來るかも知れぬが、又其間には偉大なる作物が現はれるてあらう、之を束縛したならば永遠に、何等の價も無い物しか出來ないのてある。詰り文藝が道德に及ぼす影響は客觀よりは寧ろ主觀に存るすのてある。即ち同一の物ても見る人の如何に依つて變つて來るので、客觀的には同一の事が書いてあつても、その見る人の精神に依つては或人の爲めには非常に醜猥なものが、却つて美化され、或は善化されて、自分が善を行ふ上に參考になることもある、それゆゑ此の文藝は風致に害がある、此の美術は道德に矛盾すると言つても、それを感受する人の主觀の如何に依ることてあるからその點を大に考へねばならぬ。隨つて文藝上の考へなどは自由に發表することを許すがよい。併しそれを許すに就いても專門家の範圍に限られねばならぬ場合がある。例へば文藝を評價する丈けの知識經驗のある人の間には如何なる說ても作品ても發表することを許すのてす、假

く近い例を擧げて見ますれば太陽とか或は中央公論とかいふ雜誌は、ポピユラルのもので女も子供も學者も實業家も見るのである。さう云ふ物に變つた文藝上の意見などを出せば世の中を攪亂するかも知れない。斯んな物で社會の現在の他の活動例へば道德と衝突するやうな學說や作品を發表することは文藝家の德義とは言へない。それよりも文藝協會とか哲學の會とか心理學の會とかいふ學會で發表するがよい。さう云ふ會では專門家が充分に批評することが出來るから、その長所も短所も明に認めることが出來る。すべて道德信仰と相反するやうな考へはかやうな所で發表する樣にするのが學者や文藝家の德義であると思ふ。併しかういふ會で公にしても自然には一般社會に廣がるであらうが其の時には必ずそれ〲の批評が伴つて居るであらうから敢て氣遣ふほどのことはないとおもふ。全體是は德義問題でありますから何もさう云ふことを制限して國家が何々雜誌には此の說を發表してはならぬといふことを規定する譯にはいかぬでせうけれども、一方に自由を許すと共に他方には又是れ丈けの德義的制限をおかねばならぬと思ひます。（拔萃）

謠曲の娛樂的價値

『太陽』　　森　友　道

最上なる娛樂の要件は次に記する處の十個の條件を具備せざる可からず、苟くも其一を缺く既に最上の娛樂には非ざるなり、今乞ふ試に之を揭ぐべし。

（一）精神の慰安に適すべきもの（二）高尙にして優美なるもの（三）危險の恐れなきもの（四）衞生に適し且健康を增進せしむるもの（五）多額の費用を要せざるもの（六）衆と共に樂み得らるゝもの（八）實行簡易にして習得し易きもの（九）場所を擇ばず設備の簡易なるもの（十）風紀を害せざるもの

以上十項の要件に一々各種の娛樂を配當して其適否を鑑別する時は、某の娛樂は或る項目に適合するも他の項目に適合せざることあり、假りに圍碁を以て論ずれば第四、第六、第七、第八、の四要件に滿たす。且又敗者は第一の項目なる慰安を得ざるべし、茶の湯に於ては第一、第二、第三及び第六の四項に該當するに過ぎざるなり、以て余が種々なる娛樂の等級を定むる時は、謠曲は第一等に位し花合は第八等にあり、

一等娛樂……………謠曲滿點
二等同………………鼓
三等同………………活花、香道、淨瑠璃、尺八、詩文
四等同………………骨董、三味線、俳諧、和歌
五等同………………圍碁、遊獵、琴、笛、角力、投球、胡弓
六等同………………將棋、大弓、玉突、踊、トランプ
七等同………………盆栽、茶の湯
八等同………………

抑も謠曲は我國獨特の音樂にして古來國粹の美として賞翫され、文章

亦優美高尚にして文學上大なる價値を有し、且つ之を謡ふには身體の姿勢を正ふし、儼然端座して下腹に力を込め威嚴犯すべからざる態度を以て發聲するが故に、之を衛生上より觀察すれば呼吸操法の原則に適ひて身體の健康を增進せしむると同時に、憂欝を散じて自ら精神を快活ならしむるの効あり、以て衆と共に樂むべく又單獨之を樂むべし、些の危險なく習修亦甚だ難からず、之れ獨り謡曲のみ前記十項の要件に合格して最上の娛樂と認定せられたる所以也、

謡曲は優美高尚なる道德的娛樂に兼ぬるに呼吸操法を以てするもの、平常之を謡へば識らず知らずの中に身體の健康を增進するに至るべし、人或は曰はん、謡曲は肺臟の機能を促す點に於ては利益あるべきも、唯座して發聲するのみなれば身體の運動を缺くに非ずやと、此說は一理あるが如けれども實は然らず、單座發聲は其運動外部に現はれざるも、下腹を張つて姿勢を正ふし、全身の筋肉に力を入れざれば、謡曲の音調は出でざるものなり、全身に力を入れて筋肉を緊張せしむれば總て其筋肉の働きは全身運動と同一の關係を有するを以て、運動衛生の要領に於て毫も差異あることなし唯だ夫れ身體の新陳代謝を亢進せしむる上に於て兩方共に同一の理論なれば、從つて謡曲を以て身體の運動を缺くものとは、言ふべからず、又謡曲には仕舞と云ふものあり、是れぞ外部に現はるゝ身體の運動なり、其手振り足蹈より身體の一進一退に至る迄て皆規律的にして、一擧手一投足も法則に從はざるはなく、姿勢嚴然靜肅の品格を具備す、謡曲が運動上缺くる處ありとは言ふべからざる斯の如し、茲に於て衛生上の價値亦大なりとするも決して不當にあらざるべし。（拔萃）

新體詩論

「帝國文學」　文學博士　藤岡東圃

新體詩を讀んで見る事あれどもその意味が甚だ呑込め難く二三節にして止めて了ふ事多し。思ふ人に向ひて尋ぬるに、いや我が詩の意味は自分には能くわかるが他のは明かに聞えず、これは我淺薄なるからの樣に思はれて勵めどもなほ意の如くならずと思の外の答なり。

新體詩は我國今後の詩壇に獨占の勢力たるべし、和歌俳句の簡單なる形式は到底明治の進步したる思想を盛るに足らず漢詩は論ずるまでもなし、されば新體詩の必要と價値とは改めて說くまでもなく是を斥くるは明治の時代を斥くる也。これを呪ふは文學を呪ふ也。然るに今の新體詩の甚だしく世に輕んぜらるゝは何故ぞや、時代と新體詩との關係如何。現代は過度の時代なり新舊和洋の思想混淆してこれを一貫する理想の統なければ、國民の理想人生の歸趣これらの問題に逢着するものは轉た吾が社會一般の漠然たるに驚かざるを得ざるべし。既に哲學なく宗教なし、かゝる所に又如何なる詩歌かあるべき、かくの如き過渡の時代に生れたる青年は憫なる哉、昔は親の心子知らず今は子の心親知らず、現代の

社會に地位を得たる人は青年が個々の情を察するには餘りに多忙なり、彼等は物質的事物の光輝に眩惑されて明治第二の國民が心中如何を洞見するを得ず。既に青年の感情に同情なき社會のまた如何ぞ新體詩に趣味を有すべき、冷然として雲烟過眼の態あるも正にその數なりといふべし。嘗に社會が是を解せざるのみならず作る所の青年も亦己の言に疑あり昨是今非躊躇すべき所を知らず、亂雜無統一の潮合にその感情を飜弄せらる。試みに問ふ現今の作家は國民の理想を何物に求め、人生の歸趣を何處に置きてその所信を文字に寓せんとするか。紛亂して拘束せらるゝ事なき現代の世相は小說ならばなほよく描くべし、純粹なる感情にのみ立つべき新體詩は、説明を加ふれば散文となり加へざれば迷語となる、詩歌は唯健全なる趣味の標準の定まれる時にのみ榮ゆべし、われ〳〵は水晶を望んでシャボンの泡を得たり趣味の尨雜にして錯亂せる間は新體詩の振興は遂に望む可らざる也。次ぎに我が文語の紛亂せるは趣味の情態と同一轍に出て詩人は筆を執れどもその感想を出すの好辭なきに苦しまざる事稀なり、用語の困難に就いて詩歌の堂奥を云ふは未だし、散文の門口に於てこれ既に今人の越ゆるに艱む所の難關なり。雅文調と云ひ、漢文調と云ひ文章體と云ひ口語體と云ひ言文一致體と云ひ文體區々にしてその間に法格もなく統一もなきに、今日の進歩して又た複雜なる事物思想を現はすべき用語なく生硬なる譯語と不穩なる當字と、その儘の外國語と肩摩轂擊して山王のお祭りに江戸ッ兒の喧嘩が出來たるよりも目まぐろし。詞藻を生命とする詩歌に是の文體の戰國は窮處を押へたる打撃なり。

以上予は新體詩り本來の價値を疑ひたるにはあらず、個々の作家の風格を評したるにあらず、たゞ一般に詩と時勢との交渉する所を見て、その現代には未だ榮ゆ可らざる所以を説きたるなり。現代は過渡の時代なり社會の理想は定らず趣味に統一なく文體に規律なき時、感情を專らとし格調に生くる詩歌は如何にしてか、その物質的事業に伴ふて、駸々として進歩すべき、このとは一般の文學に當てはまらざるに非ざれど殊に新體詩に限りて最も適切なるを見るされば其の振興はなほ時勢の推移して精神的文化も進み、趣味と文體と共に標準の生じ來れる時を待たざる可らず、それ迄は猶斯道の亂世なり。近時の形勢を見るに感慨を吟ぜんとするもの出てゝその術を試みれども、結果は期待の如くならず自ら手腕の如何を疑ひ去つて文學の他の方面に指を染むるものあり、作家は續々として出づれども社會は冷然としてその存廢に重きを置かざれば忽ち來りて忽ちその道を去り、作家の生命は概して甚だ短かし、されど猶新進の人の相踵いてその後に進むものゝ絶えざるは文學的要求の自然に基くものにして轉た新體詩の必要を證す。（秋華）

批評難

『新小說』　登張竹風

批評家の標準は如何に致したら宜しいものであらうか。そも〳〵、

文の價値は、秀でたる詩美の有無に據つて定まるものだ。秀でたる詩美のある傍に多少の缺點があるのは固より當然である。これは世の中に完全無缺のものは殆んどないといふ前提より必然起るべき結論である。多少の缺點はあつても、卓越した詩美があれば、之を名作傑作と推稱して差支はない。沙翁のものでも、ゲーテのものでも、紅葉露伴のものにしても、一々缺點を拾ひ出して、揭げ來つた日には、如何なる名篇も、缺點のないものは恐らく、一篇もないだらう。唯、その缺點を掩ふだけの長所美所があるから、世間の推奬を價するのである。

之と同じ理屈で、詩文の無價値を宣告する場合には、その詩文の缺點を摘出して論ずるのは誤謬である、やはりその詩文のうちに大なる詩美の有るか無きかによつて判斷するが正當であらう。

所で、この標準を以て、今の批評の遣り口を見ると、まるであべこべだ。成るべく、長所を見ないで、短所をつゝき出す、否な／＼、長所を見ても見ぬ振りをするねぢけ者が少くない。此の如く短所のみを摘み出して、作物の批評をするには、所謂名篇傑作には毫末も缺陷誤謬はないものであるといふ前提がなければ出來ない道理だ。然るにこの前提位誤つた前提はない所以は既に前申す通りである。この位に見易い道理は、評家連は百も承知の上でありながら、新作に對すると、恰かも之を忘れたかの如く、しかく／＼の誤謬があるから劣作だ拙作だ愚作だと罵しる。不都合極まる話である。

云ふまでもなく、古來獨逸に於ては、かゝる筆法を用ゐて、沙翁を無價値と斷じた評家があつた。同じ筆法を用ゐて、ゲーテ、シルレルを傷詩家だと罵つた評家があつた。我が日本では、大膽不敵にも、ゲーテのファウストを以て新聞の三面記事だと罵つた評家があつた。滑稽ながら同じ筆法だ。

夏目氏の「作物の批評」の一文は、頗る時弊を穿つたもので、之を要するに「評家が自己の狹隘なる見地、好惡の趣味を目安に、勝手次第な批評をするのは亂暴だ、淸新なものは淸新なもの、神秘なものは神秘なもの輕妙なものは輕妙なものと、夫れ／＼の趣味の上から批評せよ、標準は固より、古來の名品に則るべしだが、眼を後にのみ向けて前を見ないのは駄目だ、古へに無くても、斬新なる眼光を以て、新作の價値を觀破する力量が必要である、」といふ意味らしい、一々同感である。

繪を見るのも、同じ道理で、油繪の如き、一定の距離を隔てゝ眺むべきものを、殊更に近視して、色がどうの線がかうのと、顯微鏡的に批難を打つのは畫家の罪ではない、觀者の仕方が間違つてるのだ。双眼鏡で觀るべき戯曲を虫眼鏡で見たり、顯微鏡で見るべき短歌俳句を望遠鏡で眺めたりして、勝手次第な非難をあびせかけるのは、何れも自己の愚を世間に發表しつゝあるに過ぎない。詩歌は所詮空想の產物である、數學的に分解して、あら探しをやつて、夫れで分るべき筈のものではない。

（投書）

文藝雜誌 新小說

第拾貳年第三卷
三月壹日發行

東京日本橋
區通四丁目
春陽堂

本欄思潮

二狂人……長谷川二葉亭氏

反嚼の味……薄田斬雲氏

家庭劇 幽靈……橋本青雨氏

比較文學……畔柳芥舟氏

イプセン新論……上田敏氏

▲雜錄▼

鴫立庵と鈴の屋……藤岡東圃氏

ゴーリキイの人生觀眞髓……昇曙夢氏

まゝごと……今更かの子

俳人と繪畫……松田竹嶼氏

知つたふり……泉鏡花氏

▲時文▼

文藝の士の對批評家態度……後藤宙外氏

▲我觀錄▼

日本文明の將來……登張竹風氏

▲文苑▼

戀の傷痕……兒玉花外氏

北海の少女……薮白明氏

古盾の歌……松山白洋氏

水仙花……澤村胡夷氏

▲家庭▼

牛乳と衞生……石原醫學士

舞踏と家庭……井口あぐり女史

春の化粧……野村水藻氏

▲藝苑▼

よしあしの記……杉贋阿彌氏

大淸新脚本製本字彙……岡鬼太郎氏

明治座と眞砂座……山岸荷葉氏

▲譚叢▼

モデル發達史……無名氏

大薩摩の話……芳村伊十郎氏

▲社會▼

富士製紙工場參觀記……太田宙花氏

美濃の國紙……本多嘯月氏

▲流行▼

新柄流行……流行子

▲時報▼

▲葉書文▼

▲懸賞吟咏▼

▲繪畫▼

くだかけ(表紙)川村淸雄氏

二狂人(口繪)岡田三郎助氏

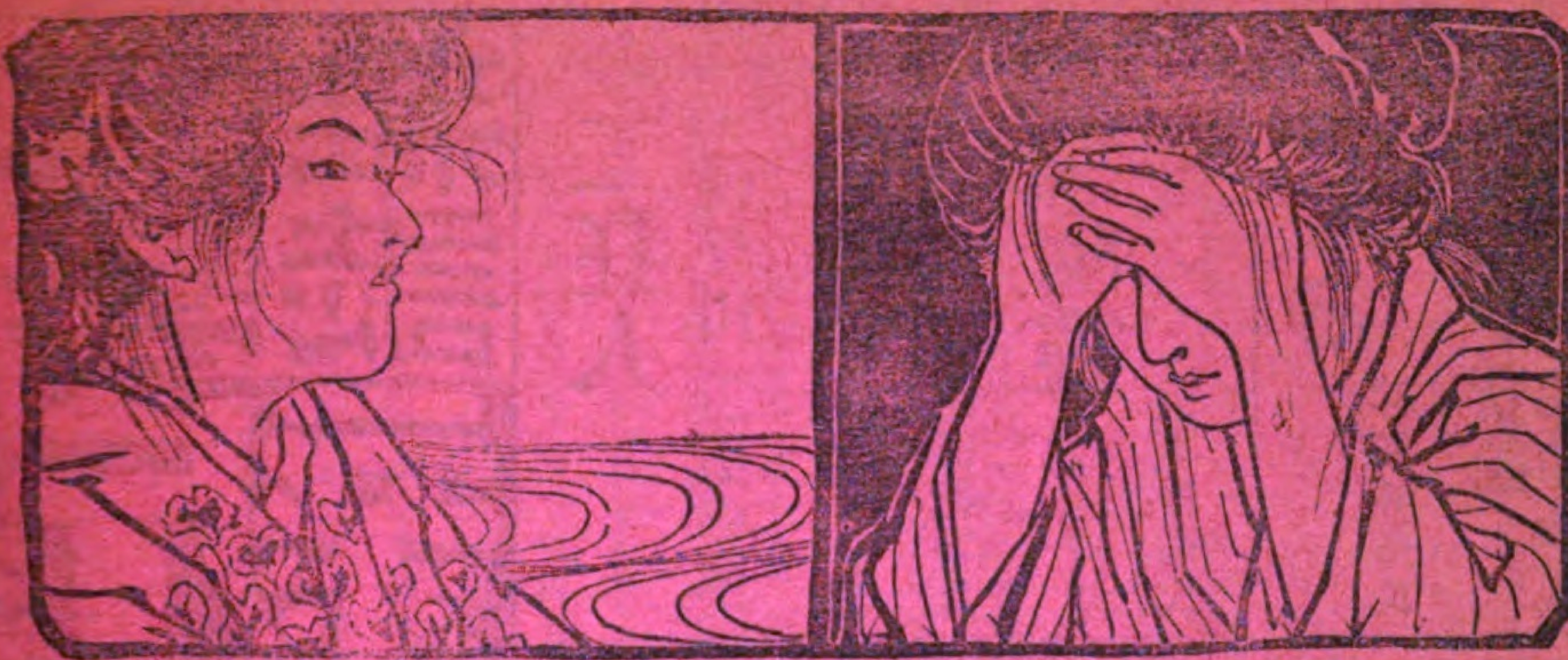
都の春(口繪)梶田半古氏

春雨(口繪)安田靱彥氏

實價

一冊廿五錢●郵税貳錢五厘●六冊前金郵税共壹圓五十九錢●郵劵代用一割増の事

(中付の一)



完成!!

（前編渡部審也氏畫 後編鏑木清方氏畫平福百穗氏裝）

田口掬汀氏著

小説 黒風

洋裝頗美本

前編、後編

實價各七十錢

郵稅各八錢

情を味ふれば豐熟せる佳果の甘きあり、事實を觀れば天風密林を撼るの趣あり、此微妙なる人情も此悲壯の事實と相結びて渾然一體の美術を成せる「黒風」は滿天下の喝采聲裡に後篇を刊行せり、文藝を愛する士、請ふ速に一讀せられよ

發兌元 東京日本橋區通四丁目 春陽堂



解剖室

三島霜川

これ、解剖學者に取ッては、一箇神聖なる物體である、今日解剖臺に据えられて、所謂學術研究の材となる屍體は、美しい少女の夫であッた。此樣なことゝいふものは、妙に疾く夫から夫へとパッとするものだ、其と聞いて、此の解剖を見る級の生徒の全は、何んといふことは無く若い血を躍らせた。一ッは好奇心に誘られて、「美しい少女」といふことが強く彼等の心に響いたのだ。中には「萬歳」を叫ぶ剽輕者もあッて、大騷てある。

軈て鈴が鳴る、此の場合に於ける生徒等の耳は著しく鋭敏になッてゐた。で鈴の第一聲が鳴るか鳴らぬに、ガタ〲廊下を踏鳴らしながら、我先にと解剖室へ駈付ける。寧ろ突進すると謂ッた方が適當かも知れぬ。

解剖室は、校舍から離れた獨立の建物で、木造の西洋館である。栗色に塗られたペンキは剝げて、窓の硝子も大分破れ、ブリキ製の烟出も銹腐ッて、見るから淋しい鈍い色彩の建物である。建物の後は、

楡やら楢やら栗やら、中に漆の樹も混ッた雜木林て、これまた何んの芽も無ければ色彩も無い、恰て枯骨でも植駢べたやうな粗林だ。此の解剖室と校舍との間は空地になッてゐて、ひよろりとした檞の樹が七八本、彼方此方に淋しく立ッてゐるばかり、そして其の蔭に、または處々に、雪が薄汚なくなッて消殘ッてゐる。地は黝ずんで、ふか〳〵して、ふとすると下萌の雜草の緑が鮮に眼に映る。此の空地を斜に横ぎッて、四十人に餘る生徒が、雁が列を亂したやうになッて、各自に土塊を蹴上げながら蹴散らしながら飛んで行く。元氣の好い者は、ノートを高く振廻して、宛然に演習に部下でも指揮するやうな勢だ、てもなく解剖室へ吶喊てある。何時も自分で自分の脈を診たり、胸をコツ〳〵叩いて見たりして、始終人體の不健全を說いてゐる因循な醫學生としては、滅多と無い活潑々地の大活動と謂はなければなるまい。

其の騷のえらいのに、何事が起ッたのかと思ッたのであらう。丁ど先頭の第一人が、三段の石段を一足飛に躍上ッて、入口の扉に手を掛けた時てあッた、扉を反對に裡からぎいと啓けて、のッそり入口に突ッ立ッた老爺。學生はスカを喰ッて、前へ突ン踣ッたかと思ふと、頭突に一ッ、老爺の胸のあたりをどんと突く。老爺は少し蹌いたが、ウムと踏張ッたので、學生は更に彈ッ返されて、今度は横ッ飛に、片足て、トン、トンとけし飛ぶ‥‥そして壁に打突ッて横さまに倒れた。

老爺は、其には眼も呉れない。入口に立塞ッて、「お前さん等は、何をなさるんだ。

と眼を剝き出して喚く。野太い聲てある。

ガア〳〵息を喘ませながら、第二番目に續いた學生は、其の勢にギヤフンとなッて、眼をきよろつかせ、石段に片足を掛けたまゝ立往生となる。此う此の老爺に頑張られて了ッては、學生等は一步も解剖室に踏入ることが出來ない。

老爺は、一平と謂ッて、解剖室專屬の小使であッた、名は小使だが、一平には特殊の技能と一種の特權があッて、其の解剖室で威張ることは憖ッかの助手を凌ぐ位だ……といふのは、解剖する屍體を解剖臺に載せるまでの一切の世話はいふまでも無い。解剖した屍體を殆ど舊の如く縫合はせる手際と謂ッたら眞箇天禀で、誰にも眞似の出來ぬ業である。既に解剖した屍體をすら平氣で而も巧に縫合はせる位であるから、其が假何樣な屍體であッても、屍體を取扱ふことなどはカラ無造作で、鳥屋が鳥を絞めるだけ苦にもしない。彼が病院の死亡室に轉ッてゐる施療患者の屍體の垢、または其の他の穢を奇麗に洗ひ、または拭取ッて、これを解剖室に載せるまでの始末方と來たら、實に好く整ッたものだ、單に是だけの藝にしても他の小使には鳥渡おいそれと出來はしない。恐らく一平は、屍體解剖の世話役として此の世に生れて來たものであらう。それで適者生存の意味からして、彼は此の醫學校に無くてならぬ人物の一人となッて、威張もすれば氣焰も吐く。

一平の爲る仕事も變ッてゐるが、人間も變ッてゐる、先づ思切ッて脊が低い、其の癖馬鹿に幅のある體で、手でも足でも筋肉が好く發達してゐる、顏は何方かと謂へば大きな方で、赭ら顏の段鼻、頰は肉付いて、むッくら瘤のやうに持上り、眼は惡くギラ〳〵して鷲のやうに鋭い、加之茶目だ。頭はスッカ

り兀て了ッて、脳天のあたりに鳥の柔毛のやうな毛が少しばかりぼッとしてゐる。何しろ冷ッこくなッた人間ばかり扱ッてゐる故か、人間が因業に一酷に出來てゐて、一度此うと謂出したら、首が扯断れても我を折はしない。また誰が何んと謂ッても受付けやうとはせぬ。此の一平が何時ものやうに青い筒袖の法被に青い股引を穿いて、何時ものやうに腕組をして何時ものやうに大きな腹を突出し、そして何時ものやうに上眼遣でヂロリ〳〵學生の顔を睨廻して突ッ立ッてゐるのであるから、學生等は、畏縮といふよりは些か避易の體で逡巡してゐる。一平は内心甚だ得意だ。

間も無く學生は殘らず石段の下に集ッて、喧々騒立てる。一平は冷然として、

「幾らお前さん等が騒いだッてな、今日は先生がお出なさらねえうちは、何うしたッて此處を通す事ッちやねえ。一體お前さん等ア今日に限ッて何んだッて其様なに騒ぐんだ……人體解剖ッてものア其様なふざけた譯のものぢや無からうぜ。いくら奇麗な娘だッて、屍體が何んになるんだ……馬鹿々々しい！」

と大聲に素ッ破抜く。

是に反しては、各自に體面を傷つけるやうなものだ。で何れも熱ッた頭へ水を打沃けられたやうな心地て、一人去り二人去り、一と先づ其處を解散とした。中には撲れ撲れと叫ぶ者も無いでは無かッたが、議案は遂に成立しなかッた。取分け酷目な目に逢はされたのは、先頭第一に解剖室へ跳込むでそして打倒れた學生て。これが一平に出口を塞がれて了ッて。まご〳〵してゐるうちに、遂々一平に襟首を引ッ

擱まれて、「さ、出るんだ、出るんだ。」と腭でしやくられ、そして小突廻すやうにして外に突出された。餘の事と學生は振返ッた‥‥其の鼻ッ頭へ、風を煽ッて、扉がバタンと閉る‥‥響は高く其處らへ響渡ッた。學生は脣を嚙み拳を握ッて口惜しがッたが爲方が無い、悄々と仲間の後を追ッた。

灰色の空から淡い雪がチラ〳〵降ッて來た。北風が時々頰に吹付ける。丁ど其の時、職員室の窓から、長い首を突出して、學生と一平との悶着を眺めてゐた、若い職員の一人は、ふと顏をすッこめ、

「また雪だ。」と吐出すやうに叫ぶ。

「然うかね。」と振返ッて、「何うも今日の寒さは少し嚴しいと思ッたよ。」と熱の無い口氣で謂ッて、もう冷たくなッた燒肉を頰張るのは、風早といふ學士で。彼は今晝餐を喰ッてゐるので、喰りながらも、何か原書を繰開げて眼を通してゐる。其の後の煖爐には、フッ〳〵音を立てながら石炭が熾に燃えてゐる。それで此の室へ入ると嚇と上氣する位煖かい。

「風早さん、何んですな。」と若い職員は、窓を離れて、煖爐の方へ歩寄りながら、「近頃は例の、貴方の血の糧だとか有仰ッた林檎を喫らんやうですな。」

「いや、近頃何時も購ふ林檎賣が出て居らんから、それで中止さ。」

「だが、林檎は方々の店で賣ッてゐるぢやありませんか。」と皮肉にいふ。

「そりや賣ッとるがね。」と風早學士は、淋しげに微笑して、「ま、喰はんでも可いから‥‥加之立停ッて何か購ふといふのが、夫の鳥渡面倒なものだからね。」

と無口な學士にしては、滅多と無い叮嚀な說明をして、ガチヤン、肉叉と刀を皿の上に投出し、カナキンの手巾て慌しく口の周を、拭くのであッた。

「然うですか、甚だ簡短な理由なんて。」と若い職員は揲るやうにいふ。

「然うさ、都て人間といふものは然うしたものさ。眞ンの小ッぽけな理由からして素敵と大きな事件を惹起すね。例へば堂々たる帝國の議會ですら、僅か二三千萬の金の問題で、大きな子供が大勢でワイ〳〵大騷を行るぢやないか。」

と細い聲で、靜に、冷笑的に謂ッて、チラと對手の顏を見る。そしてぐい、と肩を聳す。これは彼が得意の時に屢く行る癖て。彼の傍には、人體の模造――と謂ッても、筋肉と動靜脈とを示せる爲に出來た等身の模造が、大きな硝子の箱の中に入ッて、少し體を斜にせられて突ッ立ッてゐる。それて其の飛出した眼球が風早を睨付けてゐるやうに見える。此の眞ッ紅な人體の模造と駢んて、奇麗に眞ッ白に晒された骸骨が巧く直立不動の姿勢になッてゐる。そして正面の窓の上には、醫聖ヒポクラテスの畫像が揭げてあッた。其の畫像が、光線の具合て、妙に淋しく陰氣に見えて、恰で幽靈かと思はれる。天氣の故か、室は嫌に薄暗い。雪は、窓を掠めて、サラ〳〵、サラ〳〵と微な音を立てる……辛うじて心て聞取れるやうな寂な響であッた。

風早學士は、此響を聞いても何んの興味を感ずるても無ければ、詩情に動かされるといふことも無い。それこそ空々寂々て、不圖立起ッて、急に何か思出したやうに慌しく書棚を覗き廻る。覗き廻りながら、

ポケットから金の時計を出して見て、何か燥々する　て、頻にクン〳〵鼻を鳴らしたり、指頭て　のを掻廻したり、または喉に痰でもひッ絡むだやうに妄と低い咳拂をしてゐた。風早學士は、此の醫學校の解剖學擔任の敎授で、今日の屍體解剖の執刀者だ。年は四十に尚だ二ッ三ッ間があるといふことであるが、頭は既う胡麻鹽になッて、顏も年の割にしなびてゐる。脊はひよろりとした方で、馬鹿に脚が長い。何時も鼠とか海い茶色の、而もスタイルの舊い古ぼけた外套を着てゐるのと、何樣な場合にも頭を垂れてゐるのと、少し腰を踞めて歩くのが、學士の風采の特徵で、學生間には「蚊とんぼ」といふ渾名が付けてある。さて風采のくすむだ學士は、態度も顏もくすむだ方で、何樣なる學士と懇意な者でも學士の笑聲を聞いた者はあるまい。と謂ッて學士は、何も謹嚴に構へて、所故に他に白い歯を見せぬといふ意ては無いらしい。一體が榮えぬ質なのだ。顏は蒼ッ白い方で、鼻は尋常だが、少し反ッ歯である。顏のうちで一番に他の注意を惹くのは眼で、學士の眼の大きいことゝ謂ッたら素敵だ！加之其が近眼と來てゐる。妙に飛出した眼付で、或者は「蟹の眼」と謂ッてゐた。頭髮は長く伸して、何時櫛を入れたのか解らぬ位。其が額におッ被さッてゐるから、恰て鳥の巣だ。

學　の顏や風采も榮えぬが、其の爲ることも榮えぬ。敎壇に立ッても、調子こそ細いが、白墨の粉だらけになッた手を上衣に擦り付けるやら、時間の過ぎたのも管はずに夢中で饒舌ッてゐるやら、講義は隨分熱心な方であるが、其の割には學生に受ぬ。尤も學士には、些と高慢な點があッて、少し面倒な、そして少し得意な説を吐く時には、屹度「解るか。」と妙に他を馬鹿にしたやうに謂ッて、ぐらり學生の顏を

見廻したものだ。見廻して置いて、肩を搖ッて、「だが、此の位のことが解らんやうぢや、諸君の頭はノンセンスだ。」といふ。これが甚く學生等の疳癪に觸ッた。それて其の講義は尊重してゐたけれども、其の人物に對しては冷ッこい眼で横目に掛けてゐるといふ風であッた。雖然學士の篤學なことは、單に此の小ッぽけな醫學校内ばかりて無い、廣く醫學社會に知れ渡ッた事柄で、學士に少しのやま氣と名聞に齷齪するといふ風があッたならば、彼は疾に博士になッてゐたのだ。勿論學校からも、屢々彼に博士論文を呈出するやうに慫慂するのであッたけれども、學士は、「博士論文を出して誰に見て貰うんだ。」といふやうなことを謂ッて、頭で取合はうとはしなかッた。學士は一元哲學の立場からして、極端な死滅論者で、專ら新ダーウイン派の説を主張してゐる。で、一般は彼のことを解剖學者と謂ッてゐるけれども、學士自身は、所謂解剖學は一種の術に屬すべきもので、學問では無い、自分は生物學を研究してゐるのであると謂ッてゐた。事實然うかも知れない。學士は、生物……と謂ッても、上は人間から下は蚯蚓の類まで、都ての動物に多大の興味を持ッて研究してゐる。彼は單に科學的に實驗するばかりで無い、哲學的に思索もする。要するに彼は、形而下から、また形而上から自然の本體を探ッて、我々人類生存の意義を明にしやうと勤めてゐるのであッた。されば風早學士は、自然哲學者として甚だ説が多い。また研鑽も深い。雖然學士は尙だヘッケル氏の所謂「熟せる實」とならざる故を以て其の蘊蓄の斷片零碎をすら世に發表せぬ。彼は今のところ自ら高く持して默ッて考へてゐる人だ。そしてまた其の爲ることでも言草でも、頭の冷ッこい人てあることは爭はれぬ事實だ。

彼は、解剖學者として、是迄殆ど百に近い屍體を解剖した。彼に解剖された人を一時に集めて見たら、立派な人生の縮圖が出來て、其處に小社會小國家が作られ、そして我々人間が祖先から傳へられた希望も慾望も習慣も煩悶も疑惑も歸趣も、そして運命をも、殆ど殘らず知悉することが出來たかも知れぬ。解剖臺に据えられた人だからと謂ッて、人間が變ッて生れたのでも何んでも無い。矢張我々が母の胎盤を離れた時のやうに、何か希望を持ッて、そして幾分か歡喜の間に賑に生れたのだ。そこで其の最後は、矢張我々の先代が爲したやうに、何の意味も無く、また何等の滿足も無く、淋しい哀な悲劇であッた。

彼等のうちには、戀に燃えて薄命に終ッた美人もあッたらう、また慾に渇いて因業な世渡をした老婆もあッたらう、それからまた尙だ赤子に乳房を啣ませたことの無い少婦や胸に瞋恚のほむらを燃やしながら斃れた醜婦もあッたであらう。勿論小さな蹉跌から大なる悲劇の主人公となッて行倒となッた事業家もあッたらうし、冷酷な世間から家を奪はれて放浪の身となッた氣の好い老夫もあッたらう。また活きてゐる間潑溂たる意氣は日每酒を被ッて喧嘩を賣廻ッた元氣な勞働者もあッたらうし、空想的の功名に跪いて多大の希望と抱負とを持ッて空しく路傍に悲慘なる人間の末路を見せた青年もあッたであらう。更にまた一夜に百金を散じた昔の榮華を思出して飢と病とに顫きながら斃れた放蕩息子の果もあッたらうし、奉ずる主義の爲に社會から逐はれて白い眼に世上を睨むでのたうち迴りながら憤死した志士もあッたであらう。中にはまた、堅い信仰を持ッて泰然として解脫した宗敎家もあッたらうし、不靈な犬ッころの如く生活力が盡きてポックリ斃れた乞食もあッたらう。是等種々に異ッた性質と境遇と運命とを

持ッた人間が、等しく「屍體」と名が變ッて生物の個體として解剖臺の上に据えられる、冷たくなッて、素ッ裸にされて。繰返していふが、此の人等は決して變ッた人間でも何んでも無い。疑も無く我々と同じ種族で、甚だ小しやまくれた、恐ろしく理屈ッぽい、妄とえらがッてゐる人間で、巧く打當たら、何れも金モールの大禮服を着けて、馬を虐待して乘廻すだけの資格があッたのだ。

併し風早學士は、些とも其樣なことに就いて考へなかッた。其が設や何樣な人であッたとしても、彼の心に何んの衝動も感覺も無かッた。勿論其の人の運命や身分や境遇や閲歴に就いて想像を施らすといふやうなことも無い。また其が貴人の屍體であッたとしても、賤婦野人の屍體であッたとしても、彼は其處に黒犬と斑犬との差別を付けやうとしなかッた。要するに都て人間の屍體で、都て彼に解剖されるのを最後の事蹟として存在から消滅するものと考へてゐた。で解剖される人に向ッて、格別儚ないと思ふやうなことも無ければ、死の不幸を悲しむといふやうなことも無かッた。彼の人の死滅に對する感想は、木の葉の凋落する以上の意味は無かッたので。

そこで或る生ッ白い學生などが、風早學士に向ッて、此樣なことを訊ねたことがあると假定する。

「何んですな、解剖學者といふものは、恐ろしく人間を侮辱してゐるものですな。死者の尊嚴を蹂躙して、恰て化學者が藥品を分析するか、動物學者が蟲けらでも弄くるやうな眞似をするのですから。」

而ると、風早學士は、冷に笑ッて、

「そりや人間靈長教や靈魂不滅説の感化から來た妄想さ。我々の祖先に依ッて廣く傳播された宗教と

いふ迷信的の眞理では、我々人類が甚だえらい者のやうに說かれてゐるから、人間の靈性だとか、死者の尊嚴だとかいふことを考へて、解剖することが、解剖される個體に對して甚しい侮辱だ……と、ま、思ふのだらうが、そりや思ッたことて、考へたことぢやないな。僕は、屍體に對して特別に尊敬も拂はぬが、また侮辱もし無い。何時も出來るだけ有用な材を得やうと考へて、出來るだけ親切に解剖する。其がまた刀を執る者の義務だからね。併し其が假に死者に對する侮辱だとしやう。然らば君等に人間靈長の迷信を鼓吹したクリストは何うだえ……活きてゐる人に向ッて罪惡の子と謂ッてゐるぢやないか。罪惡の子とは、平ッたくいふと惡い奴だといふことだ……君等は此の大侮辱には歡喜して、解剖學者の侮辱でも無い侮辱に憤慨するのかえ。」

そこで片一方が躍起となッて、

「そりやクリストは救世主ですから、其位の侮辱をする權利があるでせう。」といふと、

「其んなら解剖學者だッて、宇宙の研究者なんだから、其位の……、侮辱でも無い侮辱をする位の權利がある譯ぢやないか。」

此樣な事で、風早學士は何處までも人間の本體を說いて、解剖は決して死者に對する禮を缺くもので無いと主張するのであッた。

されば風早學士が、解剖臺に据えられた屍體に對する態度と謂ッたら、冷々たるもので、其が肉付の好い若い婦であッても、また皺だらけの老夫であッても、其樣な事には頓と頓着せぬ。彼の眼から見た

其の屍體は、其の有脊椎動物で眞の四足類で、また眞の哺乳類で、そして眞の胎盤類である高等動物の形態に過ぎぬので。それで魚屋が俎の上で鰹や鯛を切るやうに、彼は解剖臺の屍體に刀を下すのであッた。其の手際と謂ッたら、また見事なもので、法の如く臍の上部に刀を下ろす。人間の血は、心臟の休息と共に凝血して了うから一滴の血も出ない。先づ腹部を切開して、それから胸腔に及んで、內臟の全くを露出する……腸でも、胃でも、腎臟でも、膀胱でも、肺でも、心臟でも、または動脈でも靜脈でも、筋でも骨でも、神經でも靱帶でも、巧に、てばしこく摘出しまた指示して、そして適宜に必要な說明を加へる。幾ら血が出ぬからと謂ッても、我々人間の內臟は、色でもまた形でも餘り氣味の好いものでは無い……想像しても解る。人間の筋肉は、鮮麗な紅色を呈して美しい色彩のものではあるが、何故か我々人間に取ッて何等の美感を與へられる性質のもので無い。理屈は別として、人間の生活慾は、牛肉を快喫する動物性はあッても、人間の感情は、たゞ一片の同胞の筋肉を見ても慄然とする。況して其の筋肉を原形のまゝで、筋肉と混同になッて、白い骨を見たり、動脈を見たり靜脈を見たり、また胃の腑の實體や腸のうじや〳〵したところを見ては、奈何に氣强い者でも一種嫌惡の情に打れずに居られない。されば始めて實驗解剖を見た者は、大概二三度食を斷つといふことである。雖然風早學士は、カラ平氣て、恰で子供がまゝ事でもするやうに、臟器を弄ッたり摘出したりして、そして更に其の臟器を解剖して見せる。固より些も無氣味と思ふ樣子もなければ、汚ないと思ふ樣子も無い。眞箇驚くべき入神の妙技て、此くしてこそ自然の秘義が會得せられやうといふものである。奈何に頭を熱らせて靈魂の存在を

說く人でも、其の狀態を眼前見せ付けられては、靈長教の分銅が甚だ輕くなることを感得しなければなるまい。

風早學士は、單に此の屍體解剖の術に長けてゐるばかりで無い。比較解剖の必要、または其の他の必要から、生體解剖の術にも長けてゐる。併し國家は。法律を以て、人間の生體解剖は禁じてある。それで生體解剖の材料は、兎とか猫とか犬とか鷄とか豚とか猿とか、先づ多くは小ッぽけな動物ばかりだ。此の意味からいふと、風早學士は、屠殺者の資格も備へてゐると謂はなければならぬ。で或人が此の慘忍な行爲を攻擊すると、

「成程こりや矛盾かも知れない。人間以外の動物を輕侮して、そして虐待するクリスト及びクリスト教徒を攻擊する僕等の爲ることゝしては、或は矛盾した行爲かも知れない。雖然僕等はピユリタンで無いことを承知して貰ひたい。僕は人間なんて、人間には矛盾の多いものだから、從ッて矛盾の行爲も敢てするのさ。併し生體解剖が慘忍だといふならば、都ての肉類を喰ふ人は皆慘忍ぢやないか。況して僕等の先輩が、生物を善用して比較解剖をしたればこそ、成熟期に達した人間の女に月經があると同時に、猿の牡にも月經があるといふ、宇宙の一大事件が發見されたのぢやないか。」

と辯駁する。

要するに風早學士は、其の爲る仕事が變ッてゐるばかりで無い。人間も頗る變ッてゐて、世間でいふ變物であッたのだ。それで尚に妻も娶らず、こつ〳〵として自然哲學の爲に貢獻しやうとしてゐる。一

而からいふと、無味乾燥な、極めて沒趣味な生活をしてゐるものと謂はなければならぬ。彼の住ッてゐる家は、可成廣いが、極めて陰氣な淋しい家で、何時の頃か首縊があッたといふ嫌な噂のある家だ。其處に彼は、よぼ〳〵した飯炊の婆さんと兩人きりで、淋しいとも氣味が惡いとも思はずに住ッてゐる。そして家へ歸ると直に、澤山の原書を取ッ散かした書齋に引籠ッて、書を讀むとか、思索に耽るとか、設令五分の時間でも空に費やすといふことが無い。他から見れば、淋しい、單調な生活である。

此の沒趣味な變人が、不圖たッた一ッ趣味ある行爲を爲るやうになッた。といふのは去年の冬の初、北國の空はもう苦りきッて、毎日霰の音を聞かれる頃からの事で。風早學士は、毎日林檎を一ッポケットへ入れて來て、晝餐の時には屹度其の林檎の皮を剝いて喰ッてゐる。寒さの嚴しい日などは煖爐に烘ッて喰ッてゐることもあッた。唯喰ッてゐると謂ッては、何んの意味も無ければ不思議も無いが、其が奈何にも樂しさうで、喰ッてゐる間、氣も心も蕩々してゐるかと思はれた。子供ではあるまいし、誰にしたッて舌に快味を感ずるばかりで其樣な眞似が出來るもので無い。そこで其の事件が職員室で「林檎の謎」といふ問題となッた。

「自然の謎」を探る生物學者は其の同僚から「林檎の謎」を探られるやうになッた。さて此の謎は、風早學士が外部から受けた刺戟の反應で、此の反應に依ッて、風早學士の内部に非常な變動があッた。實をいふと學士は、此の町に來てから、其の峻烈な寒氣も、其の莊重な自然も、また始終何か考へてゐるやうな顏をしてゐる十萬に近い町の民も、家も樹も川も一ッとして彼の心を刺戟する物が無かッた。

彼の心は、例に依ッて淋しくも無ければ、賑ても無かッた。て讀書と思索とが彼の友となッて格別退屈もせずにゐた。

然るに或る霧の深い朝のことで。風早學士は、外套の襟を立て、肩を竦め白い息を吐きながら、長い脚に靴を穿いて家を出た。そして何時ものやうに「人間の爲ること考へてゐることに要領の得ぬことが多い。」などと考へながら、泥濘ッた路をペチャンクチャン、人通の少ない邸町から――其處には長い土塀が崩れてゐたり、崩れた土塀の中が畑になッたりしてゐる――横町へ出て、横町から大通へ出る。大通へ出ると、毎朝屹度山の手の方の製絲工場の滊笛が鳴ッて、通は朝の雜踏を極めてゐる。市場へ急ぐ野菜車の響やら近在から出て來た炭と柴とを付けた馱馬の鈴の音やら、頭に籠を載せた魚賣の女の疳走ッた呼聲やらがたくり馬車の喇叭の音やら、また何やら喚く聲叱る聲、其等全く慘憺たる生活の響が混同になッて耳に入る。其と同時に、土方や職人や物賣や商人や百姓や工女や教師や吏員や學生や、またはの小ッぽけな生徒などが、何れも憔た姿、惶々とした樣子で、幻影のやうに、霧の中をうごめいて行くのが眼に映る。誰の顏を見ても、恍けてもゐなければ笑ッてもゐない、何か物思に沈むでゐるのでなければ、一生懸命になッてゐるか威張ッてゐるか、大概此の型に定ッてゐるから、何れも何か目的と意味を持ッて大眞面目であるに違ない。其の眞面目な人間の動いて行く中を、痩ッこけた犬が大地を嗅ぎながら、また何うかすると立停ッて人の顏を瞶めながら、ヒヨイヒヨイ泥濘を渉ッて行く……さもなければ、薄汚ない馬が重さうに荷馬車を曳いてヒイ〳〵謂ッて腹に波を打せてゐるのが眼に映る。彼が毎朝

大道で見るものは大概此樣な物に過ぎぬ。雖然人間生活狀態の縮圖である。

偶時にはまた少し變ッた物や變ッた出來事にも打突からぬでは無い。鳥屋の店先で青ン膨の若者が、バタ〳〵踠いてゐる鷄を攫むで首をおッぺしよるやうに引ン捩ッてゐることや、肉屋の店に皮を剝がれたまゝの豚が鈎に吊されて逆さになッてゐることや、其の店に人間の筋肉よりも少し汚ない牛肉が大きな爼の上にこて〳〵積上げてあることや、其の中の尚だ活きてゐる奴が二匹ばかりて、大きな石を一ッ大八車に載せて曳いて行くことや、其の後から大勢の人足がわい〳〵謂ッて騒いて行くことや、または街頭に俥に挽かれて板のやうにひしやげた鼠の骸や、屋根の上に啼いてゐる鴉や、電信柱に垂下ッて猿のやうに仕事をしてゐる人や、其をまたさも感服したやうな顏で見物してゐる猿の子孫に相違が無いと思はれる人や、それから犬の喧嘩や人の諍。手錠を箝められた囚人や其を護送する劍を光らせる巡査や、または肥馬に跨ッた聯隊長や、其の馬の尻にくッついて行く馬丁や、犬に乘ッた猿や、其の犬を追立てゝ行く猿廻や、それからまた妾と鞭て瘦馬をひッぱたくがたくり馬車の馭者や、ボロ靴て泥を刎立げて行く一隊の兵卒や、其の兵隊を誘致して行くえらさうな士官や、犬を嗾かけながら犬の先になッて走る腕白小僧や、或は行路病者、迴國巡禮、乞食僧侶、或はまた癩病患者、癲癇持、狂人、鼻ッかけ、眼ッパ、跛、蹇、または藝者や素敵な美人や家鴨‥‥引ッ括めていふと、其等の種々の人や動物や出來事が、チラリ、ホラリと眼に映ッてそして消えた。

雖然其等の物の一ッとして、風早學士の心に何んの刺戟も與へなかッた。風に搖れるフラフ、または

空を飛ぶ鳥を見るやうな心地て、冷々として看過した。

其の朝も其の通て。

霧は深かッたが、空は晴渡ッて、日光は燦然として輝き、そして霧と相映じて鮮麗な光彩を放ッてゐた。彼は二三度空を見上げたが、たゞ寒さを感じたばかりで、朗な日光にも、刻々に變化して行く水蒸氣の美觀にも少しも心を動かされなかッた。初冬の雨上りの朝には、屢く此樣な光景を見るものだと思ッただけである。そして何時か、此の市の東の方を流れてゐるS‥‥川に架けられた橋の上まで來た。此の橋の近傍は此の市の一方の中心點となッてゐるので、其の雜踏は非常だ。何處からと無く醒いやうな溝泥臭いやうな一種嫌な臭が通ッて來て微に鼻を撲つ‥‥風早學士は、此の臭を人間の生活が醗酵する惡臭だと謂ッてゐた。

彼は此の臭を嗅ぎながら橋を渡りかけた。流は寒煙に咽んで淙々響いてゐた‥‥微な響だ。て、橋板を鳴らす大勢の人の足音に踏消されて、大概の人の耳には入らなかッた。雖然悠長な而して不斷の力は、ともすると人の壓伏に打勝ッて、其の幽韻は呷くやうに人の鼓膜に響く。風早學士は不圖此の幽韻を聞付けて、何んといふことは無く耳を傾けた。それからまた何んといふと無く川面を覗込むだ。流は橋架に激して、素絹の絡ッたやうに泡立ッてゐる、其處にも日光が射して滲ッすりと金色の光がちらついてゐた。清冽な流であッた。

川面の處々に洲があッた。洲には枯葦が淋しく凋落の影を示せてゐて、埃や芥もどつさり流寄ッてゐ

た。其の芥を二三羽の鴉が啄き廻し、影は霧にぼかされてぼーッと浮いたやうになッて見えた。流の彼方此方て、何うかすると燦爛たる光を放つ。霧は淡い雲のやうになッて川面を這ふ‥‥向ふの岸に若い婦が水際に下り立ッて洗濯をしてゐたが、正面に日光を受けて、着物を捲る雫は、恰で水晶のやうに煌く。其の影はカッキリと長く流に映ッてゐた。兩岸の家や藏の白堊は、片一方は薄暗く片一方はパッと輝いて、周圍の山は大方雪を被ッてゐた。

此の光彩ある朝景色も、風早學士に取ッて、また何等の意味も價値も無いものであッた。それて機械的に一とわたり、ざッと其處らを見廻して、さッさと橋を渡ッて了ッた。

何處ても市中の橋際には、大概柳と街燈とを見受けるものだ。此の橋際にも其がある。柳はもう一とひらの葉も殘してゐなかッた。其の柳の下に、十五六の年頃の少女が林檎を賣ッてゐた。林檎は、背負籠の上に板を置いてコテと並べてあッた。

其は偶然の出來事てはあッたが、風早學士は不圖此の少女に眼が付いた。少女は、北國の少女に屢く見受ける、少し猫背のやうな體格てはあッたが。色の白い髮の濃い、ふッくりした顏立てあッた。細い美しい眉も、さも溫順に見えたが、鼻は希臘型とでもいふのか、形好く通ッて、花びらのやうな唇は紅く、腭は赤子の其のやうにくびれてゐた。眼はパッチリした二皮瞼て、瞳は邪氣無い希望と悅とに輝いてゐるかと見られた。

風早學士は妙に此の少女に心を引付けられた。て、其の飛出したやうな眼て、薄氣味の惡い位ヂロ〱

少女の顏を見ながら、其の儘行過ぎて了はうとして、ふと立停ッた。立停ると、慌しくポッケトを探りながら、クルリ踵を回して、ツカ〳〵と林檎を賣る少女の前に突ッ立ッた。そして、

「林檎を呉ンか。」と聲を掛ける。

少女は、紺のつゝぽの袖の中へ引ッ込めてゐた手を出しながら、「幾個ね」と艶ッ氣なしに訊く。

「幾個ッて‥‥」と風早學士は、鳥渡まごつきながら、「一ッて可いんだ。」

「一ッかね。」とケロリとした顏で、學士の顏を瞶りながら、「大きいのが可いかね、それとも小さいのになさるだかね。」

「大きいのを呉れ‥‥一番大きなのを一ッ。」

「お擇ンなッたが可い！」

と投出すやうに謂ッて、莞爾する。片頰に笑窪が出來る。

「ま、何でも可いから好さゝうなのを一ッ呉れ。」といふと、

「然うかね。」と少女は、林檎を見廻して、突如一ッ握ッて、「此らが、ま、好いとこだね。」

「宜からう。」と頷いて、風早學士は林檎を一ッ購ッた。そして彼は、此の少女に依ッて、甚だ強く外部からの刺戟を受けたのであッた。

此の朝からして、其の橋際は風早に取ッて無意味な處では無くなッて了ッた。そして此の朝を始めと

して、風早は毎日此の少女の林檎を購ッた。何故か其の數は一ッと定ッてゐた。それからといふものは、風早は毎朝其の橋を渡りかけると、柔な微笑が頰に上る。氣も心も急に浮々して、一流の響にも鳥の聲にも何か意味があるやうにも感じられ、其の冷い心にも不思議に暖い呼吸が通ふかと思はれるのであッた。此くして以後三月ばかりの間、天氣さへ好かッたならば、風早は其處に林檎を賣る少女の顏を見たのであッた。唯顏を見て心を躁がせてゐたばかりで無い、何時か口を利き合ふことになッて、風早は其の少女が母と兩人で市の場末に住ッてゐる不幸な娘であることも知ッた。

處が一週間ばかり前から、不圖此の少女の姿が橋際に見えなくなッた。風早學士の失望は一と通で無い、また舊の沈鬱な人となッて、而も其の心は人知れぬ悲痛に惱まされてゐた。彼は其の惱を以て祖先の遺傳から來た熱病の一種と考へ、自ら意志を強くして其のバチルスを殲滅しやうと勤めて而して踠いてゐた。

* * * * * * * * *

解剖室に入るべき時間は疾うに來たのであるが、風早學士は何か調べることがあッて、少時職員室にまご／＼してゐた。軈て急に思付いたやうに、手ばしこく解剖衣を着て、そゝくさと職員室を出て廣ッ場を横ぎッて解剖室に向ッた。其の姿を見ると、待構へてゐた學生等は、また更に響動き立ッて、わい／＼謂ひながら風早學士の後に從いて行く。

雪は霽ッて、灰色の空は雲切がして、冷な日光が薄ッすりと射す。北國の雪解の時分と來たら、全て

眼に入るものに、恰て永年牢屋にぶち込まれた囚人が、急に放たれて自由の體となッたといふ趣が見える。て其處らの物象が、荒涼といふよりは、索寞として、索寞といふよりは、漠然として、其處に一種人を壓付けるやうな陰鬱な威力があッた。暗澹たる冬から脱却した自然は、例へば慘澹たる鬪に打勝ッた戰後の軍勢の其にも似てゐる。其處に何んの榮も無く、全てが破壞されて、そして放ッたらかされて、そして取ッ散かされて亂脈になッて、尙だ何んにも片付けられてゐない。見るから無慘な落寞たる物である。早い話が、雪といふ水蒸氣の變換は、森羅万象を全く眞ッ白に引ッ包むで了ッてこそ美觀もあるけれども、これが山脈や屋根に斑になッてゐたり、物の陰や家の背後に繃帶をしたやうに殘ッてゐては、何んだか醜い婦の白粉が剝げたやうな心地もする。要するに雪解の時分の北國の自然は都て繃帶されてゐるのだ。丁ど戰後の軍勢に負傷者や癈卒や戰死者があるやうに、雪解の自然にも其がある……柵が倒れてゐたり垣が破れてゐたり、樹の枝が裂けてゐたり幹が折れて倒れてゐたり、または煙突が崩れてゐたり小屋や小さな物置が壓潰されてゐたり、そして木立や林が骸骨のやうになッて默默としてゐる影を見ては、つい戰場に於ける倒れた兵士の骸を聯想する。其の林や木立は、冬の暴風雨の夜、終夜唸り通し悲鳴を擧げ通して其の死滅の影となッたのだ……雖然鬪は終ッた。永劫の力は、これから勢力を回復するばかりだ。て蕭然たるうちに物皆萠ゆる生氣は地殼に欝勃としてゐる。

風早學士は、其の薄暗い物象と陰影とを眴して、一種耐え難い悲哀の感に打れた……彼自身にも何んの所故か、因が解らなかたッたけれども、其の感觸は深刻に彼の胸を刔る。彼は其の時或る空想の花に

憧れて、滅多無性と其の影を追廻してゐた。而も彼の心は淋しい！そして眼に映る物の全てに意味があッて、疑が出て來て、氣が悶々してならぬ。

「俺は生れ變ッたのぢやないか。」と彼は頭を振ッて考へた。

「一體俺は何んだえ？」といふ疑も出て來る‥‥而ると熱りきッてゐた頭が急に冷めたやうな心地もする。て、吃驚したやうに、きよと〳〵して其處らを見廻しながら、何か不意に一大事件にでも出會したやうに狼　える。妄と氣が燥つき出す。

「何んだ？何んだッて、俺は此樣なことを考へる‥‥人間は智識の他に何も意味も無い價値も無い動物ぢやないか。人間の生活は、全く苦惱で而も意味は空ッぽだけれども、智識は其の空ッぽを充して、そして種々の繋縛をぶち斷ッて呉れるのだ。て俺は出來るだけ智識を求め、馬より少し怜悧な人間にならうと思ッて、其を唯一の快樂ともし、目的ともしてゐたのだが。」と考へて來て、忌々しさうに地韛を踏みながら、「何うして？‥‥え、何うして林檎が喰ひたいのだ。そりや林檎は、血の糧だ！血の糧には違ないが、其の血が脈管に流動するといふことが、軈て人間の苦惱を增進させるのぢやないか。」

氣が付くと彼は何時か、解剖室の入口から少し外れて傍の方へ――其のまゝ眞ッ直に進むだら、楢や櫟の雜木林へ入ッて了う方向に、フラ〳〵と、恰て氣拔てもした人のやうに歩いて行く。一平は、解剖室の窓から、妙な顏を突出して、不思議さうに夙早學士の樣子を眺めてゐた。學生等は、大概其樣な事には頓着しないで、ヅン〳〵解剖室へ入ッて行く。

人が足を踏入れぬところは、何處でも雪の消えるのが後れるものだ。風早學士は、何時の間にか其の雪の薄ッすりと消殘ッてゐる箇所まで來て了ッた。管はず踏込むで、踏躙ると、ザク〳〵寂な音がする……彼は、ふと其の音に耳を澄まして傾聽した。ふいと風が吹立ッて、林は怯えたやうに、ザワ〳〵と慄へる……東風とは謂へ、尙だ雪を甞めて來るのであるから、冷ッこい手で引ッぱたくやうに風早の頰に打突る。風早學士は、覺えず首を縮めて、我に返ッた。慌てゝ後へ引返さうとして、勢込むで踵を囘す……かと思ふと、何物かに嚇されたやうに、些と飛上ッて、慌てゝ傍へ飛退き、そして振返ッた。其處には斑猫の死體が轉ッてゐたのだ。眼を剝き、足を踏張り齒を露出してゐたが、もう毛も皮もべと〳〵になッて、半ば腐りかけてゐた。去年から雪の下になッてゐたものらしく、首には藁繩が絡みつけてあッた。

一目見たゞけて、風早學士は竦然とした。そして考へた。

「此の猫だッて、誰かに可愛がられて、鼠を踏んまへて唸ッたことがあるのだ……ふゝゝゝ。」と無意味に、冷に笑ッて、「ところが、ふとした拍子で此樣な死態をするやうになッた……そりや偶然さ。いや、屹度偶然だッたらう。何んでも生物の消長は、偶然に支配されて、種々の運命を作ッてゐるのだ!……俺が此樣な妙なことを考へてゐるのも偶然なら、此樣な事を考へるやうになッた機會も偶然だ。倘俺が此處て頓死したとしても、其も偶然だし!……」

と、考へて來て、ふと解剖室の方を見る。破れた硝子戸に冷い日光が射して、硝子は鉛のやうに鈍い光

を放ッてゐた。一平は尙だ窓から顏を出して、風早學士の方を見詰めて皮肉な微笑を漂べてゐた。

風早は其と見て、「一平か。いや慘忍な奴さ。金さへ吳れたら自分の嬶を解剖する世話でもするだらう。だが學術界に取ッては、彼樣な人物も必要さ。一箇人としては、無意識な、充らん憐な動物だけれども、爲る仕事は立派だ……少なくとも、此の學校に取ッては無くてはならん人物だ。」

此くて彼は解剖室へ入ッた。

解剖室の空氣は冷い！解剖臺――其は角の丸い長方形の大きな茶盆のやうな形をして、ツる〳〵した。顏の映るやうな黑の本塗て、高さは丁どテーブル位。解剖臺の傍のテーブルの上には、アルコールの瓶だの石炭酸の瓶だの、ピンセットだの鋸だの鋏だの刀だの、全て解剖に必要な器械や藥品が並べてある。解剖臺には、解剖される少女の屍體が尙だ白い布を被せたまゝにしてあッた。學生等は解剖臺を繞ッて、立ッて、二人の助手は何彼と準備をして了ッて、椅子に凭れて一と息してゐる。處へ風早學士がノソリと入ッて來た。

彼は直に解剖臺の傍に立ッた。一平は、つッと立寄ッて白い布を除る……天井の天窓から直射する日光は、明に少女の屍體を照らす……たゞ見る眞ッ白な肌だ！ふッくりした乳、むッちりした肩や股、其は奈何に美しい肉付てあッたらう。少女は一週間ばかり腹膜炎を病むて亡くなッたといふのであるから、左程衰弱もしてゐない。また肉も剝けてゐなかッた。濃い、奇麗な頭髮は無雜作につくねてあッて、眼は、ひたと瞑れてゐる。臉、生際、鼻のまわりは、所謂死の色を呈して、少し蒼味がゝッて、唇の色も褪

めてはゐるが、美しい顔は淋しく眠ッてゐるかと思はれるやうだ。齒が少し露はれてゐるのが、妙に他の心を刺すけれども、それとても悲哀や苦艱の表徴てはない。兩足をも眞ッ直に、づッと伸し、片手は半ば握ッて乳の上に片手は開いて下に落してゐた。倘も、ふいと此の屍體を見たならば、誰にしたッて、穩に、安に眠ッてゐるものとしか思はれぬ。

室内は、寂然靜返ッてゐた。

　風早學士は、此の屍體の顔を一目見ると直に、顔色を變えて、眼を瞬り息を凝らし、口も利かなければ身動もせぬ。そして片手の指頭を屍體の腹部に置いたまゝ、宛然に化石でもしたやうに突ッ立ッてゐた。此くして幾分間。風は絶えず吹き込むで、硝子戸は恰て痙攣でも起したやうに、ガタ〱、ガタ〱鳴る……學士の手先は顫き出した。軈て風早學士は、ぶいと解剖臺を離れて、たじ〱と後退した。そして妄と頭を押へて見て、また頭を振ッて、ふら〱と其處らを歩廻ッてゐた……かと思ふと、突如に、

「僕、何んだか頭の具合が惡くなッて來たてすから、……」

と謂捨て、眞ッ蒼になッた顔て、一度ヅラリ室内を見廻して、さッ〱と解剖室を出て行ッて了ッた。

解剖臺に据えられた少女の屍體は林檎賣の娘の其てあッた。助手や學生は呆氣に取られて、互に顔を見合はせながら、多分腦貧血ても起したのてあらうと謂合ッてゐた。　（をはり）

一夜

水野葉舟

前の年の冬の初めごろ、私は大きな森のわきに移り住んだ。――この話は、一夜その家で起つた事柄である。

この家といふのは、まるでこの武藏野の平原を吹きまはつて氷りきつた風に吹かれて居る樣な小さな家だ。間數が五間ある。しかしその一間は薄暗い室で、その室に入ると陰濕な冷めたい氣がせまつて來る樣だ、何となくこの家の床の下に非常に深い穴があつて、その口がその室に開いてゞも居る樣な心持がする。私は職業が醫者なので、便宜上こゝに住む樣なわけになつたのだ。――それに私の家族だが外見には極く平凡な、順當な家族の樣だけれども一家の人々が靜かな晩にでもお互に顔を見合せて見ると、成程人生と言ふものは、寂しい孤獨なものだと言ふ感じがされる。方々からはぐれて來た人達が假りに集まつてお互ひに慰め合つて居る樣なものだ。だから、私の妻なども、まだ若いくせに、次第とこの陰欝な空氣に化せられて初めの樣に、大きな聲を出して笑ふことも少なくなつてしまつた。

私の家族と言ふのは若い妻と、私の叔母と妻の姪の五つになる女兒との四人暮しだ。叔母といふのは、もう六十三で、早くから寡婦になつた人である。若い時に、さる高家の召使になつて居たとかいふ人なので、いつかその儀式ばつた、沈靜な空氣が骨まで泌み込んで居ると見えて、如何にも、つゝましい人

だが、何處となく冷え切つた心から笑つた事もない人である、しかしその顔には、何處となく力がある、眼なども年には似ず澄んで居るが、それよりも、その丸い鼻の工合から口つきの何處かに、何となく人の心を押しつけて其の沈んだ靜かな心に同化してしまはうとする、力がひそんで居る。よく靜かな午後などに、ふいと座敷に入つて行くと、叔母は柱にもたれて、例の樣に口をかたく結むだまゝ、うなだれて居る。

「叔母さん如何したのです。」

ときくと、顏も上げないで、

「えゝ？ 又好一の事をね。」

と言ふ。好一といふのは叔母の一人息子であつたのだが、十八の時に死んでしまつた。叔母はその爲めにどの位その心が冷めたくなつたかしれないのだらう。――言はゞ叔母は私の家のかゝり人だ。だから自分でも隨分遠慮をして居るのだが、しかしその陰鬱な表情は誰れの胸にも、食ひ入つて一種の恐ろしい感じが刻み込まれると見えて、妻などは私に叔母の噂をする時は、どんな事でも小さな聲でこつそりと話す。それが全く恐いものにさわる樣な態度だ。――叔母の聲は低く澄んで居て重々しく、ゆつくりものを言ふ。

妻の姪と言ふのは、妻の姉の子だ。姉は陸軍の大尉と結婚したが、その夫は旅順で戰死した、その前から姉は長らく病氣であつたが夫の死ぬ少し前に衰へて死んでしまつた。それでこの孤兒は私達の手で

育てる事になつたのだ。妻もよくそう言ふが、私も、この子――俊子と言ふ名だ、俊子の顏を見て居ると、不意と死んだ兄や、姉の顏が目に浮んで來る。まるで、姉夫婦が始終俊子の後に居て、時々私達と俊子との間をその顏でさへぎる樣だ。――しかし小さい時から一所に住んで居るので、俊子は私達夫婦を父母と思つて居るのだ。私は「おとうちやんて」妻は「かあちやん」といはれて居る。はきはきした鋭い子だ。それに私の樣な資本のないものには、多少の手腕があつても、東京の樣な激しい競爭の中には、とても堪へて行けないので、こんな處に來たのだ。つまり私からして落武者なのだ。まあこんな人達が集まつて居る一家なのである。

移つてから間もない一夜の事、それは十二月の半ばすぎだと覺えて居る、極く靜かな闇の夜であつた。例の樣に、私達は默つて座つたまゝ、夜を更かして居た。何といふ馬鹿氣た、うつとしい習慣だらう。私達はいつの間にか、こんな風でお互ひにろくに物も言はずに居ながら、まじまじと夜を更かす事が幾度となくある樣になつたのだ。そんな時には叔母はいつでも、ちやんと座つて口の中で念佛を唱へて居る、その聲がだんだん耳に入つて來ると、悲しい、暗い、地の底に入つて行く樣な感じが漸次と私達の胸に傳はつて來る。私はいつでも息をのんでしまふのだ。妻はそつと私の顏を見て恐ろしさを訴へる樣な眼付をする。そのくせ誰れも寢やうといひ出すものが無い。――その夜も丁度さうであつた。夜が更けて行くにつれて、何となくこの少さな家をとりまはして、闇がおしよせて來る樣だ。すると遙かな處で不意に鷄が鳴き出した。それにつれて、近くの百姓家でも連れ鳴きに鳴く。かれた。悲しそうな其

聲が靜かな闇の中に響きわたる。其時に次の室で俊子が不意に聲を上げて泣き出した。

「俊ちやんが」

妻は非常に驚いた樣なそぶりをして立つて行つた。するとすぐ泣きやんでしまつた。

私達は、わづか呼吸する間何にも思はなかつたのだ。俊子が泣き止んだと思つて居ると其處に、不意に隣の室から出て來た。ふらふら歩いて來て、私の顏をじつと見て居たが、またふらふらと次の室の方に行かうとする。――その眼、何物かゞ今俊子の魂を自由にして居る樣な眼だ。

「俊ちやん」

私は鋭く呼びかけた。すると叔母はいつになく大きい鋭い眼をして私をちらと見た。俊子は聞えない樣に室の入口に立つてむかうを向いて居る。

「俊ちやん」

妻が不意に私のすぐ後から呼びかけた。私はおどろいて振り向うとしたらば、叔母が又私の顏を見た。すると妻は、ためいきをしてそのまゝ座つてしまつた。その時叔母は不意に立ちかけた。すると俊子は次の室に入つてしまつた。私も立つた。それと一所に、

「俊ちやん」

とまるで遠くに居るものをでも呼ぶ樣に呼んだ。

玄關の障子が開いた。――私は急いでその方に行つた。すると、俊子は玄關の障子をあけて外に出樣

として居る。

私は俊子の肩に手をかけた。

「俊ちやん」

と其肩をゆすつて見たが、その儘抱かうとした。すると、俊子は默つて私の手を押しのけ樣とする。私は力をこめて抱いた。するとけたゝましい聲を出して泣き出した。その聲に驚いて妻はランプを持つて出て來た。すると私は驚いて凝立した。誰れの恐ろしい經驗と言つてもとてもこれ以上の事は決して有るまいと思はれる。――いつの間にか私の右手の處に叔母が立つて居たのだ。――その叔母の顏こそ全く殘忍な嫉妬のかたまりだ。血の氣の無い老人の顏が尙ほ靑く見えて、その反對に眼が言ひ表はし方の無い程の恐ろしい光を放つて居た。猛獸が人を覗つて居る樣な眼付、それでも足りない。私はたゞ惡魔!と口にまで出かゝつた。

しかし、ランプの光が近づいて來ると、凡ての光景が一變した。俊子は又泣きやんだが、

「おとうちやん!」

と言つて、初めて眼のさめた樣な顏をしながら笑つた。妻は私の後から息をはづませて、

「俊ちやん」

と言つた。――私は、

「皆であつちに行かう、叔母さんもいらつしやい」

と言ふ叔母はいつもの樣につゝましい歩き振りをして皆もとの室に入つて來た。それから俊子を中心にしていつになく皆で大きい聲を出した。――珍らしく叔母も話をした。その聲は平常と少しもかはらなかつた。

私はよく人の話す、猛獸はどの位人に馴れて居ても、不意にその野性が表はれると言ふ話を聞く度びに心から慄戰してこの記憶を思ひ浮べる。丁度それと同じ樣な調子で人間は時に惡魔の影を心に映す。

（をはり）

ソンネット二篇

三木露風

見よ我胸は

見よ我胸は炎なり、
絶ゆるひまなく戀ひわたり
心の瞳君を得て
たちまち血汐燃え盛り
「命」の火盞、愛欲の
熱きおもひをはぐくみぬ。

君は花なり麗はしき
眞紅に咲ける夢の室――
いつける胸に情熱の
炎ぞつゝめ。されど見よ
あな恐ろしき「執念」の
蛇は幾重に根を捲けり。

人妻なれば戰きて
炎の[illegible]こぼれつゝ。

二つの魂

魂は相逢ひて歎かひぬ、
闇深の夜の空に涙して
語るらく、「苦しみは鎖なれ、
繋がれて我心血に滲みぬ。」

「今ぞ知る、我戀は地にありて
奈落にも落されむ」「罪を知る
身ゆゑには死ぞうれし、心安の
國へいざ、祈りつゝ旅立たむ。」

をりから電し、ひらめきは
空をきる闇の中。おのゝきに
魂二つ抱きしが、くづをれて
さめ〲と泣きにける人の妻
何ごとぞ、夢なりき――眼覺れば
「畏怖」去り、麗らかに日は光りぬ。

田中正造翁

金子喜一

You may call him a lunatic,
You may laugh at what he does,
You may persecute him, if you will,
You may ridicule him,
You may spit on him;
But what can you do with the truth he holdeth,
The light he lifteth?

You can not dry the tears he once shed
For the people, innocent and helpless;
You can not shut out the words he once uttered
For the down-trodden souls of Yanaka;
He told the truth 'though the world denied it.
He wrote, he spoke, he roamed,
In behalf of the people.
He appealed to the Mikado in vain;

He fought with the capitalists without gain;
Yet his untiring spirit dieth not within him.
He may be tortured today in jail,
He may die tomorrow; he may go
To the world of peace and rest;
But his spirit will never die,
Until the oppressed are lifted,
The enslaved are freed.

Thou manly man, sincere and honest!
A farmer by birth, a true Samurai in spirit.
A Japanese of the Japanese!
What place in history, will Japan
Give to this man, I wonder?

和歌　柴舟選

○　金城白霓郎

八月や椰子の實にもる酒のみて磯に月見るふる郷おもふ（仲秋の頃故里琉球なる友に）

うばたまの夜の森出でゝ明月を仰ぐおもひす君見る時は

黄にはゆる木立の上の空の蒼海（うみ）に白雲うかぶあざらしに似て

神の庭奇しうたうたひから風に落葉さ踊る冬の夜の月

冬立つや痩せし山々打ちあふぎ默せる人に夕日つめたき

○　小林狂戲

ふゆの雨つめたき窓の夜の灯にわざをぎだちの噂する人

破かべに物の怪ひそむおもひしてそびらにせまる夜の寒さかな

斧ふれば白うきらめく刃先より杜にどよめく冬に入るかぜ

笑みてありし日は遠き世の思しぬねたまふ宵の君がよそほひ

山の日は里の少女が丹の頬して花みる如もやさしうさしぬ

○　小池相良

おそろしき渴きに逢ひて幾たりはけものゝ如き態にくるへる

なほ君をおもふと云へる證明（あかし）とこゝろに強ひぬかかる日にして

はてもなき大野に迷ふいざなひし君も案内（あない）を知りておはさず

天の苑いま香木にあらしして落花すらしもつちは眞白き（雪ふりける日）

春の山思はれ人のいまさばと霞へだてゝ高呼ぶ

日かな
春の雨山と海とを簾ごしにみるこゝちして君と
行くかな
野を行けば君のみ胸のときめきと鐘ぞきこゆる
霞の中に
山の國海の國みなわが思ふ色となるべき日を戀
ふるかな

○　鷲尾美雲

いつはりの世なり裸形の大木の冬木立こそなつ
かしと見れ
ふくろふは妖婆世咒ふこゑすればおそろしけれ
ど嬉し夜の森

○　香川里霞

枯れ芒さやぎぬ低(ひく)に白髪たれ若き日しのぶ老
女とやうに
胸の谷みなぎり出でし哀愁の黒き水こそ吾溺ら
さめ

○　上村松友

おほそらにとびが輪をかくはるの日をやなぎの
かげに人まちて居ぬ
森にしてきみがみうたを吟ずればみゝかたむく
るやうや木の葉の（小川眞滑兄に）

○　小木鳥城

雪姫もまぶしかるべう金色(こんじき)の福壽草咲くむつき
吉日(きちにち)
あたゝかき君が涙を珠數として佛の御弟子とな
りにけるかな

○　堀岡芳雲

つらかりし昔思へばみ佛の弘誓たふとく涙つき
ぬ日
年立つや心かへりて二十年をすぎたる我と今は
おぼえず

○　橋田濤聲

朧夜を春風ふくや小雨してしろき落花の地をお
ほふとき
若尼は纖手力(ほそたぢから)に鐘つきぬ罪のひとの子さめよと

のみに

○　大塚石南花

君に得し歌讀みてよと今朝もまたこまどに來る
よやさし瑠璃鳥（美雲の君へ）

雨つよし目閉じて居れば物の怪が陣して來るに
似ておそろしき

○　大塚榮

春の日や椽の端居のよきひとが鸚鵡にいはすう
たをゆかしむ

流れ來る椿拾ひて日ねもすを小川にきみを待ち
佗ぶるかな

○　鈴木康

夜更くれば心はさびし神の名を呼びてもみむか
信のなき身も

○　村田寛敬

あえかなる人影見えし江の水や消さぬがほどの
雨もおもしろ

春藻會詩稿

○　和貝夕潮

野を行けば雲こそ落つれあゝ人の心變りておは
さん日かも

夕空に父が名呼べばはつかにも鳥はこたへぬく
ぐみこゑして

秋風や石計りなる城壁に高潮かをる朝の熊野路

淋しき日母失ひし兒のごとく嗄れても秋の蟬は
啼くかな

長き夜や落試者どもがひそ／＼とさゝやくやう
に風は吹くかな

うつくしき雲をへだてゝ啼く鳥に似るかな二人
面がくれして

○　淺野白汀

森の日もさゝぬふる沼椎の葉のくろめるかげに
杖さしてみる

やぶれ戸にたゝずみて居ぬ昨日みし夢やかへる
とうたがひつゝも

殘雪や結べる髮のかたちしてほどけぬ笹に鶯の

啼く

おもはざる床におもはぬ針踏みしてゝちに君が
文を得しかな

應募和歌は小石川原町百二十二番尾上紫舟宛の事



櫻

よく踊る女を醉はす花見かな　へき
百中の十句を餘す櫻かな　同
瓶に活けて夜の櫻にともしけり　同
傾城のよき句したる櫻かな　同
こきまぜてよき櫻かな柳かな　同
みんなして短冊下げし櫻かな　同
夜櫻や役者と見ゆる五六人　同
上人の御歌たうとき櫻かな　同

夜櫻に一人ぞ更くる微吟哉　同
だまされて來て見る廓の櫻かな　方外
樂隊の太鼓に櫻ちりかゝる　鳴弦樓
籠あけて鳥待つ塀の櫻かな　履友
夜櫻や格子を覗く頬冠り　魯斧生
高臺の教會の櫻咲きにけり　吟朗
病院の庭に大木の櫻かな　眞天
朝は神晝は佛の櫻かな　枯藕
山寺や櫻一樹に春來る　稻香
花の庭でん／＼太鼓落ちてあり　菫哉
此里の古き館や八重櫻　磨劒
本陣を櫻の下やいくさごと　總子
花の山袂の小錢掏られけり　小魚
櫻見て桒の花道を戻りけり　青城
櫻植て今年町めく溫泉村かな　瀧北生
名所繪をひさぐ寺門の櫻かな　同
櫻咲く寺また寺の奈良路かな　句樂
山門や松に風して櫻散る　同

華表入つて櫻三段宮高し　天馬
一の谷二の谷三の谷ざくら　同
花散るや峠を下る早飛脚　壺翁生
衰へし長者が門や遲櫻　同
茶屋者の寢足らぬ顔や朝櫻　曉村
花に來て花に來る人見はやしぬ　同
花守はホ句よむ顔でなかりけり　泰山
落第の身に散りかゝる櫻かな　同
太平になれて國主の花見かな　松濤樓
花の幕昔男の覗きけり　同
國替えや花を惜みてみちのくへ　同
柳青き一灣峰の櫻かな　同
夜櫻や駕かき乘へひねり錢　同
鳥目も落花も瞽女の狹莚に　同
染殿に入る一水や櫻散る　同
花の蓙瓢据はらざる敷き處　同
酒のまぬ噓あらはれし花見哉　同
一行の寫眞をとるや花の下　同

花も無し昔關所のあとの畑　松濤樓

募集課題

蠶　三月十五日〆切
五月雨　四月十五日〆切

應募俳句は東京市本郷區駒込曙町大谷正信宛の事。

附記す、本號の課題に應じ給ひし讀者は六十七名の多きに上り、句數も松濤樓氏の二百三十句を筆頭として五十句以上のもの仲々に多かりしが、題が題だけに陳腐ならざるもの至つて少く、漸く二十一氏の四十五句を採錄し得るのみなりしは選者の洵に遺憾とする所なり。

打起黃鶯兒
莫令枝上啼
啼時驚妾夢
不得到遼西



我が外交の失態

XY生

過日米國の上下兩院を通過したる移民法改正案は、第一日本移民を全然米本土より排斥せんとするもの也。第二日本人を以て支那人と同一視するもの也、第三布哇の勞働賃銀を低落さしめ單に砂糖會社の利益を増加せんとするもの也。

我が移民が布哇より米本土に轉住すの者の數甚だ少しとて之を非難するものあるも、是れ概ね布哇耕主が自家の利益のため吹聽する處のものを丸呑みとしたる妄説にして、翻つて轉住者の數を調ぶれば、一年僅かに一萬人内外のみ、而かも此等は純然たる農業勞働者にして上陸すれば、直ちに地方に入りて農園或は鐵道に從事し、米國の職工と曾て利害の衝突せるとなし。若し之がため影響を受くるものあらば、東歐諸國より新來せる尋常勞働者あるのみ、是れとても産業盛んにして勞力缺乏せる米國西部に於ては賃銀に影響を及ぼすが如きと無きは、大北鐵道會社々長ヒル氏が、今五萬の日本人を招致するにあらざれば、該鐵道に沿へる西部一帶の山林原野を開拓す可らずと言へるに依ても之を察すべし。曾て支那人に對する排斥法案が米國上院に於て討議せられし時、院内の有力家ロッヂ氏は議案贊成の理由として説て曰く。第一支那人は舊文明の代表にして新文明を代表する米國人と一致せず同化せず。第二若し之を自然に放任せば、生活程度の低き四億五千萬の支那人は續々渡來すべく、其結果米國の經濟界を攪亂し、米人の生存を危ふすべしと。米人は今に至るまで之を以て最も明確に支那人排斥論を言現は

したるものと爲せり。然るに我が移民は米人と同じ衣服を着け、同じ家に住し、其の子弟は同じ學校に入り總ての點に於て少くとも新文明の化を受けんことを希へり。而して渡航人數に對しては本國政府嚴に制限を設くるが故に、其數甚だ少し。支那人に對する處のものは一も我が移民に適用すべからざるなり。加之、東歐諸國より今現に米國に來る移民の數は年々數十萬人に達し、其の貧困無學なること遙かに我が移民に過ぎ、犯罪の數亦同日の談に非ず。且つ此等は大抵市中に留まり勞力の缺乏せる地方に行くを欲せずして、市中の風敎を害し、社會の弊害を助長す。若し眞に不良なる移民を排除せんと欲せば、先づ彼等に對して排斥令を施行すべき也。其れにも拘らず、少數にして純良なる我が移民をのみ排斥せんとするは、唯だ我が人種の彼れに異なるが故に外ならざるべし、果して然らば是れ宛然清國團匪の攘夷論ならずや。

カリフォルニア、オレゴン、ワシントンの三州には日本人の在留するもの凡そ四萬人、此の内農場或は菓園を有して獨力事業を營むもの今や頗ぶる多く、或は鐵道工事を受負ひ、既に少からざる資本を投入したるものあり、此等は孰れも勤勉と忍耐とによつて今の地位に進みしなり、其の資產は皆粒々辛苦の結果なり、之を二十年前に比すれば、米國西部に於ける我が殖民事業は實に長足の進步を爲し、其の面目を一新したりと謂べし。然れども其原因は新來移民の增加に依り、相俟て發達したるものなるが故に、一び勞働者入國の道を杜絕せらるゝに於ては、彼等の事業は恰かも樹木の水を絕つが如く、忽ち枯衰すべきや必然なり。或は移民とせず、旅券規則によりて我が當局渡航許可の手加減を爲し、以て勞力の不足を補ふべしとの說あらんも斯の如きは渡航者に於て相當資產の證明を要するが故に、純良なる勞働者の渡航を望み難く、徒らに都會に浮浪する青年を增加するに止まるべきのみ、產業の發達に對しては幾んど寸益あるとなし。

布哇に在留する我が移民が輓近漸く其賃銀を上け、待遇を改良せらるゝ趨勢に向ひし所以は一に大陸轉航

の道あるによる、今之を杜絶せらるゝに於ては、彼等は唯だ資本家の指命に服從する外無く其境遇殆んど往時の契約勞働に復歸すべく、在留六萬の移民は全く奴隷と一般甚だしき不幸に陷るべし。

斯の如く正當の理由を有せざる彼れの主張を容るゝがため、一方には我が在留同胞を死地に陷れ、他方には布哇移民の待遇改良を不可能ならしむ、既に外交の大失態なり。然かも是れ學童問題の交換條件たるに至つては、全く利害の輕重を顚倒したる處置といふべし。彼の日米條約第二條の但し書を云々するが如きは徒らに外交の無能を自白するに過ぎず。

郡制廢止案の提出

郡制廢止案提出せらる。衆議院は恐らくば前回の如く殆んど滿場一致を以て之を可決すべし、但だ知らず貴族院の之を如何すべきかを。

今の郡が自治體として主として爲しつゝあるは郡立學校、病院、並びに農事試驗場位ゐに止まる。而かも郡立の學校病院試驗場の全く無き郡も多し、茲に於てか郡制によりて郡參事會を置き、郡會議員を置き、其の職務は單に郡參事會、郡會の費用を議するに止まるもあり。郡の自治體の無要なる、民間の齊しく認むる所にして、現に衆議院が殆んど全會一致を以て廢止案に贊成したるは其の證なり。

原則としても、國家、府縣、市町村の三階級あれば則ち足れりとすべし。之に郡を加へて四階級とするは繁雜に過ぐ。假令繁雜に過ぐると雖も、必要のものは之を存置せざる可らず、然れども郡制は全く無用のもの也。無用のものを置きて事を繁雜に過ぎしむるは愚の極也、郡制は斷じて廢止するに如かず。

若し郡制の創立者たるがため、若くは郡制廢止の發案者たる內務當局を憎惡するがため、之に反對すべしといふが如きあらば、是れ國家の利害を措きて感情に徇ずる也、私のために公を枉ぐる也。

貴族院たるもの民論に反して而して斯の如き陋態に

出づ可らざる也。

論難の秘策

默笑

前に進めば十歩にして盡き、横に行けば十歩にして盡く、唯それ方十歩の庭園のみ、而かも中に亭々天に參るの老幹あり、緜々地に絡るの蔓草あり、欝々暑を洩さゞるの榛莽あり、細く一溪を開き、深く一瀑を落し、路窮して更に連り、水隱れて又顯れ、此處に一石伏し、彼處に一亭立つ、黄昏月を迎へて杯を啣んで之に向ふ、優に深山窮谷の中仙境を尋ねて其處に居るの想あり、毫もその方十歩なるを覺えざるなりこれ何の故ぞ、老幹や、蔓草や、榛莽や、一溪一瀑一石一亭やに讓せらるゝなり、魅せらるゝなり、兩物體間の距離は間に介在物を存する多きに從つて、吾人の眼に映ずる長さを加ふとは、是れ心理學の實驗の敎ふる處、東に出づる月、西に沒する月、影は甚だ大なれども何となく距離の遠きを覺ゆるに、浮々として天心に中する月、影は頗る小なれとも忽ち頑太郎をして、屋上竿を棹ひて之を擺ひ落さんと志さしむるもの此理による。予今此處に得て端なく論難の秘策に想到す。

坊主酒亭にあれば、唯一個の破戒僧のみ、之に向つて賽錢を拂ふ氣とならず、賽錢を拂ふ氣を起さんと欲せば少くも錦襴の袈裟を纒はしめ、之に念珠を與へて大伽藍の須彌壇に奉置せざるべからず、先生娼戸にあれば只一個の無慚漢のみ、之に向つて月謝を收むる氣とならず、月謝を收むる氣とならんと欲せば、少くも精好の袴を穿かしめ、之に敎鞭を與へて大校堂の講壇に安置せざるべからず、然らばお坊樣の難有さ先生樣の尊さには其處には錦襴の袈裟精好の袴と大伽藍の須彌壇大校堂の講壇とが與つて大に力ありと謂はざるべらず、流石は一休なり、彼れ法會に招かれて欵待を受けしとき、酒を以て法衣に注ぎ、人の怪み問へば、今日欵待を受くるの主は愚衲にはあらず、之なりけりと澄ましたりとかや、吾人の人を說く、箇中の機微に深く想、

到せざるべからず、明白の事理を明白に語れば聽くものそは自らにして明白の事とし顧みず、顧みても何やら物足らぬ面色す、而してその評語は如何、彼は學者にあらざるなりの一語之のみ、然るに之とは反對に、その中に含まるゝ道理は極めて幼稚に極めて單純なるにせよ、迂餘曲折屋上屋を架して層々說き來れば、聽くもの何となく嘆服の聲を放たんとす、試に誰かに向つて秀吉は人なりと敎へよ。フ、ンと鼻にあしらはるべし、更に人とは縱目横鼻にして理性を具ふる動物なり、秀吉も然り、故に秀吉は人なりと三段論法にて說け、尙ほフ、ンものなるべし。更に之を生物學理に參し進化論に訴へ、右に左に縱横に觸着し、時には彼は人か超人か、將た神仙かと樣に、往々問を設け疑を挿み、最後に彼は人間の尤なるものなり、彼は果然人間なり、彼を人間として見る、其處に我も大に學びて至り得べきの理を見ずやなどいはゞ、フ、ンは大分怪くなり、或は我に正對して何時しか襟を合はすやも知れず、而かも論旨は初より變ぜざるなり、變じたりとせば唯材料の添はりたる一點なるべし。正論は暫く措く、唯、論難に勝を制せんとならば材料こそ最も肝要なるものなれ。此材料こそは實に兩物體間の介在物にして存外に短き奥行をも長く〳〵見しむるの利分を有するなれ、凡物をも學者と見しむる魔物なるなれ。

魔物の利分は啻に上述の如きに止まらず、進んでは堅白異同の辯、正を邪とし邪を正とするの妙用をも藏するものなり、特に直接經驗を離れたる抽象的議論に於ては最も妙なり、例せば、此世には何等無常ならざるものなし、何處にか安住の地を得ん、我之を思うて輾轉反側寢ぬるも安からざるもの幾年、而かも能く思へば此無常の理の我に知らるゝは何ぞや、我は此一條の絲端に縋りて佛に行けり、我れ以外に我より大なる力なくんば何くんぞ此理の知らるゝを得ん、我は今此大なるものゝ攝取不捨の御膝に抱かるゝを知りて心强くなれり、難有くなれり、我身一つの我心に任せぬを知りて厭世の念は起らずなれりと說くあり、語調は巧なれど、唯此世は無常なりとのみ敎えたる佛が斯くま

て難有かるべしとは如何にも不思議の事なり。吾人佛を信ずと雖ども此世無常なりと敎え玉ふが故にはあらざるを、更に例せば、宗敎には本體と形式とあり、吾人は形式に就ては云爲するの餘地あれど、その本體に至れば決して不信の念を抱くものにあらずと前置しながら、何時か、宗敎を倫理に加味せんには實行に於て難あり、耶蘇敎徒を容るれば佛敎徒の反抗あり、佛敎を容るれば、耶蘇敎徒の反抗あり、吾人の理想は歷史的宗敎の最善なるものを取つて之を倫理に參せんとするも現實に行ふには難いかなと嘆じ、更に倫理は何人にも必須のものなれども宗敎は然らず、必須ならざるものも多々ありといふに至ては、何時しか本體を離れて形式上の沙汰となる。吾人は宗敎が不必須のものなりとは此理論にては首肯き得ざる節あり、然れども此く短く小約すればこそ容易に首肯き得ざる節も見出さるべけれ、之を堂々幾十頁に亘る大論文に仕立て、行くが如く歸るが如く止まるが如く進むが如きの論調にて現さるれば何時しか身は八幡知らずの中に迷ひ入るの思ひあり、心境恍として方向を知るべからず、已むなく結論に聽いて無意味の合點もすることゝなるなり、こは五分と六分の兩木片を取つて近く相並ぶれば其差は甚だ見易きも相隔つこと數尺、間に長短極めて錯綜せる同種の木片を介在せしめば、その差は容易に定め得られざるにも似たり、元來八幡知らずとは何ぞや、必ずしもその境域の廣濶なるにはあらず、迷路の多きによる、一定の方向を取らざる小岐の合離廻環その度を超え、吾人をして一度入れば容易に出る能はざらしむるによる、爰に若し拉し來るに盲人を以てし、彼を提げて前後に振廻すこと幾數回、彼れが最初に定め來れる方向を失つて狼狽失神するを待ち、新來者の態をなし懇切に誤れる方向を敎えんか、唯々之に從はんは固より次ぐに感謝幾叩頭なるやも知るべからず、吾人は之よりして世に行はるゝ多くの論難に座頭振廻し主義の名稱を與へんと欲す。されど吾人豈に之を以て獨り今人を是非せんや、要するに亦一種論難の秘策のみ、試に晉史を閱して仔細に古人の論步を檢せば、これを發見す

る迄までに難からざるべし。夫の誰も知る孟子梁の惠王に見ゆる章とても亦能く之に洩るゝものならんや、叟千里を遠しとせずして來る亦將に我國を利することあらんとするかと問はれしに對し、王何ぞ必ずしも利といはん、亦仁義あるのみと一頓挫を加へ、諄々として說くところは何ぞ、利を直接目的とせば利に却て遠し、仁義を目的として利初めて至るといふ、恰もスペンサー一流の論調を以てし、王も亦仁義といはんのみ、何ぞ必ずしも利といはんと結ぶ、是れ表面仁義を敎ふる如くにして却て大なる利を敎ふるもの、之を孔子が貧と賤とは人の惡む所なれど苟も道を以てせざれば去らざるなりといひ、或は朝に道を聽いて夕に死すとも可なりといふに比すれば、相去る啻に萬餘里といはんや、然れども此矛盾の容易に知られざるは慥に座頭振廻主義の効なり、座頭振廻し主義は實に論難の秘策なるかな、されど此秘策に罹るものは又實に殃なるかな

煩悶の一解釋

（白山討究の結果）

火雲生

現代の靑年が、深刻なる悶々の情を持して居る事は明瞭なる事實である。けれども、華嚴の瀧壺の內容や淺間や阿蘇の噴火口の內部が甚麼ものだかは、飛び込んで見なければ解らないので、當代の所謂學者、哲學者、宗敎家、夫々の大家先生が途方も無い解釋をして、而も煩悶救濟策などと鼻息の荒い御託を並べるのも無理はない。悠長に育つた自己の狹い經驗を追懷して、若い時分は多分這麼事を考へて居たのだらう位て、現代靑年の煩悶は戀愛であるとか、女學生の煩悶は結婚を要求する心を壓え付けて居る結果である故、早く結婚させてやれば好いとか、愚にもつかぬ議論を腆面もなく述べて居る、畢竟自己の心裡の醜陋を自白して却つて純潔なる靑年を驚歎せしむるに止まる、葭のずゐから天を覗くと云ふのは這麼場合を云ふので、全く靑年の心情を覗ふ事の出來ないのだ。言を爲す者がある、是の問題ては却つて大家先生なぞが覺醒されて、初めて現代の如何なる狀態かを注意して來たので、靑年の煩悶の火は大家先生に類燒した樣な形だと。自分は思ふ、神田ッ子の若いのが向ふ鉢卷てオッどうして吳れるッと怒鳴つたのを、それは這うしなさるが宜かんべエなぞと赤毛布の挨拶、馬鹿に爲やがるないエかうコチトはそんなケチなんぢやれいヤエ、氣を付けやがれウフ唐變木めと大喝されて大家先生グーの音も出ないやうな有樣、見て居る者は腋の下から冷汗が出るや

うだ。唯一人、文學博士松本文三郎先生あつて、能く愼重なる觀察を以て諄々として再三是の問題を説かれたのは大いに青年の意を强うしたに相違ない。所が自分は帝國文學の二月號にて、藤岡博士の「新體詩論」を讀んだ所が、その一節に現代過渡の時代にある青年の心情は今の社會に地位を得て居る人達に解る筈はない、昔は親の心子知らず今は子の心親知らずといふ警句が吐かれてある、全體が松本博士以上に青年を知つて居るものと云つてよいと思つた。

所で自分は青年側から是の問題の一解釋として提出すべきものがある。と云ふのは現代は飽く迄も自由の世界であると共に、自由討究の結果より生ずる煩悶が一部の才はぢけた青年の間には免れない事實であるといふのである。所謂沈香も焚かず屁もひらない的の平凡の者には是が無い、否多數の是等の連中には所謂煩悶なる味は解らないので、至極安全であるが、併し現代の煩悶を一概に危險なる風潮とのみ見るのは甚だ近眼者流の事で、苟も有爲の青年としては一度び深刻なる煩悶を切り拔けたのでなければ、現代に事を爲す資格が具はらないと思ふ。一個の中學校に就いて聞く所に依ても、級の中の成蹟優れた者のみが是の風潮に先づ觸れるのであつて、餘り過度に勉强するからそんなつまらぬ事で惱むとか、考へ過ぎるから煩悶するのだとかといふ事が青年間に能く云はれて居る位、即ち青年の中でも頭腦の好い者が煩悶するのだと云ふ事になる、遉うなると大家先生が無暗に煩悶生を罵つたのは青年を馬鹿になれと云ふのと同じ事であつた。日當りの好い梢の盛んに芽を吹いて來たのを摘んで了つて、日陰の枝と同じやうになれと云ふのは不條理である、元來能く發達するものゝ内部には、それ丈けの努力があるのだ、日南の梢は日陰の枝よりも血の廻りが好い譯、即ち煩悶する青年は人の中の日南に居る者で、伸びて擴がつて茂つて盛んに花を飾つて軈て實を結ぶの努力が籠つて居る梢である。

時代も然うである、即ち現代は歷史の中の日南の梢だ、盛んに伸びんとするのだ、大に發達せんとするのだ。維新已後駸々として時代の芽は吹き出したのである、是の時代と是の青年の思想とが一つになつて躍動する結果が煩悶者を多く出した理由である。自由討究の結果が時代精神、現代思潮である事は誰れも首肯する事であらう、科學に於て然り、精神界の討究に於いて殊に然り、人生の歸趣を究め、生存の意義を知らんとするに、洋の東西を貫き時の古今を通じて、自由なる考察自由なる研究をなさんとする。煩悶は科學の上に立たず精神界、感情の上に成立つので、要するに思想界の自由討究から生ずるものと見るのである。自由なる新空氣に深呼吸をした青年は、是の思想界の問題に於て、亦個々自由なる解決を試みんとする、道德の標準は如何、宗敎の價値は如何、個人の意義、人生の歸趣は如何と所有る人間の精神的要求を發動して、而も先づ是等の問題を提げて起つた時、青年は暗々たる疑惑の谷に臨んだ、彼等の討究は自由である、故に何等の抗束がない、彼等は太初の一人であるが如くに、頗る自由なる考察をする、前に基督なく釋迦なく、ソクラテスなしプラトンなし、彼等は歷史を有せずとまで、超越したる自由境に

立つのだ。彼等は神を信ぜんと希はず、神を造らんと試み、彼等は道を開かんと思はず、自己の道を見出さんとする、善悪の標準をも新たに決定せんとし、見神を云ふ者あり新宗教と稱し、新佛教と稱し、日本基督敎の獨立と稱し、思へば何事をも彼等の燃ゆるが如き自由討究の思潮は、觸るゝものを燃かんとするのであつた。是れ過渡期の思潮として當然のもの、一面に在來の思想界を見來れば、黑暗々、既に光明なく信火燃えず、僧侶は腐敗し學者は墮落し、道義は地に落ちてある、是の時、最も清純なる自由なる青年が將さに執らんとせる方向は汪洋たる自由討究の海上にあるのでなければなるまい、此傾向は大いに同情すべきものてある。

自分は思ふ現代は必ず天才を俟つて、思潮は統一され、醇化され可きものであると。然るに多くの青年は恐く天才ではない。而も問題は天才を要するのである、此間深刻なる悶々の情の起るは無論當然の事に屬するのである。即ち青年の煩悶の一解釋として自分は現代思想界の無統一より生ずる、自由討究の結果、青年には力の足らぬ重荷であつて、又た如何ともする事は出來ないのであると只、其丈を云つて見たのである。併し、藤岡博士は新體詩に就いて一日も早く天才の現はれ出てよと曰はれて居たが、現代は何の方面にも天才を俟たざる可らざれば、擧世の腐儒また何事をも爲すなきものであらう。

時事小言（二則）

閑古鳥

▲ストライキ頻々

足尾騷擾事件一度暴發してよりストライキの行はるゝこと益々頻々。長崎に於ては三菱造船所の職工八千堅き同盟を結んで増給を提出し、遊泉寺礦山（石川縣）の坑夫千四百名亦同樣の計畫をなして今にも蜂起せんとする形勢ありと。而して大阪煙草製造工場に於ける小ストライキの如きは其他の各地にも續々起らんとする模樣なりと聞く。蓋し電氣はよく金屬に流通し、磁氣はよく鐵片を動かす。ストライキは譬はゞ電氣の如く亦磁氣の如し。一度大ストライキにして起らんか資本と勞働の調和せざる所、雇主と被雇人の反目する所、皆之に感染して振動し、激搖せざるなし。是れ理の極めて明かなるもの、夫れ故に吾人は此ストライキ熱は今後益々昇騰するの勢あるものと見る。さりながら吾人は足尾事件の如き亂暴狼藉の行爲に向ては到底贊同の意を表する能はざるもの、彼の如きは間接には社會問題に對する世人の注意を喚起すの効能ありとするも直接には只彼等勞働者が泣寢入して元の古巣に返るの不利を來すを免れざるべきを思ふ。蓋し教育もなき餘財もなく手よりして口に運ぶ所謂其日暮しの勞働者が、統制なき、思慮なき、先見なき同盟休業を行ふ如きは徒らに資本家側の彼等に對する制御の法策を嚴密ならしむるに止り、彼等の豫期するが如き結果は到底得らるべきものにあらず。且つや我治安警察法（第十七條）によれば現今の

所謂ストライキは概れ一種の犯罪として所罰せらるべき性質のものたり。吾人は我勞働者の位置現狀を憫むこと切にして之を改善せんとするの志決して人後に落ちざるものなりと雖も、今日の如き輕舉妄動に對しては深く彼等を責めざるべからざるを信ず。而して今日に於て吾人の最も希望する所は獨り我政府當局者のみならず、思慮ある、教育ある、熱誠ある我國民の總てが社會問題に對して深き注意を拂ひ、以て平和に、靜安に、根本的に此問題を解決するの日の速かに來らんことに外ならざる也。

▲日本社會黨の禁止。　堺、四川、石川等の諸氏の主唱の下に成れる日本社會黨は、社會の安寧秩序を害するもの也との廉を以て去る二月二十二日治安警察法第八條第二項によつて其結社を禁止せられたり。吾人は今之に對して是非の論をなすを好まず。何となれば吾人は社會黨の諸氏が十年一日の如く社會主義を主唱し、傳播し、實行せんとするの先見と熱心とに服するも而かも、其手段として取りつゝある方法は、些か西洋の所謂モッブ的思想に感染したるものゝ如く、富豪資本家に對しては常に坊主憎けりや主義を持し、其言論は情理併せ盡して反對者をも敬服せしむるが如きことなく、常に當局者を熱罵冷嘲して好んで其惡感情を挑發せんとするが如き、吾人よりして見れば、眞に經世濟民の志あり、慈眼愛勝の情ある人の行動にあらず。今回の如き亦一半彼等の自ら招けるものゝ如き觀なきにあらず、さりながら吾人は又我當局者に向ても決して讚辭を寧らんとするものにあらず。彼等が未だ明確に社會問題の何たるを解せず、よし之を解せりとするも之を解決せんとする誠意熱心なく、たゞ社會主義としいへば直ちに嫌惡戰慄して之を撲滅せんとするが如き、餘りに無主義、沒眼識なるを難ぜんと欲す。吾人は固く信ず。社會問題の解決を促すべき機運は今後ますます盛となるべきを。而して又窃かに思ふ。一日本社會黨の成立と解散の如き、抑々一些事のみ。時代の潮流の浪打ちて寄する所、之れ殆ど人力の奈何ともする能はざるもの、而して其勢の必至にして且つ自然なるの理由の明かに萬人に認めらるるの時、即ち是れ眞の解決法の發見せらるゝの時たるべきを。

評論以下を大に賑かにせんとは本年正月の誌上に於て讀者に誓ひたる所なりしが、頁數の都合上、之を實行するの機會を見出し能はざるを病みし所、いよいよ今回より之を實行することゝしたり。爾後益ゝ此方針を繼續し、且つ大に改良を加へんこと期す。



文士の一諾

樗陰迂人

男子の一諾千鈞より重しとは古の詩人の歌へる所にして武士に二言なしとは武士の平常口にせる所なり。而して英國にては you lie!(汝僞れり)といへば士人に對する極度の侮辱なりと聞く。吾人此等のことを思ふ毎に我文士に對して些か憾なき能はず。

文士は多く感興によつて書く。而して感興の去來は文士自らと雖も左右する能はず。假令或程度迄左右し得るとするも全然之を左右することは難し。夫れ故に文士を追窮して必らず其約を履ましめんとするは心あるものゝ忍びざる所、成るべく文士寛待の道を講じて彼等をして充分感興の溢れたる作物をなさしめんこと何人も希望する所なるべし。然れども、こは世間よりいふべきことのみ、文士以外の人より發すべき言のみ、若し文士自らの側よりいへば決して世間の約束を輕視せず、必らず自己の一諾を重んじて其責任を全うせざるべかざること論なし。世の文士中往々自己の約束を以て左程重大なる意味を有せざるものとなし、借錢てはあるまいし、さう手緊しき催促を受くるは意外也などいふものあり。吾人は斯の如き人の言を以て知らず識らず金錢萬能主義の思想か或は法律一點張の思想に感染せるものと見做さゞる能はず。吾人より見れば借財も文債も毫も異る所なし、只一は法律上の問題にして一は道德上の問題たるの差あるのみ。若し道德上の問題は法律上の問題よりも輕微也とするものあらば是れ疑もなく吾人の所謂法律一點張りの思想に感染せるものにあらずや。若し借財は文債よりも重大なるものなりとすれば是れ亦疑もなく吾人の所謂金錢萬能主義の思想に沈溺したるものにはあらずや。吾人は文債是

れ亦必らず償却せざるべからざる一の重大なる義務と信ず。

吾人のかく論ずるは決して文士を攻撃するが爲めにあらず。又決して文士に惡感を有するが爲めにもあらず、實に今日の文士として今一層其社會的地位を高めしめ、今一層文士の尊嚴を維持せしめんとするの希望に外ならず。見よ、文士以外の人の今日の文士を見る、大抵輕薄なる、信用の置かれぬ、ヅボラなる人間として相場を極め居るが如き有様也。是れ甚だ慨すべし。而して世人のかゝる見解を有するに至りたるも、確かに文士の一部に約束を約束と思はず。いゝ加減に其場の挨拶をなし、破約して他の迷惑となるも、恬として顧みざるが如きもの少からざりしより由來したること多きに居るべきを思ふ。

世に或は文士を辯護するものあり。文士が其場限りの挨拶をするは彼等は感情の人間にして、人の依賴を無下に拒絶する能はざるより起れるものなりと。吾人は此辯解に一應の理由ありと見る。さりながら再考すれば然らず。感情の人にして人の依賴を拒む能はず多少の迷惑をなしても遂に承諾すといふは、是れ確かに文士の美點、然れども一旦承諾して之を履行するの實を示さゞるは奈何。若し初めより履行の見込なきものを承諾せしとならば是れ承諾にあらず、ゴマカシ也、心中拒絶しながら之を公言するの勇氣なきもの也。かゝる人は決して感情の人たるが爲めにあらず、意思弱きが爲め也。面從のなし易きに就て面折のなし難きを避けたる也。感情の人とは感情一度び動けば、必らず遂行する人也。心に信ずることを口にする能はざるの人にはあらず。今の文士を以て承諾の當時さへ約束を履行するの意思なかりしものと見るは餘りに酷也。吾人は夫れ故に或人の辯解の如き此點に於て却て文士を侮辱したるものと見る。吾人は信ず。今の文士の約束を遂行するものの少き、此れ未だ文士間に約束を重視するの思想乏しく、些かの事情あり、少許の障害あれば即ち破却するを意とせざるが爲め也と。

近時「文章世界」を見るに、中に長谷川天溪氏の高山

樗牛談あり。之によつて見るに高山樗牛は最も原稿に對する約束を重んじたるものゝ如く未だ嘗て約束の期限を誤りたることなしといふ。夫れ樗牛の如きは最も感情の文を遣れる人、而かも尙且つ其約を違ひたることなしといふ事實を、彼が文士として如何に自ら重んじつゝありしかの事實と併せ考ふれば蓋し多大の感慨なくんばあらず。又夏目漱石氏の如きも最も感興によつて筆を執る人、而かも亦同時に最も約束を重ぜらるゝ人たるに考へて吾人は吾從來の文士が多く此等の人に學ぶべき所あるべきを思はざる能はず。又吾人の平常最も敬服するは安部磯雄氏にして（氏は所謂純粹の文士にはあらざるも）、氏は未だ嘗て原稿について時日を誤りたることなく、殊に其愛女を失へて悲痛新たなる時にさへ尙且つ其約を履まれたるが如き、如何に其責任を重んずるの志堅さかを思うて、そゞろに嘆美の念に打たれたり。

吾人の文士といへるは現在のあらゆる文士を指すものにあらざるは勿論、又約束を重んずる人として擧げたる二三の文士を除くの外、悉く約束を輕視するの人といふ意にあらざることも亦固より事々しく斷はるの要を見ず。只大體に於て從來の文士には約束に對して餘りに無責任なる人多きを慨し、かゝる約束を輕視することの文士自身に對して甚しき不利なるとを信じ、些か此風を矯正したしとの微衷より此文を草したる迄也。

魏徵の詩に之れ有り。季布無二諾、侯贏重一言、と。吾人は現代の文士をして悉く季布、侯贏たる能はざるも、せめては季布侯贏たらんとするの心掛あらんことを希望するもの也。

御伽文學を論ず

瀾山人

曩に懸賞にて國歌を募りし文部省は今又懸賞にて廣く假作物語を江湖に募らんとす、その結果は如何なるべき、之には差當り當局者が選評の標準如何、將た何人が選評者たるべき、之からして聞いて掛らねば容易に判斷出來べきにあらず、然るに官報の廣告には唯教訓の意を含むもの

と許り、外に何の條件も知れず、選擇者に就いても聞くところなければ、餘潤は今分爲し難しとするも、兎に角當局者が作品を得んとの熱心の餘り、習慣には泥まず、此かる美事を敢てすること前後二回とすれば、吾人はその精神ばかりにも大に贊意を表せればならぬ譯なるに、更に又た一面これが文藝奬勵の一助かとも思へば愈よ以て然らざるを得ざるなり。

聞くに文部省にては此度募り得たる中の傑作を小學讀本中に收めんといふ、之れ甚だ善し、されどその意の在る處唯眞つ角なる道徳上の理屈を、趣味ある談話中に丸めて授くること、恰も苦い藥を甘い飴に卷いて與ふる樣にせんとするか、之ばかりとて固より惡かるべき筈もなけれ、さりとて少しは物足らぬ心地あり、然には今一つ望ましきことあり、高き趣味の涵養之なり、手つ取り早く申さば詩趣といはん程のことなり、詩趣は旨(むね)と情の上に立つ、智情意の三足揃はれば、人間何となく玉の杯底なき心地詮方なし、元來我國は槍と刀を骨としたる武士道氣質(かたぎ)、子(し)のたまはくを髓としたる儒教氣質、續いては數字や檢微鏡を肉とする科學万能氣質、斯樣なる教育にて智意の二方面にのみ心を用ゐられ、情の一面は忘れられたるにあらず、故(わざ)と取り捨てられたる趣あり、鼎の三足、一足は短くして何となく落付き惡き人間のみ育ち、妙なる方面に傾き行きて酒色の趣味に品性を下げ行くあり、こは最も慨はしきことなり、是非とも教育の節こそ肝要なれ、されど詩趣の涵養は、幼時よりその心して育てれば、六(むつ)かしきものなり、勿論百科の學何れの學とて教え込み時無きはあられど、あらぬ中にも此詩趣の涵養は分けてもなり、建部博士は曾て鼻屎一つにても研究を凝せば優に一科の學たるを得べしといはれしことあり、之は御尤も何にても眞面目に掛ばれ存外六ケしきもの鼻屎一つにも優に一科の學たるべき内容を有つべし、左れども尚ほ易きは科學の知識なり、目と耳を働かせ、分らぬところは指一本の尖(さき)にて教えらるれば大抵は合點行くものなり、左れど詩趣は左樣なる御心安きものにあらず、眞僞は知られど、鳩山博士は英國留學中、人皆文學を語る、人のすといふもの我もして見んとの土佐日記もどきに沙翁ものか何でも繙かれたるも倜々爲何の得る所もなく、此關計りは儘ならぬと斷念(あきら)められし由、以心傳心禪家の秘要も斯くこそと思はるゝばかりが詩趣の本體、大凡そは之にても知らるべし、同じ黑井に澄める月、明鏡天に掛かると見て池を廻りて夜もすがらと憧がるゝあれば朱盆空にひつ着ける樣、柄をさしたらばよき團扇かなと眺むるあり、左樣な賤しき聯想を見る目の如何に痛ましく、思ふ胸の煩ひ堪え難きにせよ、箇中の眞趣は教ゆるに何の手段(てだて)もなし禪家の修行ならば指を竪てしめて指を切るも妙なれど、詩趣を教えんには甚も怪きものなり、斯る性質のものとすれば、智育に比しては又一倍苦心の要あり、杉苗一本の仕立にも最初(はな)が大切、況して人の子を育つるには最も苦心あるべき事なり、此意味に於て吾人は少年に愛讀せらるべき御伽文學の隆盛を望むものなるが、悲いかな我國に此種の文學を見る僅に昨今にして、而かも吾人の希望に副ふべき十分なる作家はあらず、大抵は桃太郎、因幡の兎、かち〳〵山の昔噺の燒き直し、斯樣なものは

グリム一覽のフエアリーテールズ同樣のもの、怪力亂神を語らずといふ嚴肅なる定規に照せば、小供の讀み者として不合格の者少からざるべし、吾人は勿論眞、善一點張りの頑固ものにはあらざれど、動物を人格化する物語は頗る危險に存ずる者、況しても我國の如き狐狸の精人を誑(たぶら)かすとの迷信ある國に於ては、幼き耳に怪しき話、例へば狐、杓子を戴いてお姫樣となり、金瓶(かながめ)を庭に下(おろ)せば狸となりきといふ樣なる話を聞かば、成人の後にも頭腦に殘る印象は如何あるべき、斯かる迷信と結合せざるべき材料にて、十分假作は假作として、その假作の上に猶ほ面白き趣の味はふべきもの、例へば豆が小走りに驅け行くとか、櫻の花が密語(さゝめごと)したりといふ類ならば、害は愚か、却て兒童の想像力を富まし行く素地(したぢ)となるべく、大詩人の卵も斯くして孵化(かへ)さるべきかとも思ふ、歐洲の小學兒童の頭腦などは、我國の學童のそれに比しては頗る想像力に富むものあり、自らフエアリーテールズを文章中に綴るものさへあるを見る、故に一概に怪談なりとて斥けんとにはあらず要は取捨にあり、今度の選評に於ても大に此邊の注意あらまほしと存ず、我國現下の御伽作者は何と言つても巖谷小波山人なるべく、元祖といふのみには止まらず、當分優に巨擘たる貫目あるべし、去れど如上の注文よりすれば、吾人は猶ほ氏の手腕に慊らぬ節多きを覺ふ、此頃米國雜誌の或るものを覗(のぞ)きたるに氏を稱して東洋のアンダーソンなり、氏の想像力は無盡藏なりとの贊辭を奉りたるを見たれど、何處がアンダーソンなりや、何處が無盡藏なりや、氏の作物の多くは東西古今の昔噺の燒直しに止まる、右の通信者は野口氏、氏の愛國心にて漣山人の芳名を此くも太平洋の彼方に誇張せしめたること、吾人は山人と共に大に喜ぶべきも亦一面山人と共に大に苦笑を忍ばざるべからず、それはそれとして吾人は茲に御伽作者の發奮を望むの念より、現狀の欠陷を明々地に表白すること此の如きと共に、更に漣山人が棹尾の大飛躍野口氏の好意に報えらるゝことあらんを勸む。

すゞろごと

黛郎生

▲源氏節の運命は悲しかつた、が現今の女義太夫に來るべき運命も亦た卜せられるやうな氣がする。幾何百遍とも知れぬ同じさわりの繰り返しは、もう倦きた筈、院本でも讀んで見やうと云ふ青年の傾向は、十年前の撞摺連猥連とは違ふのだ。只コテ〱と白いものを塗り立てゝ、身振り澤山な、語り口の甘つたるい、蹈りこそせれ源氏節の大膽なる淫猥なものに、少し衣を着せた天麩羅だ。

▲それでも未だ肩衣をつけて居る中は、何とかして復活する氣はないか、僕は女には義太(ぎと)は向かぬなぞといふ野暮ではない、否それ所か女の聲には凄艶な優麗な一種の男に出ないものがあると思つて居る、殊に「今頃は半七さん、、、」とか「世上の娘子樣たちは、、、」なぞ云ふ所を、男の太夫の銅鑼聲でやられて耐るものではない。女優問題のやかましい今日、女の言葉は女、男の言葉は男、女でなければならぬ所の地は女

やる樣にでもして欲しいと思ふ。

▲小川亭の昇之助一座が正月に、忠臣藏の大序から七段目あたり迄を一晩に語り通しの趣好でやつたと聞く。流石は斯界の天才だ、僕は例に依つて院本研究なぞが將來起る事かと豫想して居る。浪花節でさへ研究會の奬勵會のと熱心にやつて居るのに、義太夫のみ何故グズグズして居る事だらう。

▲文庫の文藝同好會が前月十一日、芝浦の大光館で催された、文士の演說はつまらなかつたが、餘興では河合醉茗氏の「蝴蝶の舞」の活人畫が白眉で終りの演劇はなつて居なかつた。

▲家庭小說とか宗教俳句とか、少くとも文藝自由の天地を自ら狹めて筆を執る必要はないと思ふ、過般戰爭文學とか際物文學だとか云ふ聲が未だ耳にあるのに、近頃しきりに何々と自ら銘を打つて小說を書く作家があるのは氣が知れない。

宗教小說「さゝにごり」を讀む

野逸道人

今年（ことし）三十七といふに未だ獨り住みて、年よりは若く見える、會（あ）ふ人毎に愛想よく取り成して、誰にも反感を起させぬ基督敎信者（クリスチャン）て、マリアを崇拜して其繪を額にして居る鉅鹿（おほしか）辰子といふ一女性——若い時にはチョットやソツト男に氣を動かしたこともないではないが、永い間西洋人と起臥を共にして居た爲めであらうか、今は獨身を通す覺悟固く、少しも己を沽らんとする衒氣がないので、青年間の人望もあつて、多數の男子と交際して居る。又女生徒を澤山監督して居る。其監督して居る女生徒の一人に梅津君子といふ容貌才德人に勝れた一女子がある。それが矢張り鉅鹿の所へ出入する音樂家のキザな輕薄な——然し若い女の子をばチョイト迷はす力ある——反町（そりまち）豐といふ男と慕ひ合ふ。鉅鹿は反町の人物が氣に入らず、又何となく二人を一所にしたくないやうな氣もしたが二人の戀中が次第に世に知れたのと、且つは相愛するものを添はせざるは嫉妬に類するなどゝいふ考から、つひに二人を結婚せしめる。結婚するや否や君子は其夢みて居た理想の歡喜は消えて、憂鬱の谷に沈んで了ふといふのは夫の反町は四方からの借財で首が廻らず、結婚式の費用も高利貸から借れたもの、又自分の持て行たものも皆質に入れられて了ふといふ鹽梅式なので、少しも浮いた顏が出來ず。鉅鹿にも親しく來なくなつて了つた。それに引換へ夫（をつと）の反町は時々——寧ろ屢々鉅鹿を訪ふ。彼是する中に君子は妊娠（みもち）となつて例のつはりに弱つて益々氣六つかしくなり、始終（しよつちう）夫と衝突する。反町もいつそ離緣せうかなどゝ考へる時さへもある。一日（あるひ）、例の借錢のことから夫婦いさかひをやつて居る最中に、鉅鹿が訪うて來る。君子は次の間に入て出て來ぬ。鉅鹿は反町と二階に上つて話す。君子は一寸二階に來たが直ぐ降りて行く。鉅鹿がつくづく反町の風采を眺めた。今日は不思議にも反町の顏が美しく見える。君子の此人を好いたのも無理はないと思ふ。外（そと）には今迄照つて居た日影が薄く

なつた、二人とも期せずして其障子の方を見た。其刹那に二人の指先が觸れ合つた。鉅鹿はびつくりして引込ました。夫れから別れを告げて車に揺られながら鉅鹿は反町夫婦の現狀を思うて、どうしてあゝ面白くない中に別れもせずに暮らして居らるゝものかとの疑問を起す。頻りに之を解かんと考へる。ふと見ると四日を受けた二階に掛けてある「夜の物」(夜具)が目に映つた。疑問初めて解けたやうな氣がして不快になつた。これから十五六の時に圖らずも見た淫猥な繪畫のことが心に浮ぶ。これはどうした事であらうと目を啓くと、其目先に「此奥紅葉園」と記してある道案内の小さい指さしがあつた。其れを見ると反町の指先と觸れた時の事を思ひ出す。反町と二人であの二階で暮らして居ることを想像する、然し君子が二階に上がつて來る!はつと驚くと今や汽車の踏切の所に立て汽車の通行するのを待て居るのであつた。彼女は正しく反町と心中に於て姦淫の罪を犯したのである。それからいろ〳〵煩悶して日を送る。彼の尊崇して居たマリアの繪は雀の糞に汚される。これが恰度自分の心のやうだと思ふ。自分の知合の一人が重病に罹て助からぬかも知れぬとの知らせを聞く。彼は肉に死に、我は靈に死ぬのかと思ふ。然し其知合の重病は運よくも快癒の見込が立つたといふ報知を得た所で終て居る。

以上はホンの梗概に過ぎぬ。が此篇の結構及び趣味の如何なるものなるかは略ぼ推量が出來やうと思ふ。今吾人の之に對する感じを大膽にいふと、第一、三十七歳の未婚の女子が(假令其れが基督教信者なりとするも)心中に姦淫するなどいふことは左程の大事件ではない。寧ろ凡の凡なることゝと思ふ。僕等から見れば今少し思ひ切つたことをせぬのが怪まれる位である。從て全體に於て左程深い感興が起らなかつた。第二、描寫が活きて居らぬ。讀んで居て眼に浮ぶやうな所が少ない。柳浪、天外若くは其外の寫實派の人の作を讀むやうに篇中の事件が歴々として眼前に見えるといふやうな事が甚だ乏しい。其三、地の文には非常にひれつた所があるが、紅葉などを學んで至らぬもので、ひれつた丈けが却ていやな感じがする。初めの二三回などが殊にさうだ。「晴渡る空に高く貫く澁紫の花の色を浮かして」とか「豐かな温かな徳を湛へて」などの言葉使もルーズだと思ふ然しながら第十回の鉅鹿が反町の宅を訪問した所丈けは全篇のヤマで又主眼で、非常によく出來て居る。宅を出てから「夜の物」を出し、春畫を出し指先を出した用意の周到、觀察の緻密は何ともいはれぬ程よい。僕は「さゝにごり」の價値は全く此第十回の價値と思ふ。最後の病人の快癒と心靈の復活とを對照して、暗に光明の前にあるを示したるは所謂宗教小説の銘を打た所にはふさはしいかも知れぬが少し小細工めいて面白いとは思はん。僕は此小説は今少し長くして今少し大膽に深酷に書くか、又は非常に短くして第十回を中心にして其前後を短くハショツテ了ふかの二つの方法の一を選ぶべきものであつたのて、今のやうな形をとられたのは多少慊らず思ふのである。僕は著者とは知合てあるので右の如く無遠慮に惡口をいふ。然しながら兎に角今の文壇にあつては一風變て面白いものであることを吹聴し、且つ著者の益々奮勵して他日必らず大作を世に出されんことを希望するものである。



開腹術

小白也

十二月十二日、午前九時、終に叔父君は斷然某病院に於て、腹部切開術を受くる事となつた、

この病の始まりは、今から凡そ六ヶ月程以前の事である、平素酒も飲まず菓子も好まず、決して暴食などもなされた事もない、至つて實直な至つて攝生家であつたのに、二三年前から常習便秘で、屢々醫藥を用ひられたが、漸次其度を増して、常に鑛水を用ひらるゝにも係らず、益々秘結して、それが爲めに腹痛も起る頭痛も起る、一度快く通じがあれば晴々と氣分も快く、元氣もよくなるが、又直ちに秘結して鬱陶敷い氣分になる、終には蓖麻子油も甘汞も思ふやうに功を奏しなくなつて、六ヶ月以前から益頑固の便秘を起し、かてゝ加へて下腹部に劇しい疼痛を起したので、遂に某病院に入院した、

其當時は如何なる病症とも、判然確定はされなかつた、蘆薈大黄も用ひられた蓖麻子油も飲んだ、瀉利鹽も芒硝も、甘汞もカスカラサクラダも、皆屢々試みられた、石鹼水も灌腸したりスリンも應用された、けれども奇功を奏したものは一とつもない、が、奈何云ふ張合かヒョイト快く通じる事がある、一度便じると今迄の苦痛は全く拭ひ取られて了つて、平素の通りになる、食物も可味いと云はれる、氣分も可いと云はれる、何の爲めに入院などしたのか、可笑いやうな馬鹿々々しいやうな氣持になる、とまで話される、けれども又軈て便秘してくる、痛みも出てくる、藥もきかなくなる又難澁な思ひをなされるのである、斯う云ふ有樣で、何遍となく同じ事をくり返して二月三月と過ぎて來

た、けれども悲しむべき事には、同じ事をくり返す内にも段々病勢は進むと見えて、困苦む時日が長くなつて便じる度數が減じて來た、

三月と過ぎ四月と過ぎ、扨ては五月と過ぎて來た、依然便秘と腹痛とに苦まされる、否追々と增惡して、便秘は益頑固、疼痛は益劇甚となつて來た、一食に牛乳一合スープ一合鷄卵二個パン一片、必ずこれ丈けは召し上つて養生に力を盡さるゝにも係らず、漸次羸瘦貧血して、眼窩も陷沒した口唇も色が褪せた、見れば手も足も、驚く程に細うなられた、

便秘と疼痛とは愈增惡してくる、幸ひに熱はないが腹部は漸次膨滿する、益痛む、

一日三回乳劑の灌腸に依つて、大豆大又は小指頭大の糞塊を極微量に排泄するばかり、疼痛の爲めに夜間も安眠されぬ事が多い、止むを得ない時には皮下注射か頓服に依つて、數時間の眠を得られるのであるが、中毒を起すからとて、よく〳〵てなければ院長の許が出ぬ、

病症は未だ定められぬ、

然し院長には、既に〳〵或る疑は十分にあつたらしい、唯何等かの理由の爲めに明言されぬのみである、

果然！灌腸によつて排泄せらるゝ小糞塊は、近來著しく扁平のものとなつた、院長は精細に調べた、診斷は確定されたのである、腸管狹窄症、

病症の明言されてから數日の後である、院長が來診された時、狹窄部はS字狀部附近、今まで樣々に手を盡したが十分の成蹟も得なかつた處を見ると、手術の外に全快の途はない、手術するなら某病院の〇〇博士に賴んでやらう、との話があつた、

手術は奈何する、父君は腸の病である、腸の病を手術するときは腹を切るより外はあるまい、聞き及んだ大手術、腹部切開術を受くるのであらう、

腸管狹窄症の手術は開腹術の內では、簡易なるものてあるさうな、果して簡易なものであるとしても、大手術には相違ない、一とつ間違つて刀を加へたら、動脈も切斷されやう、腸管も穿孔されやう、貴い生命は出

時直ちに露とも消えやう、

思へば手足の慄く程恐ろしい、

博士にそんな失敗もなからう、けれども助手が不注意であつたら奈何だらう、クロ、ホルムの爲めに心臟痲痺を起しはすまいか、

幸い其塲で死なぬにしても、器械の消毒が不完全てあつたら奈何ならう、化膿もしよう腐りもしよう、矢張生命は助かるまい、

思へば泣きたい氣持もした、

だが今日の醫術の進歩は、素人には想像も出來ぬ位、况して〇〇博士は知らぬものなき老練家てある、其病院にある醫員のものも、各秀才の名あるもの、如何に間違つたからと云つて、そんな失敗は賴んてゝ仕出來すまい、又仕出來さう道理がない、けれども——患者は衰弱してゐる、

衰弱と云つた處、叔父君は最う六十二歳になられる、六十の上を越せば誰だつて痩せてくる、誰だつて皺が出來る、眼の凹んだのも頰の削けたのも、老人だから當り前だ、別段衰弱と云ふのてはなからう、けれども——年齢が年齢だ、

年齢が年齢には相違ない、が何故老人ては手術が出來ぬ、貧血して居るからか？成程貧血はして居る、けれど心臟は丈夫だ、脉搏も强實だ、心臟痲痺など起らうとは思はれぬ、それなら痩せて居るからか？成程痩せても居る、然し叔父君は壯年の頃は劒客てあつて錬ひた體軀だ、今の青年の筋肉とは筋肉が違う、痩せて居ても心配はあるまい、

樣々に考へた、理由を付けては考へた、手術しても危險はあるまいと考へた、手術せにや全快せぬなら手術せにやなるまいと考へた——けれども恐ろしい恐ろしいと思ふと心細く悲しくなる、

考へれば考へる程思ひは亂れてくる、奈何して好いやら區別がつかぬ、叔父君に申せば、何アに恐ろしい事はない、こんな苦しい思ひを長くさせられて堪るものか、死んだ處て差支はない、手術しようと仰せられる實際は自分てもそう思はぬてもない、毎日々々御難

惨な處を見ると、一日も早く樂にしてあげたい、手術すれば樂にならう、とは思ふけれども、矢張恐ろしいので口には云ひ切れぬ、手術に失敗はあるまいと確信しやうとしても、恐ろしさが邪魔をしてならぬ、況して死んでも可いなど丶云はれると猶更悲しくなつてくる、

叔母君にも相談した、が女だけに猶更決しかねられる、強ひて云へば涙ぐまる丶、心弱いやうではあるが決して無理とは思はれぬ、男の自分ですら、恐ろしくてならぬ、明治の醫術に信用を置いて居ながらも矢張恐ろしい、ましてそう云ふ方面には至つて無案内の、年寄られた女の身では、決しかねるのも無理でない、寧ろそれが當然であらう、

手術しないで濟む事なら、それに越した事はないがねえ、と嘆息をもらされる、自分も無論そう思ふ、けれども手術せにや全快しないと云はれたのだ、

私にはお醫者の事は解らないが、お前は若いから御承知だらう、宜しいやうにしておくれ、萬事お前に、と云はれて了つた、斯う云はれては猶更責任が重い、自分が手術を主張して若し失敗したら奈何あらう、自分は死んで詫ねばならぬ、死ぬのは易い、唯年寄られた叔母君のお愁さが思ひやられる、と思ふと、この悲しい忌はしい事が既に眼前に實現されたやうな心地になつて、身の置き處にも窮してくる、叔母君の顏を見るさへ恐ろしいやうになる、心は益亂れてくる、

親戚の方々にも相談したが皆何れも醫學の眞價を危んだ、醫學の智識のない丈けに益醫術に信頼せぬ、中には手術に反對して、奈何せ助からぬ生命でも手術して縮めなければ、まだ二月や三月は保たう、その方が可いぢやないかと、手術は成功せぬものと確信さる丶方もあつた、成程一理あると思つた、けれども狹窄症は何日閉鎖症とならうも知れぬ、閉鎖症は即ち吐糞症である、屹度死ぬ、

このまゝにして置けば、如何にも二月や三月は保たう、然し早晩死を免れぬ、他に方法がないものなら死ぬのを待つのも致しかたがない、然し手術すれば全快

が出來る—失敗すれば死期を早めるに過ぎぬけれど—全快の望ある方法のあるのに、之れを行はずして死を待つとは如何にも情けない、自分の氣質として、奈何もじつとしては居られぬ、

まゝよ手術が失敗したら、自分も死なう、死んで叔父君のお伴をしよう、叔母君にもお詫をしよう、親戚の方にも罪を謝さう、

思ひ切つて叔父君に話した、うむ、手術して見やうと云はれた、院長にも話した、話して博士に賴んで貰ふた、

愈々手術を受くる順序として、先づ〇〇博士の病院に轉じたのである、

轉じてこの病院に來てから三日目、十二月十二日午前九時、愈開腹術を受くる事になつて、叔母君の委任と親戚の承諾とに依りて、自分は手術に立合ふ事になつた、

いよ〳〵十二日、空は晴れたが氣の故か淋しい、鴉の啼くさく何となく氣になる、

時間は迫つてくる、叔父君は手術室に廻された、自分は白い手術衣を着せられた、今更胸は早鐘のやうに響く、

看護婦の案内に從つて手術室へ通つた、見ると叔父君は犧牲に供されたものゝやうに、白衣を以て被はれて手術台に横はつて居る、博士を始じめ助手の方々、寒きまで白き手術衣に身を被ふて、肅々として歩み寄る、其姿例へば神のゐませるに似たれども、又　ろしさがこみ上げて、自分は思はず慄いた、

手術の成蹟は佳良なれ、心から神に祈つた、祈つて醫術に信賴した、而して強いて冷靜に佇んだ、

博士は顧みて

「手術にかゝります

聲、細けれども鋭く低けれども強く、自分の胸を貫いて、思はず再び慄いたと、見る間假面（痲醉藥を嗅がせるもの）にクロヽホルムは滴下された、叔父君の鼻は被はれた、

兼ねて期しては居たものゝ、今更この光景に接して

は、恐ろしくなる、悲しくなる、最う叔父君は口きかぬ人とならう、尊敬した博士は今日より憎むべき仇敵とならう……手術を願つたを瞑目して心に悔んだ、

ガチャりと音がした、はッと驚いて眼を開くと命を縮むる大小の利刃は、陰々として青く光つて、叔父君の身を廻つて、恐ろしげに並べられた、

あはれこの刀、身を救ふの利器ともなれば、生命を絶つの凶器ともならう、凶器か利器か、今余が心には之れを識別する程の餘裕はない、強いて外らした視線は悲しむべき叔父君の顔に落ちた、假面に被はれて、僅かに眉と眼とのみ顯れたいたく〱しい面影を見た時に、思はず二三歩前に進んだ、進んで利刃の恐ろしきに余は再び唇を嚙んだのである、

一度潮紅した叔父君の顔は、漸次蒼白色になつてくる、呼吸は荒くなつてくる、呻いてくる、余が胸はかき毟らるゝよう裂かるゝよう、獨り苦んで喉頭がつまつた、

荒かつた叔父君の息は、聽て深く長くなつた、深く長く、長く、長く、刻、刻、叔父君は深い深い眠りに陷る、

機熟す矣、博士は靜かに左右を顧みつ、醫員は叔父君の身を圍んで、あと云はゞさと應ぜんとす、

つと寄つて博士は刀を取るや、身を斜にして屹となつた見る間、刀は斜に閃いて石像の如く横はれる、あはれな犧牲の腹部を越えて、上下に颯とかすめ去つた、實に、其後の光景は見るに堪えない、余は幾度びか卒倒しさうになつた、

二時間にして術は終つた、叔父君は運搬車に乘せられて室を出たが、病室に歸つても猶昏々として眠つて居る、恐る〱覗けば、息がある、觸れて見た、温い、思はずほつと一と息した、

少時にして眼を開かれたのを見ると「叔父さま!」と我知らず口に出た「如……如何です」「胸が惡い」と聲が細い「麻醉藥の後だからです、傷は痛みますか」叔父君は默つて首を振つた、「痛みませんか!」首肯く、

れた、

一日と過ぎ二日と過ぎた、毎朝博士が來られて診察される、幸に熱も出ない、食欲も段々ついてくる、

四日目の朝、例の如く博士が來られた、

「熱も出んかね」「はい」「可い鹽梅ぢや、豫後は佳良てす！」

豫後佳良！「先生治りますか」「治る！」嗚呼「叔父さま！」

自分は嬉しさの餘り、思はず叔父君に縋つて泣いた、そして跪づいて神に感謝の祈をさゝげた、

首實檢

雨峽生

▲眼力光らす松王丸ためつすがめつと、芝居なれば是の首實檢の役、舞台を脊負つて起つ覺悟だが、是はほんの座敷藝、好い年をして這麼事を考へて居る罪の無い所を見てやつて呉れ玉へ。

▲抑もの發端は、苟も我輩は腰辨である、と云ふ所から朝晩おひろいて廣小路を通行するのがお定り、十年如一日、そこで是の朝晩に往來の人の顏を見る事、一日百人としても十年で卅六萬五千人といふ天窓數に成るので、何か顏見る斗りでなく、一と工風有つて可然と、勿驚辻切を初めたのである。

▲スパリと打落した首の數三十六萬五千箇僕の眼の先きにヅラリと並んで居る、淨海入道が髑髏の怪に逢つた體宜しく、怕ろしい樣な氣もするけれど、只今一々首實檢に取りかゝる。

▲併し一箇々々講釋をして居ると日が暮れる、一摑みにして申し上る。十人十色　百人百色、千人千色、親子兄弟親類縁者、夫婦でも云ひなづけでも、誰れでも彼れでも皆形の變つて居る所が面白い。先づ形の大體を云へば、曰く圓、曰く角、曰く面長、曰く大面、曰く小形、美や醜や、色の白いのや、黒いのや、眼の大小、髯の有無、髮の毛色、色々細かく申し上る迄もない、是等は勝手に想像召され。

▲偖て、單に是れが死顏は相好が變るなどゝ、その手では面白くないから、僕が摩訶不思議の力を以つて、元の如く胴に接いで見る、所が彼等は種々の動作を初めた。能く見玉へ。

▲上下動、是れは首を上へ下へと動かすので、大きく動く場合は肯定の意味である、が更らに細かくはげし

い微動をする事もある、是の際は震原は微笑を含んで居るに相違ない、是れは性急な人に多い。

▲水平動、左右に動かす場合、前者に反して否定の動作だ。是れにも急がしい微動がある、イヤよく〳〵などと甘つたれるので、若い女にあり勝ちなもの。

▲前後運動、前に突き出して、オヤ然でしたかなぞと軽い疑問と少し斗り驚嘆の心持ち。是れが前方への運動。それからハヽアなんかと大聲に怒鳴つて後方へ反り身になつて驚く場合と、乙にすまして居る時とが後方運動である、當世ハイカラ男に多い圖だ。

▲廻轉運動、是れは首を廻轉するのだが、全然後ろ向きにはなれない、相手を輕蔑して赤い舌を出す者は時に是の運動を用ゐる。

▲左右傾斜、是は三十度位の傾斜角の範圍内で、首を左右に傾ける仕打、哲學者や宗教家、賣卜者、鑑定家なぞには是の運動が習慣となつて了つて、右か左の一方に斗り曲げて居た癖が固定したのもある、這麼人は常に首が曲つて居るので、何時でも考へ顔に見える。

▲總ての人の思想は多少何れかに前述の動作が伴なふもので、僕は是の動作と思想との關係を、曰つて見たいのであるが、何分混雑な問題で、尚ほ一段の研究を要すると思ふ故、茲には一二の題目をのみ掲げて置くのみに止める。傾斜運動で表はれる思想は、その右へ、或ひは左りへ、即ち傾斜の方向に依つて相異なるものがあるに相違ないと思ふ、人はものを考へる場合必ず兩方へ首を傾斜して見る、是は明かに異なる思想を心の中で繰り返して居るので、動作に現はれるのだ、斯うだらうかと思つて右へ曲がる、否さうでもないなぞと左へ曲がる、斯うか彼かと急がしく考へて來ると、頗る急速に左右傾斜運動が起る一分間二三十回の速度から數十回の全速度を示す事がある。

▲その形狀の如何と、その思想の如何と、またその男女老幼の區別と及び人々の表情の上手下手で、總ての運動に種々の變化がある事も研究問題として取つて置く、傾斜運動でも十七八の若い女が、男の顔を覗くやうにして、乾渡てすわなぞと云ふのは頗る艶だが、抹

香臭い坊主が本堂の薄暗い中で、大傾斜をやつて居るなぞは甚だ無氣味である。

◀僕は、斯う曰ふ考へを持つて居るから、人を見ても全人を見る事はない、即ち只單に彼れの首を見るのみ、名刀一閃、僕の前に來る奴は悉く、胴と首を打つ放されて、その首は御氣の毒だが、僕の手に提げられて了ふのだ。

◀僕は餘り罪を作るものだから、首の祟りて首が曲つて來たやうだ、と只今懐中鏡に向つて見たのだが、成程左右に甚だしく傾斜運動を初めた、是を書いて居る筆が非常に重くなつて動かない、仕方がない、如何したものかと能々思へば、何を書かうか、彼を書かうか、讀者は是れを讀んで笑ふだらうか、笑ふまいかなぞと盛んに考へて居るので、即ち首が曲つて來たのである。

漁師の生活

丘山生

(三)船主(親方)と船員(船方)との關係、及収益分配法、

親方と船方との關係は企業家資本家と勞働者との關係てある。かの工場等に於ては兩者の間に種々面倒なる社會問題があるが、船主と船員との間に絕えてそんな事を聞かないのは、全くそれが地方的で殊に大なる船主もなく、從つて少數者の間に限られて、一般世上の注意が行き屆かぬからである。加之船方には工場に於ける勞働者の如く健康を害するといふことが絕えてない。

一體工場に於ける勞働は甚だ不健康的に勞働するので、それで著しく世の注意と同情とを買うのであるが、漁師に至つては新鮮な海上の空氣を吸ひ、潮水を浴び、鮮魚を食ふ等、周圍の者一として健康に適せぬ者はない、彼等は實に鐵と石とて鍛へ上げられた人形の樣なものである。余は海岸を歩いて嘗て青い細い漁師に出會した事がない。由來彼等の職業は極はめて冒險的なるに加へて、怒濤や暴風と闘つて贏ち得たる利益は、大部分冷酷なる船主の爲に壟斷されて終ふ。彼等が心身を粉に碎いて流すところの汗は、皆船主の腹を肥す膏油となるのである、彼等は船

主に對して何等の權利も有たぬ奴隷の如き者だ、船主は彼等の多く無智なるに乘じて牛馬の如く取り扱ふのである。彼等は脫れ難き危難に遭遇して屢一命を殞す事があつても碌な手當もない。當人は犬死も同樣、彼等の遺族は死なれ損になる。——かくの如く見來れば人道問題勞働問題として、隨分論議す可き點が無いても無いに係はらず、久しく世間から忘れられ、長く憐む可き境遇に沈淪して浮ぶことの出來ぬと云ふのは、主として彼等の他に比類なき健康の致すところだ、此に至つ健康も彼等にとつては不幸であるかも知れない。又彼等の無智無教育は自ら自己の境遇を自覺し、自發的に奴隷の如き境遇を脫することは出來ぬ、誠に憐む可き者と云ふの外ない。

更に實地に就て利得分配法を調べて見んに、鰹舟繩舟にあつては、船方の乘り込む可き舟は定つては居るが、別に給金を貰つて傭はれて居るわけてはない。て船に乘つて出た日の賄は親方持とし、其他は各自の負擔てあるが、漁獲した魚の總賣高は左の如き分配法によるのである。

親方　五代半、　別に舟代として一代
船頭　二代、　棹張　一代半
其他は　一代、（但し一代とは一人前と云ふこと）

右に上げた乘組員は「生す」と稱して、賣買のない前に一尾なり二尾なりは分與される、尤も船揚等に手傳ふ者は誰れても働代として一尾なり二尾なり貰へるのてある、右に示した配當率に依つて見ても、親方は舟代は舟代として取つて終つて、更に五代半と云ふ過分の配當を得るのてあるから、如何に割の善い者てあるかと云ふ事が分る。しかも親方の貪慾なる船方の無智なるに乘じて、決して眞正の賣上高を示さず、いゝ加減に當てがつてやるのである。船方共は全く無智で實際何程の相場で何程の賣高があつたかは不明ぬのだ。比較的事理に明るい船頭は賣上高を確かに知つて居つて、正當な分配を受けて居ても、決して船方には知らさぬ。彼は親方の手となり足となつて、容易に船方には組せぬ、この忠勤によつて彼は平生少なからず親方より恩賞を受けて、如何なる不漁續きにも樂々と生計を營んてるのであるから、時に船方が何程の賣上があつたかを尋ねると、「そんな事は汝達の知つたことてない、善い樣に分けてやるから默つて居ろい」と一言の下に斥けて終ふのである。世に無智無教育程憐れむ可きものはない。右の次第てあるから表面上の規定見たいな者は反古同樣、何にもならぬ者てある。

揚繰船にあつては一職（漁期當九月十日より翌五月十日迄）一人に就き五十圓の給金を出して船方を傭つて置くのてあるが、一職四十人の船方を要するのてなか〳〵費用もかゝる、殊に沖合には七八十圓を出さなければならぬ。て揚繰ては一切親方の物を食う代りに、漁がなくとも時に百姓仕事なり何なり命令次第て働かればならぬ。尤も朝分れと稱して親方のところて朝飯は濟ましても、漁のない時主人の都合て、分散して各自に家に歸らしめることがある、この場合は各自勝手な仕事をして善いのてあるが、其代り主人の物を食うわけには行かぬ。さて船方共の利得は給金の外に漁のあつた場合には、同心傳と稱して總賣上高の一割分を

船方全體へ分ち與へられるのであるが、勿論これとて善い加減な當てがへてあることは言ふを俟たぬ。

地引にあつては平生上納屋隱居、炊ぎ、沖合は扶持を出して傭つて置くのであるが、船方は定つては居るもの丶別に給金を出して傭つて置く譯ではない、たゞ年末に米二斗位宛貰う位のものだ。其他は漁のあり次第濱の者岡の者、老若男女を問はず傭ふのであるが、これ等には働代として幾分かの鰯を分け與へてやる。漁獲物の總賣高は親方と船方と半分てあるが、網代は天に差し引かれるのである。

(四)家庭生活

「イ」彼等の平生、

風雨で舟が出なければ彼等は家にある、家にあれば必ず遊んで居る、故に不漁が續けば續くほど遊び續ける。大漁の時には一日二三圓より七圓八圓迄とることがあるけれども、皆茶屋で飲んで終ふ、金錢にかけては彼等は宵越の錢を貯はぬ江戸の兄貴連とちつとも違はぬ。余は酔歩蹣跚、同僚に手を引かれて料理屋へ行かんとするのを、後ろから女房が眼を光らし角を生やして、「この業人！」と罵るのを見たことがある。かく彼等は飲む上に賭博を盛んにやる。實に彼等の平生は酒と女と賭博と云うてよい。

一體土地の料理屋と云ふのが彼等の下劣な欲望を充すに、極めて輕便に好都合に出來てるのである。これ見よがしによく徘徊して歩く首の白い湯もじの赤いのは如何に彼等の眼を刺戟するてあらふ。彼等首の白い連中は全く無醊大飲、たゞ賓客を以て己が能事と心得、生命として居る動物てあるが、之が又極めて漁師の嗜好に適つてるのだから呆れて終ふ。而して漁師數人集まれば其處に必ず賭博は始まる。賭博と醜業とは白晝公々然と行はれるのてある。之を取締る官邊の者はないてはないが、若し彼が權力を著て強いて嚴重に取締らうとすれば、必ず暗打と云ふ免職よりも一層辛い目に逢ふことを覺悟せねばならぬ。彼とて人間てある、沈默して居れば人民の愛もよく相當の報酬さへある、暗打を食つて一命を殞したり一生不具の身となるの愚は學ばぬ。周圍の狀態既に斯の如くて、貯蓄心の如きは漁師の腦中何處を掘つて探しても全然ないのてある、それは危險な職業に伴ふ必然の結果て止むを得ぬといへばそれ迄てあるが、何とか救濟法を設けて彼等の憐む可き地位を高めてやりたい、それには一時勤儉貯蓄の功德を說き廻つたところが無益だ、外部から壓力を加へることは周圍の狀態が到底許さぬ、內部から自發的に品性と智識を高める工夫をせねばならぬ、それは教育による外ない、教育によつて始めて之を根本的に濟ふことが出來るのてあるが、其効果は急速に望むことは出來ぬが止むを得ぬ次第てある。

「ロ」生活狀態

下谷の万年町などは貧民窟として有名な者てあり、既に其眞相も屢世間に紹介されて居るが、漁師の生活狀態を赤裸々にして見たら、恐らく其れ等一流の貧民窟と比肩して耻かしからぬ者があらふと思ふ。彼等は

出來る丈け節儉に、極度迄生活費を切りつめて、そして自若として自己の健康を維持し、子孫の繁殖を計つて居るのである。

彼等は多く棟割長屋と云ふものを生活の本據として居る、別に曲りなりにも一家を構へて居る者は上の上である、家の廣さは三坪は上の部、大抵二坪位、一家即一室で、妻子眷族芋の様にごろ〳〵して居る。村税とか地方税とかそんな者は出さぬのが多い、村役場で割り當てゝ見ても絶對に出すことも出させることも困難であるから、あきれて除外して置くのである。それで家賃は一ヶ月十錢位であるが、其れすら拂へなくて夜逃をやることが往々ある。若し不幸にして不漁が半月續かうものなら、それこそ事だ。薪一錢、米二合位から買ひに出掛ける、三厘持つて行つて酢と醤油を賣つて呉れろと云つて商人を困らせることもあると云ふ。斯うなると荷も錢に見積られる有りと有らゆる物は皆質屋へと運ばれる、質屋は彼等の唯一の金融機關とも云ふべき者で、必然かうなる可き手順になつてるのである。朝炊いた飯を入れた御鉢さへ質屋へ運ばれて、晝飯時には又持返らるゝ様な事も敢て珍とするに足らぬ。鍋釜さへ久しく質屋の庫に錆びて、二三軒聯合で一つの釜を用ひて平氣で不便を忍んで居るのである。

「ハ」彼等の妻子、

かゝる社會の常として女房の勢力は遙かに亭主の上にある。彼等の大多數は料理屋で懇意になつて、後に女房と直つた者であるから、亭主の弱點は料理屋以來引續き握つてるので、自然我儘の爲たい放題横着の爲たい放題となるのである。亭主を臀の下に敷くなどの事は何でもない。餘程頑強な亭主でも女房に怒鳴り付けられると大抵辟易して終ふ、嚊の怒鳴るのは丁度戰場で大砲を放つ様な者だ。彼は家庭に於ける花であると云ひたいが、決してそんな優しい美しい者ではない、彼は女王だ主宰者だ、家庭に於ける最高權力者であるが、なか〳〵手に負へぬ暴君である。彼は酌婦時代より野獸の様な蝦夷坊を相手として腕を鳴らした强の者であるから、其性質が甚だ男性的になつて居る。其代り一般女性の美點とも見る可きウィークネスとかデリケートとか扣へ目とか云ふ點は藥にしたくもない。彼等もよく野獸に似て居る、吼へる、叫喚く、罵る、噛付く、時には婦同志犬も食はぬ喧嘩をやる。男子よりも女の喧嘩の方が餘程多い。又彼等は亭主に劣らず賭博が好きだ。亭主が沖へ出て多くの危險を冒しつゝ働いてる間に、彼等の女房達は家に居て、婦同志相寄つては雜談に時を費したり、時には花符を弄び喧嘩を始める。平生斯の如くであるから服装などは随分自墮落な風をして、暑い夏の朝など湯もじ一つの裸のまゝ、井戸端へ手桶を下げて平氣でやつて來る、しかし常に髪結にかゝつて頭丈け光らすなど、なか〳〵贅澤なこともやる。

彼等が平生の内職としては網結きをやる者もあるが、これとて一日勤勉にやつて僅かに五錢内外を得るに過ぎぬ。又賃機を織る者もある、これは一日一反織つて十二錢位になるので甚だ割が善いが、資本として機器を求むるに五圓内外を要し、加之困ると反物を質に置いて終ふので、容易に安心して頼まぬから誰れも彼れもやるわけには行かぬ。其他

内職の種類は求めれば幾らも有らふけれども、彼等は直きに厭きて終ふから困る。尤も地引てもある時には一様に濵へ出て働くから働代として幾分を貰つて來るので、家に内職をして居るよりも遙かに增した。

彼等の子女は又親に似て手に負へぬ腕白者であるが、近來は村役場の強制が烈しいので、大分學校へやる者を見受けて來た、これは社會全體に取つて大に慶賀す可きことであると同時に、憐れなる漁師等に取つては甚だ喜ぶ可きことだ。彼等の前途にも光明が見えて來たと云つてよい。しかしそれは前途遼遠の事だ、現在彼等が子女の教育と云ふ可きのは怒鳴ることだ頭を張ることだ。

以上大體漁師の生活なる者を說き終つた積りである。

新刊批評

▲夢

石橋臥波
寶文館發行

夢の研究は西洋には珍しくない希臘羅馬の昔より近代に至れば愈よ多く、大抵の哲學者科學者は之に論及して居る、それもその笞夢は不思議のものとして先づ思索家の注意を引いたもの、夢と現と孰れが實有なるかの難題はデーカルトをも莊子をも同様に苦めたのだ、が我國には未だ此種の研究がない様である、そこを着眼せられた著者の考は吾人の敬服を禁ぜぬ處だ、ても之は我國における多くの史實、傳說、歌句、謠曲に見た事柄を歴史的に明断に分類されたといふ迄で、研究の材料ではあるがまだ研究そのものではない、勿論雜誌と古來の人の研究は載せてあるが自身の研究はない、從つて此書にあるのはサレー氏の夢の說に見える朴素的と宗教的の二項のみであつて科學的と名づくべきものはない、之は遺憾であるが著者は緒言に於て心理的研究を遺つて居るといはれたから、遠からず之を補ふものが見えるであらう、吾人は今よりそれを樂みとして居る、が此著の解釋中にも十分科學的ではないが大分近世の研究に近づいた說のあるのも面白い、例せば胸に手を當てゝ寢る時には氣血通ぜず故に物に押へられたる如き心生ずるなり、帶をしきて寢る時は蛇を夢見る如しなどあるのはそれなので、サレー氏のの中にも種々之に似通ふた話があつた様に記臆する、例せば膝を出して睡ると旅をする夢を見るとか、又睡眠者に外部から刺激を加へてはその都度揺り覺まして夢を聞いた實驗の中に、唇をいぢつてから目を覺まさした時には貼つてある膏藥を剝がれて、痛かつた夢を見たといふ様なことがある、比較すると甚だ面白い、志あるものは一冊を坐右に置いて熟讀するがよい（定價八十錢）

▲戀愛問題

三木天遊著
佐久良書房

之は小說といはうか戀愛論といはうか、恐らくは後者であろう、之を前者としては頗る難がある。昔大學で同窓の友であつた今井學士から思ひがけない電話で招待、飛び立つ想ひに靈洲村の寓居を訪ふた、寓居と

いふは化物屋敷の名が凡てを說明して居る處なので、此處で端なく物淋しげな友の口から戀愛論を聞いた、戀愛とは何ぞや、曾に情慾であるそれを何ぞや、眞聖とや、精神的愛があるとや、有つたとすれば情慾を思ひ斷つた刹那に止る、情慾ありとするも一面に精神的愛が伴ふとや、然らば何故に精神的愛のみを戀と名づけて眞聖がり、情慾的愛のみを戀とは名づけず、排斥するや、精神的が戀ならば情慾的も戀である、眞聖なものと不眞聖なものと、相殺すればゼロになる、ゼロに何の價値あるかといふのが結論、さほど精神的戀が欲しければ、思ひ合つて逢はぬて濟むか、さもなくば情死するか、或は孰れかの一方が死ぬるかでなければならぬ、神の教うる戀は此樣のものでない、それは唯戀愛のみといふ大悟徹底、之ぞ此一篇戀愛哲學の眞諦である、後は唯說明の材料としての實驗談と見たら差支ない、若しそうでないとすれば、初めに幽靈の美人は我妻である、此怪物さびた老翁はその父であると說きながら其處に括弧を置いて「此薄命美人の悲哀な事歴は云々又靈を別にして他日一篇の物語に綴らうと思ふ」と書きつけてある、僕の讀み樣が惡いのか知らぬが前の物語が眞實に友に語つたものならば下篇の物語は實に可笑いものだ、別に一篇とし樣といふその美人と結婚の顚末が細かに寫されて大團圓も朧氣ながら宛が附く樣だ、その宛が怪しいとすれば此小說は行くべき處まで行かずに筆を止めたとせねばならぬ、然らば全體は打ちこはしだと思はねばならぬ、いや宛を附けたといつてもそれは僅に上篇に美人が節操上から首を縊つたとあるのに對して、下篇では未だ死んで居らない美人の最後を想像したまでゝ、描寫は勿論足らぬ不完全な作である、又靈江といふ書生も擴張り働いて居ない人物、いやそれよりも寧ろ分らぬ人物となつて居る、筋の非難は此れ位にして、さて文品だ、之は坪內博士の序文では大分褒めてあるから其氣になつて讀んだが更に感服しない、如何もシヤチコ張つた齒切れの惡い文章で、苦心し過ぎて堅くなつたかと思はれる程滑でない、例せば「氣が轉されてゐてゐなかろーものなら」、之は或は誤植であろー、が此樣なのもある、「けれどもそれで好かつたので、全く我は刹那の後、洋杖を懸命に握締めて、氣を盛直した腹の底から、睨み詰めて居たから、此折柄云々」此樣な口調は如何であらう、僕にはトンと感服出來ぬ、而かしこんなに甚いのは上篇なので、中篇から稍よく、下篇に至ればずつと變る、更にその夫婦生活の經過の樣は描寫微細に入つて、節々首肯かしむる所があり、讀者の心を十分引付け行く力がある、が小說といふなら所詮非難は免れまい（定價六十五錢）

▲人生の要路　村上專精講演　森江書房發兌

名の示す如く人生の要路を、佛教界の碩學村上博士が、時々說示せられたもの、三十篇を集めたもので、宗教觀人生觀より佛陀の實在、佛陀の救濟に及 て居る、理路は極めて明快、一讀してよろしい（定價金四十錢）

▲リア王　戸澤姑射著　大日本圖書株式會社發兌

沙翁全集第五編として新に譯せられたもので、譯者は既にハムレット、ロミオアンドジユリエツト幷にオセロを譯した人、例によつて輕快な筆路、原文の妙味を味ふに足りる。（定價金八十五錢）

▲新作愛火　泉鏡花著　春陽堂發行

鏡花氏の新作脚本にして甚しくロマンチツクのもの也。鏡花氏の感興一度び動けば其筆恰かも靈あるもの丶如く忽ちに眼前に美の天地を現して讀者をして悠々として其裡に遊ばしむ。此篇亦氏の此長所を充分に發揮して遺憾なきもの、其精細なる批評に至ては之を精讀の上に讓らんと欲す。（定價七十五錢）

▲わかき日　平野万里作　左久良書房發行

明星派の歌人平野万里氏の歌集也、一讀の價値あり。（定價四十五錢）

▲日本文法てにをはの研究　廣池千九郎著　早稻田大學出版部發行

主として西洋文典の立場より日本文典を論及し、ウラルアルタイ系語の文法と印歐語の文法との或程度まで一致する事を示し、つひにテニヲハ名稱廢止の必要を說きたるもの也、學者としては新らしき研究にして篤學の士の一讀に値すべし。（定價一圓）

▲自信錄　村上專精著　丙午出版社發行

「他力を呼び起すものは我れの自力である、又我が自力をして其効空しからしめざるものは彼の他力である。故に吾人の本務は自力的發動にあり」といふ趣意を縱横に說いたものである。確かに傾聽すべき處少くない（定價五十錢）

▲中村正直傳　成功雜誌社發行

自助的人物の典型として故中村敬宇翁の傳記を書けるもの也。此明治の君子人の一生には吾人の學ぶべき所極めて多し。表紙の原稿の文字は餘りに汚なくして却てなくもがなと思ふ。（定價四十錢）

▲保險のすゝめ　安田善次郎序話　文明堂發行

保險の必要より効能、種類、手續等に至るまで詳細に記せるもの也。（定價二十五錢）

▲佛敎之眞髓　佐々木月樵著　文明堂發行

浩々洞派の一人、佐々木月樵氏の著也。最も通俗に佛敎の眞髓を說明せんと試みたるものにして何人にも解り易し。（定價廿錢）

▲國文學史提要　佐々政一著　金港堂發行

本書は、斯道に精通せる佐々醒雪氏の近著也。近々七十頁の小册子に過ぎざれど、能く其要を摘み精を萃め、規定の時間に、當嵌る様物せる

ものなれば、中等諸學校の教科書として歡迎さるゝや必せり。尙、志あるものは、本書と共に、國文學史辭典（定價八十錢）を參看す可し。（定價貳十錢）

▲新教育講義　谷本富著　六盟館刊

谷本博士。歸朝以來初めての大廣舌也。繙讀一過、吠ゆるあり、猛けるあり、笑ふあり、罵るあり、冠するもの、角帶するもの、展するもの跣するもの、千摺百態、眞に讀者をして應接に遑のらざらしむ。げに一部の雄辯術とや云はん。（定價貳圓）

▲教育大辭書（第一册）同文館發行

余輩は、是の眞面目なる大事業に向つて、深く敬意を表す。されど、既刊の第一册に就いて見るに、まま飽きたらぬふしぐ／＼なしとせず。

（イ）先づ執筆者姓名錄に、上野、藤田、東、野田、南波、關等を加へざるは奈何。

（ロ）同じ傳記にても、死亡年月を明記せるあり、又然らざるもありて一定せず。參考書の如きも、編者の匕加減にて、區々になりなるは、不統一の譏を免れず。

（ハ）管子、韓非子、勸學篇、家範、韓詩外傳、千祿字書、類鏡、等を入れざるは奈何。

（ニ）新井白石、大鹽中齋、稻生若水、秋山玉山等を脱せるは奈何。

（ホ）觀念、換氣法、オルガン、給諾、和復文、女今川、御伽噺等の見えざるは奈何。

要するに、八十餘名の執筆者は、互に議を取りあはせ、今一骨折られんことを敢て望む。（定價貳圓五十錢）

▲昭代　日暮里十四番地　千駄木社發行

前月の新聞紙に現はれたる、思潮、文藝、その他注目すべき記事を撰修して掲載する月刊雜誌、去月五日初號を出した。（定價一部二十錢）

▲週報　芝區神谷町九　週報社發行

週刊の文藝雜誌で去月三日を誕生日として產聲を擧げた、某新聞紙は雜誌の體裁に近づきつゝあるやうに思ふが、雜誌が新聞に近づくわけはあるまい、週刊てはちと急がしい氣もする、最近の評論なぞに於いて大いに振つたら好いてあらうか（一部金五錢）

▲ホノホ　讀賣新聞社發行

讀賣新聞社發行の月刊雜誌、「中學文壇」の改題なり。（一部金拾壹錢）

▲投書募集▼

東京遊覧者の見逃がすべからざる名勝十個所

大博覧會の開始、方さに目睫の間に迫りて、國内の四方より東京に集り來る人漸く多からんとす。此等の人が大博覧會の盛況を目撃するの外、更に市内の名勝を探らんと欲するは情の固より然る所なるが、扨東京の名勝を悉く尋ね歩くには多くの時日と多くの費用とを要すべし。多くの時日と多くの費用とを有せずして名勝を探らんとせば、勢ひ選擇を加へて遊覧すべき必要に迫らる。若し選擇せずして徒らに遊覧せば、折角の名勝を見落して後悔すべきは知れ切つた事也。依て吾社は玆に「東京遊覧者の見逃すべからざる名勝十箇所」の投書を募集し、以て四方より集り來る地方人士の便利を圖らんと欲す。蓋し天下公衆の意見は一個私人のそれよりも比較的公平正當なるべきを信ずれば也。今其の投書に關する細則を擧げんに

▲〆切期限　三月十五日

▲投書手續　反省社宛のはがき（表に朱にて東京名勝十個所投書と書くべし）か又は市内の投書函（岡崎屋（本郷六丁目）盛春堂（本郷元富士町）新橋堂（京橋金六町）福島書店（三田一丁目）東京堂（神田表神保町）好文堂（牛込通寺町）同文館支店（早稲田大學前）等にあり）に入れること。

▲投書字數　五百字以内

▲投書樣式　十箇所の名を擧げ、且つ之に制限内の字數にて説明を附するもよし。

▲名勝の種類　何にてもよし。未だ衆俗に知られざるも而かも眞に見所ある場所の如き最もよし。

▲發表の方法　四月一日發行の中央公論、即ち「春期大附録號」に於て十箇の當選所に投票數を附して發表すべし

▲投書文の懸賞　投書文中の文章最も勝れたるもの又は觀察の奇抜なるものは之を誌上に發表し、之に「春期大附録號」一部を進呈すべし。（故に文章を採用せられんとする人は宿所氏名を明記すべし。）

本郷區西片町十番地　反省社